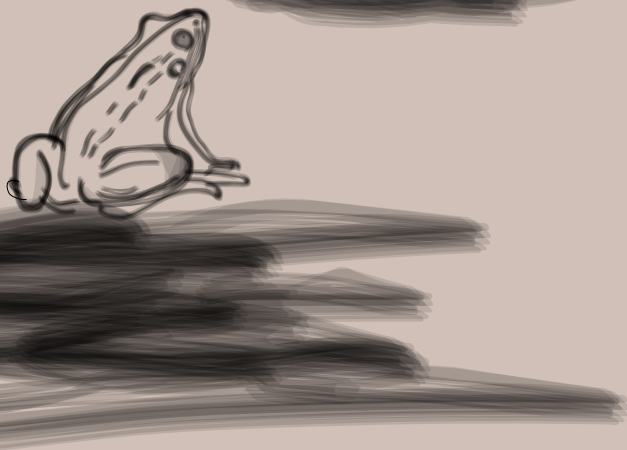


# 妄想アマガエル日記



## 妄想アマガエル日記ープロローグ

毎日、アマガエルを見かけるので、彼らは私にとってとても身近な存在である。しかし、その見かけた瞬間の彼らしか知らない。

だけど、彼らは私と同じ時空間を生きているわけである。

つまり、彼らを見かけた時だけが彼らがこの時空間にいるわけではなく、ずっと彼らはいるのである。

そんなことを考えていると、彼らが一日をどのように過ごして、どのように考えているのかを勝手に想像してみたくなった。想像というよりはただの妄想である。

そこで、あまり見てくれる人もいないので、このコトコトを使って、架空のアマガエルの日記を妄想してみようと思った。主役はもちろんアマガエルである。名なんて無いが、そうすると区別するのが難しそうなので、『銀次郎』という名をつけることにした。意味はまったくないし、日記なのでこの名が出てくることはほとんどないと思う。

では、気ままに架空のアマガエルの日記を妄想していこうと思います。

豊田ホタルの里ミュージアム

学芸員 川野敬介



カエルになって今日で10日目だ。

つい最近まで水の中にいたけれど、その時のことはあまり覚えていない。

ただ、水の中にいた時は音を聴いたことがなかったし、風を感じることもなかった。少しずつ脚がでて、尾にあったヒレがなくなっていくに従って、水の中では暮らしにくくなった。オタマジャクシの頃は尾のヒレを少し左右に動かすだけで簡単に前に泳ぐことができたが、それができなくなったし、脚が出てからは水の中で息が長く続かなくなった。脚が皮膚を破って出てきた時は不思議と少しも痛くはなかった。覚えていることと言えば、これくらいだ。

10日前の雨が降る夜、遂に尾のヒレがなくなったので陸に上がってみたら、普通に歩くことができた。だから、水の中の生活を終えて、陸で生活することを決めた。歩くだけでなく、ジャンプもしてみたが、これも案外簡単にできた。だから、元々いた田んぼから少し遠くに移動することにした。

少しでもよさそうなところを探して歩きまわっていたら、いい感じの隙間を見つけたので、とりあえず、そこでその日は夜を明かした。

その次の日、日が出て明るくなったので外に出ると、前日の雨が嘘のように晴れていて、日の光が地面を照り付けていた。

水の中での生活をやめて陸での生活を始めたものの、陸での生活はまったく違った。まず、音がうるさいし、風を感じるし、何より暑い。水の中もそれなりに暑かったが、陸では日の光が直接皮膚に当たって暑いというか痛いし、風が体を乾燥させてしまう。

前日の日隠れていたのは、どうやら朽ち木の隙間だったようで、その朽ち木は雑木林のようなところに無造作に置かれ、雑木林がいい具合に影を作ってくれて涼しかったようだ。

さて、あれから10日、この居心地のいい朽ち木の隙間からあまり動かずにいたが、今晚少し移動してみるか。今日は夕方少し雨が降って、地面が湿っているし。

妄想アマガエル日記(2) — 7月16日(日) くもり

今日は朝からいい天気だ。

雲は多いが、日が照って、とても眩しい。そして、風が強く、体が乾燥してしまう。

さて、昨晚のことを記しておくことにしよう。

昨晚は、月もなく、風が心地よい涼しさで、冒険するには最高の夜だった。

朝からずっとあの居心地のいい朽ち木の隙間にいた。でも、夕方頃少し雨が降ったので、外に出てみた。丁度、背中に卵を背負ったクモが目の前を走っていたので、飛びついてみたら運よく食べることができた。その後、小さなコオロギがちょうど目の前に着地したので、その瞬間に飛びついて食べることができた。また、雨が降ったからなのか土の中からミミズが出て地面を歩いていたので、それも食べることができた。しばらくそのままじっとしてたら、アリのワラジムシも目の前を歩いていたが、クモとコオロギとミミズを食べてお腹がいっぱいになったので、それらはスルーした。少し食べすぎた。

やっぱり、クモとミミズは美味しい。なんといっても柔らかい。アリはどうも苦いし、たまに口の中を噛むからあまり食べたくはない。これまで食べて、吐き出してしまって、もう二度と食べたくないのはカメムシだ。あれは、食べたもんじゃやない。特に、最初食べたのはマルカメムシという奴らしいが、あれは見たくもない。

さて、お腹がいっぱいになったので、暗くなるまであの居心地のいい朽ち木の隙間に戻ることにした。

昨夜は、月がなく暗くて、風が涼しくて、とても心地よかった。

そして、気づいたら、朝だった。

いつの間にか寝てしまっていたようだ。

なんてことだ！！

昼間は日が出ていて出歩くのは危ないからじっとするしかない。

今夜こそは！

### 妄想アマガエル日記(3) — 7月17日(月) 晴れ

昨夜は、風がなく、じめじめしていて暑かった。カエルの私からしたら、最高の夜である。月もなく、暗い夜でもあったが、近くの街灯の光が一筋こちらに届くようで、この朽ち木の辺りは夜でも完全には暗くはならない。

一昨日は、いつのまにか寝てしまって、移動できなかった。

その反省を踏まえて、昨夜は暗くなるまでこの朽ち木の隙間の入り口付近でじっと身を潜め、暗くなったらすぐに出て行こうと準備していた。

いよいよ、大冒険だ！

そう思いながら、じっと入り口付近で暗くなるのを待っていると、どこからか何かの視線を感じた。

.....

どうやらそれは、斜め右下に転がる石の下からこちらを見ているヌマガエルの視線だった。

「あつアイツは見覚えがある。確か、同じ夜に同じ田んぼから出てきたカエルだ。アイツもこんな近くにいたのか。」

「ところで、なんでアイツこっちを見ているんだ？」

ヌマガエルが隠れている石は、スイカ大くらいの大きな石で、ポツンとその石だけが転がっていた。そして、その石の下にはアリが列をなして入っていて、どうやらアリの巣があるようである。その右端の隙間にそのヌマガエルは隠れてこちらを見ている。

「アイツも今夜あたりどっかに移動するのかな？さすがにアリがあれだけいっぱいいたら、噛まれたりして大変そうだしな、日も当たって暑そうだし、よくあんなところに隠れるもんだ。」と思った瞬間、嫌な予感を感じた。

「まさかアイツ、この居心地のいい隙間を狙っているんじゃないか？今夜、私が出て行くのを待っているのではないだろうか？いや、間違いない」そう思い出すとソワソワしてきた。

「でも、今夜ここを出て行くのだから、別にアイツにここを取られてもいいじゃないか」そんな思いもした。

それから、「こんな居心地のいい隙間を他のカエルに取られるのは嫌だな」と、「でも、もっといい隙間を探す旅に今夜出るのだから関係ないことだ」、「いや、こんな居心地のいい隙間が見つからなかったら戻るところがなくなるんじゃないか」と自問自答していた。

そして、気づいたら朝になっていた。

なんてことだ！！

気づいたら、アイツはどっかに行っていないし。。。 （ここを狙っていたわけではなかったらしい）

今夜こそは！

俺の名前は小太郎。最近カエルになったばかりのヌマガエルだ。

俺は冒険家だ。だから、同じところにじっとしたりはしない。

カエルになってそれほど日数は経っていないが、これまで色々な世界を見てきた。もちろん、危険な目にもあったが、冒険家なのだから仕方がない。

田んぼから出てから、色々な物を食べてみた。何が美味しいか、よくわからないからだ。クモとミミズは美味しかった。アリは苦かった。ナメクジはベタベタして食べられなかった。

カエルになって4日目、草むらの中を歩いていると、クズが地面を這うように生えていて、その葉の上に丸い虫が何匹かいるのが葉の裏からシルエットで見た。試しにそれを食べてみようと思っていると、1匹のアマガエルがそれを食べようとしていた。

「先を越されたか！まあ、ここで隠れてアイツがいなくなったら食べてみよう。」

「おつ、アイツは同じ夜に同じ田から出てきたアマガエルじゃないか。アイツは気づいていないだろうが、田から出るときに俺の頭を踏み台にしたんだ。」

葉に開いた孔からそっと見ていると、そのアマガエルが悶絶して虫を吐き出しはじめた。とても苦しそうだ。

「うわ〜 可哀そうにあの虫は不味いんだな〜 食べなくてよかった〜。にしてもアイツまだ悶絶してる。。。ふ〜 ああはなりたくないな〜」

そして、そのまま草むらの中を進み、冒険を続けた。



一昨日の夜、この辺りを一周して雑木林に戻ってきた。その夜は、月もなく暗くて、風が心地よくて、とても冒険日和であった。色々な食べ物も食べることができた。雑木林を通り抜けようとすると、端っこに朽ち木が何個か転がっているのが見えた。ちよ  
うど、この朽ち木の辺りだけ街灯の光がわずかに照らして完全には暗くならない。  
そして、その一つの間隙からカエルの足が外に出ているのが見えた。

「ん？あれはなんだ？」

その朽ち木の隙間に近づいて見てみると、どうやらそれはアマガエルの足のようだった。隙間の奥を覗き込むと、

「あつ、このアマガエルは数日前に虫を食べて吐き出していた奴だ。なんて寝相の悪さだ。しかも、なんて無防備なんだ。ふふ、俺はこうはなりたくないな」

そして、そのまま水たまりを泳いで、冒険を続けた。

昨日の夕方、この辺りを一周して雑木林に戻ってきた。日が当たるけど、まあ暗くなるまでの間隠れるだけなので、大きな石の下に身を潜めることにした。

「さて、今夜はどんな冒険が待っているのだろうか」

ふと、上を見上げると、朽ち木の隙間からアマガエルが外を見ていた。

「またアイツだ。この前は虫を吐き出していて、昨日は朽ち木の隙間から足を投げ出して爆睡していたけど、今日はなんか真剣な顔しているな」

「うわっ、目が合ってしまった。まあ、俺のことなんて覚えてもないだろう。さて、今夜の冒険が楽しみだ！」

暗くなってきたので、石の下から出ようと上体を起こすと、アイツが視界に入った。

「うわっ、なんてアホズラで、ぼくとしてゐるんだ！」

「ほんと、ああはなりたくないな〜」

そして、そのまま近くのコンクリート製の側溝の中に入って、冒険を続けた。

妄想アマガエル日記(5) — 7月18日(火) くもり

今日は、朝から曇りで、時折雲の隙間から日が差ししていた。雨は降らなかつた。

一昨日の夜は、ヌマガエルのせいで、色々考え過ぎて夜を明かしてしまった。だから、昨夜はその反省を踏まえて、暗くなる前に朽ち木の隙間を出ることにした。

まだ日が沈む前の紅い空を背にして、朽ち木を出た私は、とりあえず、草むらの中を進んだ。どれくらい進んだ頃だろう、その先には、小さな川があつて、流されそうになりながらその川を越えた。

その先には地面がレンガで覆われた広大な大地があつた。そのレンガはまだ昼の灼熱の余韻を残していて、とても熱かつたがそんなこと気にしてはいられなかつた。

そして、いつの間にか再び草むらの中を進んでいた。

草むらの中にはバッタやコオロギをはじめ、ゴミムシダマシとかカタツムリとか、これまで見たことがなかつた生き物を見ることができた。

「なんて、勇敢なんだ！」

とても自分が誇らしく思えた。

「やればできるじゃないか！」

草むらをさらに進むと、草むらが途切れ、おもむろに雑木林が現れた。

「ん？なんか見たことがある雑木林だな、」

「あっ、あの隅にある朽ち木は、いつもの居心地のいい朽ち木じゃないか！」  
「どうやら、一周してきたようだ。そして、朝になっていた。」

結局、一応冒険はしたし、今日はまたいつもの居心地のいい朽ち木の隙間で休むことにしたのである。

少しは進歩した。

### 妄想アマガエル日記（6） — 7月19日（水） くもり

一昨日の夕方から昨日の明け方までの大冒険の影響で、脚が筋肉痛になってしまったので、昨日の朝から今日までずっとこの朽ち木の隙間でゆっくりしていた。

ただ、その間、私にとってとても大変なことがあった。

昨日の朝、大冒険の末にいつの間にか、この朽ち木に戻ってきてしまった私は、この隙間でじっとしていた。ふと、右手を見ると手の甲が茶色になっているのに気づいた。

「ん？いつも手は緑色をしていたのに、なんで茶色になっているんだ？」

はじめてのことだったので驚いたが、大冒険のせいでも少し疲れているからだろうと思った。そこで、少し寝ることにした。

どれくらい寝たことだろう。大冒険のせいもあって、昼過ぎまで寝てしまっていた。

「そういえば、寝る前に見た手の色はどうなったのだろうか、？」

「あれ？まだ茶色いまだ！」

「どうしてしまったんだ！」

そこで、首をよじって見える範囲の脚や肩を見てみた。

すると、見える範囲すべてが茶色くなっていた。

「なんてことだ！！あの綺麗な緑色はどうしてしまったんだ！」

それから、自暴自棄になった私は草むらを彷徨い歩いた。

「私は、なんか大変な病気になってしまったんだ！」

草むらの中にいるアマガエルは皆、緑色をしている。

「私だけが茶色だ。」

「たぶん、このまま黒くなって、死んでしまうんだ。」

ふらふらと彷徨い歩き、疲れ果てた私はいつもの朽ち木の隙間に戻ることにした。

そして、ふと朽ち木の傍のコンクリートブロックを見ると、茶色いアマガエルが張り付いているのが見えた。

「アイツも私と同じ病気で茶色くなっているんだな。。。」

朽ち木の隙間に戻った私は、うつ向いて下を見ると手の甲が緑になっているのに気づいた。

「あれ？戻ってる！！」

そして、さつき見たコンクリートブロックにいたアマガエルも今はクズの葉の上にとまっついて、よく見るとさつきより少し緑色に変化してるように見えた。

「ん？もしかして、体の色が変わるのか？」

「さつき草むらを歩き回ったから、周りの色に合わせて体の色が緑色になったのかもしれない。」

・・・

「なんてスゴイ体なんだーーーーー！」

「まるで、魔法使いではないかーーーーー！！！」

・・・

「もしかしたら、口から火を吹いたり、指先からレーザー光線が出せたりするのかもしれない！！！」

それから、一晩中、火を吹いたり、レーザー光線を出そうとしたり、思いつく限りの可能性を試してみた。

けれど、さすがに色が変わる以外は、できそうになかった。

だが、まだわからない。もしかしたら、その内、空を飛んだりできるようになるかもしれない。

自分の能力が恐ろしい。。。

僕は、最近カエルになったばかりのトノサマガエルです。

生まれも育ちもこの小さな水路で、この水路はわずかな流れがあるけど、その一部に少し広くなったところがあって、そこは水が溜まって流れがありません。そこで、オタマジャクシの頃を過ごし、最近カエルになりました。

同じ夜に一緒に陸に上がってカエルになった七助と六助といつも一緒にいるけど、同じ卵塊から生まれたから兄も弟もありません。ただ、七助は少し太っていて、僕は中くらいで、六助は痩せています。六助は食べても食べても太らないようで、この中では一番よく食べるけど、痩せています。

さて、カエルになってからもずっとこの水路で過ごしているので、他の世界はよくわかりません。

この水路は便利なもので、餌となる小さな生き物は多いし、水路の上に木が覆っていると涼しい。そして、隠れるところが多い。

数日前、1匹のアマガエルが水路を渡ろうと泳いでいました。

けれど、そのアマガエルが泳いでいたところは、この水路の中でも唯一流れが速いところで、そのアマガエルは苦労していました。

傍から見れば、少し上流に行けばピョンとジャンプするだけで渡れる幅が狭いところがあるのに、どうしてこのアマガエルはわざわざそんなところを泳いで渡ろうとしているのか？

七助と六助と一緒に、大きな石の上からその様子を見ていました。

「たぶん、あのアマガエルは体を鍛えようとしているんじゃないか？」  
僕がそう言うと、

「いや、見てみるよアイツの顔。体を鍛えようとしているんじゃないか、困った顔してるんじゃないか！」  
七助が、アマガエルを指差して言ってきた。

「たしかに、体を鍛えようとするなら、あんな困ったような表情はしないか、」  
僕がそれに納得すると、

「たぶん、あのアマガエルは、偶然、あそこを渡ろうとして、上流にそんなところがあるなんて気づいていないんだろ。」  
六助が、アマガエルを擁護するように言った。

「でも、あそこ以外、ほとんど流れなんてないじゃないか。あそこだけ、あんなに流れがあるし、幅が広いんだ。なんか意味があるんだらうよ。」

と僕が、腕を組んで想像するように言った。

「あつ、ようやく向うの岸に泳ぎついた。なんてザマだ。疲れ切っているじゃないか！」  
七助が少し呆れた感じで言った。

さて、これからあのアマガエルはどうするんだらうか？

その様子を見てみると、水路を上流側に移動していった。

そして、上流側の水路を見て、口と目を見開いて、ショックを受けていた。手で口を覆っている。

どうやら、泳がなくてもこの水路を渡れることを知って、ショックを受けているようだった。

六助が言っていたことが、合っていたのか。。。

皆がそう思った。

そのアマガエルの背中を見ながら、3人でしんみりとしてしまった。

そして、

「運が悪いアマガエルだな、」

3人同時に、そうつぶやいた。

妄想アマガエル日記(8) — 7月24日(月) 晴れ(ツチガエル花子編)

私は最近カエルになったばかりのツチガエルです。

でも、産まれたのは去年の夏くらいで、オタマジヤクシで冬を越したので、今年カエルになったアマガエルとかヌマガエルに比べると大きさは同じくらいだけど、人生経験が私の方が上かな、。

こっちはあの寒い冬を越したのだからね。

だから、同じくらいの大きさの今年カエルになったアマガエルとかヌマガエルとかトノサマガエルを見ると、少し子供っぽく見えてしまいます。

私は、水路の近くの花壇に住んでいて、ここは、水辺にも近いし、餌も多いし、陰で涼しい。そして、眼下にはレンガで覆われた広大な大地が広がっています。

私のようなピチピチのギャルが住むにはまあまあのところですよ。

さて、数日前、夕方近くに涼しくなるのを待っている間、花壇からレンガの大地を見ていました。花壇はレンガの大地を一望できます。

その日は今日と同じで天気がよくてレンガの大地は昼の灼熱で熱せられていて、花壇から見ているだけでも熱そうでした。



そんな時に、水路の方からヘトヘトになった1匹のアマガエルがやってくるのが見えました。

「まさか、あの状態でレンガの大地に行くわけはないよね。」  
と独り言を言いました。

でも、そのアマガエルは迷うことなくその大地を進んで行ったのです。

「えっ、あのレンガの上を歩くんなんて、有りえないでしょ！」  
私は驚きました。

どうして、そのアマガエルがああ熱いレンガの大地を進まなくてはいけないのか、私にはまったくわかりません。もう少し待ったらレンガは冷えるのですから。

アマガエルはそのまま、陰を歩くわけでもなく、昼の灼熱で熱せられたレンガの上を一直線に進んで行ったのです。

私は、そのたくましい後ろ姿を見て、一目惚れしてしまいました。

これまで、同じ年くらいのアマガエルやヌマガエル、トノサマガエルなんて子供っぽくて眼中になかったのですけど、あのアマガエル様だけは違ったのです。

そのたくましいアマガエル様は、その後レンガの大地の先の草むらの中に消えて行ってしまわれました。  
夕方の紅色に染められたあのアマガエル様の後ろ姿が未だに忘れられません。

いつかまたあのアマガエル様に、お会いしたい。

ここ数日、日記を書いていなかった。

それは、日記がどっかにいってしまっただけで書けなかったからだ。

「はて？どこに置いたんだろうか？」

数日前を思い出すことにした。

「確か、大冒険をした次の日まではあった。次の日に大冒険のことを書いたのは覚えている。その次の日に、体の色が茶色になって慌てたことも書いたからその次の日もあったんだ。」

でも、その後に日記をどこに置いたのかまったく思い出せない。

「もしかしたら、寝ている時にどっかに蹴飛ばしたのかもしれない。」

自分の寝相の悪さはなんとなくわかってきた。朝起きたら朽ち木の隙間から落ちていたこともあったし、どうしてだかわからないが、朽ち木の上で寝ていたこともあった。

朽ち木の隙間から落ちたとしたら、その下にあるかもしれないと、隙間の下を探してみたけど、見つからなかった。

「いったい、どこにいってしまったのだろうか？」

「そういえば、最後に日記を書いた夜に日記を持って散歩に出たな、」

その夜は月が綺麗だったので、月を見ながらこれまでの日記を読もうと思ったのだ。

「散歩のときは確か、朽ち木から出て、近くのコンクリートの塀をよじ登って、塀の上を歩きながらヤナギの木の下に行ったな、」

「あつ、塀をよじ登った時に日記を近くのきのこの上に置いた気がする！」

すぐに、そのきのこがあったところに行ってみました。けれど、そこにはもうきのこはなくて、腐ったきのこだった物があるだけ。

「あつ、そういえば、このきのこの上に日記を置こうとしたけど、ナメクジがいたからやめたんだつた」  
そこで、改めて考えなおしてみました。

「ん〜、塀の上を歩いている時に落とすのだろうか？」  
塀をよじ登って塀の上から下を見ながら探してみました。しかし、見つかりません。

「あつ、そういえば、塀の上から落ちたらいけないと思って、日記をいったん朽ち木の隙間に置きにいったんだつた」  
そこで、ふたたび、朽ち木の隙間に戻ることにしました。

「ん〜、いったいこの隙間のどこに置いたかな〜」  
いくら考えても思い出せません。

朽ち木の隙間は、ちょうど自分が立てるくらいの高さがあつて、奥は少し腐っていて、湿っぽくなつていて、立って歩くと5歩くらいの奥行があります。途中には、何もありません。

その隙間をぐるっと見渡しても、日記はどこにもありません。それは、そうです。これまで何日もここは探してあるのですから。

「おかしいな〜、どこにいつてしまったのだろうか、？」

ただ、その隙間から外を見ると、少し風景が違ふことに気が付きました。

「あれ？いつも見ているあの大きな石が見えなくなつてな。」

そこで、朽ち木の隙間から外に出て、その隙間を見てみることにしました。

すると、朽ち木が少し動かされたみたいで、これまで使っていた隙間と位置は同じだけど、違う隙間にいたようでした。

朽ち木をよじ登って、これまで使っていた隙間に入ろうとすると、なんとその隙間には、私と同じくらいの大きさの青色のアマガエルが頭をこちらに向けて、寝転んでいたのです。

「あのくすみません。。。」

「以前、この隙間にいたのですけど、ここ数日は間違って別の隙間にいまして、この隙間を返して頂けないでしょうか、？」と寝転んでいる頭の上を覆うように頭を出して、恐る恐る聞いてみました。

すると、その青いアマガエルは、

「わっ！驚いた。。突然なんなんだい？」

「・・・あつ、もしかして、この日記は君のかい？」

と、上半身を起こして、あくびをしながら日記を出して聞いてきました。

「はい」

間髪入れず、答えました。

「君は変な奴だな、日記なんて書くなんて。なんのためにこんなもん書くんだ？」

と、青いアマガエルは姿勢を変えて、あぐらをかきながらまっすぐこちらを見て聞いてきました。

「特に、意味はありませんが、しいて言えば、オタマジヤクシの頃は毎日が楽しかったような気がするのですけど、カエルになった時にその時の記憶をほとんど忘れてしまったのです。だから、記憶を留めるために日記を書こうと思ったんです。」と、真面目に答えました。

「なるほどな、確かに、オタマジヤクシからカエルになった時に、俺も記憶を失われたな、。」

青いアマガエルは私が言ったことに納得してくれたように見えました。

「気に入った。これから仲良くしようじゃないか！俺の名前は与助だ。」  
青いアマガエルは右手を差し出してきました。

私もそれにこたえるように手を出して握手して、自己紹介をしました。

「じゃ、これからは友達ということで、よろしく！」  
与助がニコニコしながら、そう言ってきました。

「あの〜、ところで、この隙間は返してもらえるよね、？」  
友達になったので、気軽に聞いてみました。

すると、ニコニコしながら断られました。

あの笑顔はずるいな〜、何も言えないよ、〜、と思いながら、日記を持って、間違った隙間に戻りました。

「まあ、いつか。この隙間も自分が数日気づかないくらい居心地がいいし。」

はじめて友達ができたので、いい一日になりました。

## 妄想アマガエル日記 登場蛙の紹介

妄想アマガエル日記は、空いた時間に何も考えずに書くので、自分でもどのような内容になるか、どのような登場蛙が出てくるかわかりません。

ただ、いつの間にか主人公以外に登場蛙が増えてきたので、主要キャストはこれくらいに留めるために一覧にしておきます。

まあ、そもそも「いいね」もあまり付きませんし、知り合いから「読んでるよ」なんて声も聞こえてこない誰も読んでくれないものなので、わざわざこんなことを書かなくてもいいのですけどね。。。とりあえず、勝手に書いているものなので、勝手に紹介しておきます。

●主人公

名前…銀次郎（ぎんじろう）

種類…アマガエル

性格…一生懸命、おっちょこちよい、心配性

●友達

名前…与助（よすけ）

種類…アマガエル（先天的に黄色の色素がないので、体は青色）

性格…爽やか、元気

●今のところ不明

名前…小太郎（こたろう）

種類…ヌマガエル

性格…冒険家、強気

●今のところ不明

名前…八助（はちすけ）

種類…トノサマガエル

性格…優しい

※七助（ななすけ）と六助（ろくすけ）と一緒にいることが多い。水路に住んでいる。

●今のところ不明

名前…花子（はなこ）

種類…ツチガエル

性格…ギャル、銀次郎に一目惚れ

どうでもいいことですけど、当館の敷地内に生息しているカエルはこの4種（アマ、ツチ、ヌマ、トノサマ）なので、たぶんこの4種以上に増えることはないと思いますが、以前ヒキガエルを1匹だけ見たことがあるので、あとヒキガエルが増えるかもしれません。。。

### 妄想アマガエル日記（10）—7月30日（日）晴れ→アマガエル与助編→

俺は、小さな水たまりでオタマジャクシを過ごし、最近カエルになったアマガエルだ。

オタマジャクシの頃を過ごした水たまりは、俺がカエルになってすぐに干上がってしまった。

ただ、カエルになって数日はその水たまりから離れたところにいたが、数日後、雨が降った翌日に寄ってみたら、また大きな水たまりになっていたので、懐かしくて少しその水たまりに入っていた。

水面に写るカエルになった自分の姿を見ると、全身が綺麗な青色をしていた。その日は昨日の雨が嘘のように晴れていたの、空の青色が水面に写っていたので、その青色かと思ったが、どうやら俺は青色の体をしているらしい。その時はじめて知った。

水面に写る空の青色と自分の青色がなんとも綺麗だと自分で見とれてしまった。

ただ、見渡しても周りにいるアマガエルはみんな緑色をしていた。

「どうやら、俺は他のアマガエルとは違うらしい。」そう思った。

そこで、いろいろなアマガエルを見るために移動することにした。

まずは、地面がレンガで覆われた大地があったので、そこを通ろうと思ったが、昼の灼熱で熱くなっていそうだったので、すこし冷めるまで近くの花壇の陰に身を隠して冷えた頃を見計らって進むことにした。

進み終わった頃には、日が暮れていたが満月だったので周りは明るかった。そして、風がひんやりとして涼しかった。

レンガの大地の先には花壇があつて、その下の草むらには、全身が緑色のアマガエルが何匹もいて、小さなコオロギを競うように食べていた。

「どうやら、この辺りにいるアマガエルはみんな緑色のようだな。」  
確認するように独り言を言った。

そして、その先には水路があつた。

水路は泳いで渡らないと向うにはいけそうになかったが、他に渡れるところがないか周りを見てみようと少し上流側に移動してみた。すると、ピョンとジャンプするだけで渡れる幅が狭いところがあつたので、そこを渡ってみた。

その水路には、ツチガエルとトノサマガエルが多く、アマガエルはあまりいないように見えたが、水路の近くの花の上で何匹もアマガエルが寝ているのが目に入った。ただ、それらのアマガエルも全身緑色をしてた。

「そうか、アマガエルというのはどうやら緑色をしているのがふつうのようだな、」  
特別な色をした自分がなんとも誇らしかった。

その先の草むらを進んで行くと小さな雑木林があつて、その縁を進むとコンクリートブロックの背丈の低い壁があつた。



「よし、少しこの壁をよじ登って高いところから周りを見てみることにしよう」自分に言い聞かせるように言った。

壁をよじ登って周りを見渡すと、その壁のすぐ下にいい感じの朽ち木が何個か転がっているのに気づいた。そして、その一つの隙間には自分を誘うように近くの街灯の光が一筋射していた。

「おっ、なかなかよさそうな朽ち木だ！」

その朽ち木に近づくためにその壁を登り始めると、下から体の大きな茶色のアマガエルが1匹登ってきた。

すれ違う時に、

「君は、体の色が茶色をしているんだね！」

と、声をかけてみた。

すると、

「あゝ、この色？君は最近カエルになったのかい？」

「なら、まだ知らないか。俺たちアマガエルは周りに合わせて勝手に体の色が変わるんだ。だから、今は茶色だけど、草むらにいたら緑色になるし、白い壁にいたら白色になるんだ。」

さらっと教えてくれた。

「へえゝ、そうなんだ！じゃ、俺は今は青色をしているけど、それは空の青色が水面に映った水たまりにいたからなのか！」自分の青色が気に入っていたので、他の色に変わるの嫌だなくと思っていた。

「いや、君は青色なんだよ。」

「えっ、俺は青色以外の色に変わらないの？」

「そうなんだ。君みたいな色のやつに以前会ったことがあるけど、そのカエルは色が変わらないって言ってたし、長い間一緒にいたけど、変わったところは見たことないから。」

「そっかあ。じゃ、青色のままなのか！ よかった〜！！」

「青色を維持するためにまたあの水たまりに戻らないといけないかと思ったよ〜」

「教えてくれてありがとう！」

その大きなアマガエルに御礼を言っつて、朽ち木の隙間の前に行つてみた。

すると、その隙間はちょうど自分が過ぐすには広さもちょうどいいし、風も涼しくよさそうなところだった。

「よし、当分ここで暮らそう。」

そう思った時、足元に、1冊の日記が落ちているのに気づいた。

### 妄想アマガエル日記（11） — 8月2日（水） 晴れ〜アマガエル与助編〜

なかなかこの隙間は居心地がいい。

涼しい風が通るし、眺めもなかなかいい。

そんなことを思いながら、ゴロンと寝転んで天井を見ている、ここに来た時に見つけた日記がどうしても気になつてしま  
う。。。う。

「俺は人の日記を無断で見るなんてダサイことはしたくない！」

「どこにでもいる緑色のアマガエルとは違って、俺は青色をしたアマガエルだ。そんな俺が無断で日記を見るなんてありえない〜」

壁に立てかけた日記にチラッと目をやったが、すぐに天井を見上げた。

「さて、今夜あたりどっかに行ってみるか、その計画でも考えることにしよう」  
日記のことを忘れるために、違うことを考えることにした。

「そういえば、これまで色々なことがあったな。ここに来るまでもレンガの大地もあったし、水路もあった。大きな茶色のアマガエルにも会った。他のカエルも色々な経験をしているのかな？」

そんなことをふと考えていると、また日記のことを思い出してしまった。そして、チラッと日記に目をやった。

「いかんいかん、俺は無断で日記を見るなんてダサイカエルではないじゃないか！」  
勝手に頭が日記のことを考えてしまうことになりかけてしまった。

「そうだ、じっとしているからいけないのだ。少し動いてみよう。」  
この隙間の中をもう少し詳しく見てみることにした。

すると、隙間の奥までは歩いて5歩くらいはあろうかという奥行があつて、その奥は少し腐っていて、湿っぽくなっていた。壁には黄色い粘菌が一部覆っていて、それが文字のように見えた。

粘菌というのは、文字のように見えるんだな。としばらく見ていると、ふと「あの日記はどんな奴が書いたんだろうな。中をちゃんと見ていないけど、どんな風に書いているんだろうな」とまたまた日記のことを考えてしまった。

「困ったものだ、」

「ただ、俺は他のカエルのことを知るために、あの水たまりから移動してきたんじゃないか！少しくらい他のカエルのことを知るためにも日記を見てもいいかもしれない。いや、見ないとわからないじゃないか！」

「どんな風に書いているか自分も参考にするためにも、見てもいいのではないか。。。いやいや、見ないといけないじゃないか！」と自分に言い聞かせるように、いろいろな理由が思いついた。

「まったく、困ったもんだ。本当は読みたくなんてないんだ！」

「でも、仕方がないか。」

そこで、そろりと壁に手を伸ばして、立てかけていた日記を手を取った。

そして、周りに誰もいないのを確認してから、ゆっくりページをめくって読んでみることにした。

．．．．．

「字が汚すぎて、、何んて書いてあるか読めんやないかい」

妄想アマガエル日記（12） — 8月3日（木） 晴れ／アマガエル与助編／

「まったく、なんて汚い字なんだ！」

「どうやったらこんな汚い字が書けるんだ！」

あまりの汚い字で書かれた日記に、見るのを躊躇していた自分が馬鹿らしく思えてしまって、怒りに変わっていた。

「いや、待てよ。。。」

「これは日記なのは間違いない。人に見られないために特殊な訓練をしたカエルが暗号で書いたものなのかもしれない。」

あまりの汚い字にそれに意味がある可能性を感じてしまった。

そこで、改めてその日記を見ることにした。次は、暗号を解読する気持ちで読んでみようと思ったのだ。

「まず、この数字みたいなのはもしかしたら、何かを表す記号なのかもしれないな、」  
数字ですら汚い字過ぎて、その形は何かに見えなくもなかったのである。

「数字の「7」に見えるけど、、、もしかしたらこれは何か武器でも表しているかもしれない。」

「いや、まてよ。その次の「月」のようにも見えるが、、、これは武器を持つ人を表しているのかもしれない。」  
見ればみるほど、文字と認識するよりも記号やイラストとして見えてくるのである。

「いやいや、これは日記帳なのは間違いない。やっぱり、これは文字なのかもしれないな。」  
さすがに自分でも考えが突飛すぎたと反省して、文字の解読に取り組むことにした。

「やっぱり、7みたいに見えるのは数字の「7」でいいだろうし、その次のは「月」でいいだろうから、ここは「7月」でいいだろう、」

「でも、その次がまったく読めない。数字にすら見えない。」

7月ときたら次も数字が来て日にちを表すだろうけど、数字に見えないのである。

「なかなか難解だな。やっぱり、これは特殊な訓練をしたカエルの暗号のような気もしてきたな、」

「もしかしたら、逆さにして読むのかもしれない。」  
逆さにして読んでみたが、どうやら違うらしい。

「もしかしたら、あぶり出しのように下から火を当てたら何か浮き上がって、この汚い文字のようなのが何かに見えるのかも

しれない」

「ただ、こんなところに火なんてない。。。」

「難しい。。。いったいどうやってたらこれを解読できるのだろうか？」  
疲れてゴロンと寝転んで天井を見上げていた。

すると、顔を覆うように入り口の方から、ぬっとアマガエルが顔を出してこの隙間を返して欲しいといってきた。

ただ、その時は大変驚いたが、どうやらあの日記の持ち主らしいこと、そして、なんだかい奴っぽいことがわかったので、友達になることにした。

いろいろと話をしたが、この隙間は返さずに済んだし、日記を見たこともバレてなさそうだし、とりあえず、よかった。

「今度あったら、日記になんて書いてあったのか聞いてみよう。」

「あれはどんな特殊な訓練をして書いた暗号なのか、とても気になる。。。」

### 妄想アマガエル日記（13） — 8月4日（金） 晴れ

「ところで、与助くんはどうして青色の体をしていたんだろう？」  
日記を書きながら、考えていた。

「アマガエルの体の色というのは周りに合わせて変わるはずだから、青色になるってことは、あの時青色のところに行ったということだろうか？」

考えれば考えるほど不思議でしようがない。

「ただ、あの時は隙間にずっといたように寝転んでいたし、あの隙間から外に出るにはこの隙間の横を通るのが一番早道だけど、誰も通らなかつた。遠回りして入って、すぐに寝転んでくつろいでいたのだろうか？」

隙間の中にずっといたら、茶色になることもあるけど、基本的には緑色のままであることをこれまでの経験で知っていた。

「いや、そもそも青色ってどういう環境にいたというんだ！」

「この辺りに青色のところなんてないじゃないか！」

周りには草むらの緑色や雑木林の樹木の茶色、隣のコンクリートの壁の灰色などしかないのである。

「あつ、もしかしたら、いきなり顔出して驚かせたから、びっくりしたら一瞬で青色になったりするのだろうか？」

まだまだ自分の体のすべてをわかっていないから、その可能性も十分にあると思った。

「いや、でもあの時に話しかける前から青かつたな」

「じゃ、もしかしたら、、私はまだできないけど、体の色は周りに合わせて変わるだけじゃなくて、自在に変えられるのかもしれない。」

・  
・  
・

「あり得る！」

「十分あり得る！！」

「なんてスゴイ体なんだ！！！」

「今度会った時に、体の色の変え方を教えて貰おう！」

「そうだな、まずはピンク色になってみよう！」

一通り食事を済ませて戻ろうと朽ち木を登り始めたら、ちょうど上から与助が降りてくるところだった。

「おっ！どこ行くの？」

見上げて声をかけた。

すると、

「君に会いに行こうと思って隙間を覗いたらいなかったから、探しに行こうと思っていたところだったんだよ」  
与助が嬉しそうに返してきた。

「へ〜そうなんだ！」

自分に用があるなんて、とても嬉しく思った。

「で？なんの用のの？」

嬉しく思っていたのと同時に要件がとても気になっていた。

「いや〜大したことでもないんだけどね。。。まあ、あそこが涼しそうだからあそこで話すよ」

コンクリートの壁の上を指差してそう言ってきた。

ちょうど、その場所は、大きなヤナギの木があって、陰になっていて涼しそうに見えた。

「わかった。ちょっと待ってて、この日記を置いてくるから」

脇に抱えていた日記を持って隙間に戻ろうとすると、

「いや、それ持ったままでいいよ」

与助がそう言ってきたので、持ったまま与助の後をついていくことにした。



コンクリートの壁をよじのぼって、ヤナギの木の下に歩いて行って、二人で並んで腰かけるとちょうど夕日が見えて雑木林も一望できて、とても気持ちがよかった。

「ここはいいところだね」

与助が言ってきた。

「そうだね、涼しいし、眺めもいい！」

そして、お互い少し沈黙してから、

「あのさ、少し気になっていることがあるから教えて欲しいんだけど。」

与助が言いづらそうに言ってきた。

「実はさ、僕も教えて欲しいことがあるんだよね。」

モジモジしながら言ってみた。

「へ、お互い聞きたいことがあるんだね。」

・  
・  
・

再び沈黙が続いた後、

「体の色を・・・」「暗号を・・・」

お互い被ってしまった。

「あつ、いいよ先に言って」

与助が言ってくれた。

そこで、

「体の色を自在に変える方法を教えてくれない？」  
意を決して聞いてみた

すると、

「いや、、、この体の色は生まれつきだから、、、」

「自在に変えたりなんてできないんだ」

「あつ、そうなの？」

「なんか特殊な訓練とかして、体の色を自在に変える方法があったりするんじゃないんだ！」

「そっかあ、、、」

少しがっかりしてしまった。

「与助くんの質問はなに？」

「あのさ、、、日記に書いている暗号を教えてくださいませんか？」  
すると、

「いや、、、この字は生まれつきだから、、、」

「暗号とかじゃないんだ」

「へっ、そうなの？」

「なんか特殊な訓練とかして習得した暗号じゃないの？」

「ちよつと日記見せてくれない？」

「これさ、、、自分じゃちゃんと読めるんだよね？」

「もちろんだよ！」

「ただ、調子が悪い時は読めないんだよ」

「ん？調子が悪い時って何なの？」

「調子がいい時は日記を書いた時のことを覚えているからだいたい読めるんだけど、調子が悪い時は書いた時のことを忘れているから、わからないんだ」

「それってさあ、読んでるんじゃないかって、書いた時のことを思い出しているってことなんじゃない？」

「んゝゝ、まあそう言われたらそうかも。。。」

与助が呆れた顔で見てきた。

そして、お互い顔を見合わせて爆笑してしまった。

どれくらい笑っただろう、久しぶりにこんなに笑った。

いや、カエルになって初めてかもしれない。。。

「お互い変な勘違いしていたんだ！」

「暗号って、ぷっ」

与助の肩を叩いて言った。

「ところでさあ、字が汚いのが生まれつきってなんだよ  
与助が真顔で言ってきた。

「ぷっ・・・」

また、笑いがこみあげてきた。

ヤナギの木の下に2匹のカエル。暗くなるまで笑い続けた。

妄想アマガエル日記(15) — 8月14日(月) 晴れ

「いやゝ笑った笑った。腹がまだ痛い」

与助と夜遅くまで笑って、へトへトになって隙間に帰ってきた。

「この日記が特殊な訓練をして書いた暗号と思っていたなんて。ぷっ、」  
思い出すだけでまた笑ってしまうので、腹が痛いから必死で我慢した。

少し隙間でゆっくりしようと思っただけで横になった。

すると、いつの間にか寝てしまったようで、起きたら朝になっていた。

最近、夜も朝も涼しくなってきた、昨日の夜なんて少し寒かった。

だから、いつもは腹を上にして寝るのだけど、脚と手を縮めて座るような感じで寝たくらいだ。

ただ、昨日はだいぶ笑い疲れてしまって、与助さんに聞こうと思っただけで聞かなくてしまった。

最近、オタマジジャクシの頃を思い出そうとするのだが、水の中から陸に上がる少し前のことしか思い出すことができない。  
ただ、オタマジジャクシの頃は水の中で暮らしていて、今は陸で暮らしている。

ということは、「次は空で暮らすことになるのだろうか？」  
それを与助さんに聞こうとおもっていたのだ。

水の中から陸に上がる時に、お尻にあったヒレはなくなって脚と手が出た。

ということとは、、「次は脚と手がなくなつて羽根が生えるのだろうか？」  
最近、真剣にこのことを考えているのだ。

だから、空を飛んでいる生き物をよく見ている。

もしかしたら、あのトンボなどの群れの中に将来の自分の姿をしたカエルが飛んでいるかもしれないと思うのだ。

ただ、いくら見ている、羽根の生えたカエルのような生き物は見つからない。

「時間が悪いのかもしれない」

いつも見ているのは明るい時が多いのだ。でも、夜は暗くて飛んでいる生き物が見えない。。。

「いったい、次はどんな体になるのだろうか？」

「与助くんはいろいろと詳しくそうだから、今度会った時に聞いてみよ！」

妄想アマガエル日記（16） — 8月16日（水）くもりくアマガエル与助編く

今日は雲で日が遮られて、とても涼しい。

こんな日は朝からゆっくり隙間を出て、朝のジョギングをするかのように餌を探して歩き回るのがいい。

運がいいことに、美味しそうなミミズが土の上を歩いていたので、それを少し追いかけて食べることができた。

「やっぱり、ミミズが一番美味しい！」

結構大きなミミズだったから、お腹がいっぱいになってしまった。

なので、あの居心地のいい隙間に戻ることにした。

「さて、お腹もいっぱいになったし、風も涼しい。こんな時は少し昼寝をするに限る！」

ただ、我々カエルは寝る時は決まりがある。

まず、体の下に脚と手を縮める。そして、体をなるべく低くする。さらに、鼻を開いて、匂いをいつでも嗅げるようにする。くわえて、顎の下を常に動かして呼吸するのだが、その動きをなるべく小さく小刻みにする。

最後に、一番大事なのが「目を細くする」ことである。

目を完全に閉じることはいらないのだ。でも、開けておくと寝れないから細くする。常に周りに敵がいるかもしれないから、いつ何時襲われるかもしれないから、目を細くは開けておくのだ。

これが、我々カエルが寝る時の決まりだ。

「さて、周りに敵がいらないのかを少し確認してから、寝ることにしよう」

隙間から体を乗り出して、周りを見渡してみた。

すると、下の隙間からカエルの足がぴーんと伸びて出ているのが見えた。

「おい、あれは何だ？」

「あそこは、銀次郎の隙間じゃないか！もしかしたら、アイツ食べられてしまって、脚だけ出ているんじゃないか！」  
心配になって、急いで下に降りて銀次郎の隙間を覗いてみた。

そこには、、、

手足をぴーんと伸ばしている銀次郎がいた。

「おい、お前そんなことして何してんだ？」

与助が隙間の上から頭を出して聞いた。

「おっ、与助くん。」

「いやね。。。もしかしたら手足がなくなって羽根が出るかもしれないから、今の内に手足をよく見たり、動かしておこうと思つてね。」

銀次郎が手足を伸ばしながら言った。

「ん？どういうこと？」

与助が不思議そうに聞いた。

「あゝ。ちょうど君に聞こうと思つていたんだけどね。。。オタマジクシの時は水の中にいてヒレがあっただろ。そしてヒレがなくなって手足がでて陸にいるだろ。じゃ、次はさ、手足がなくなって羽根が出て空で暮らすんじゃないかと思うんだけど、合ってるよね？」

キラキラした目でこちらを見ながら聞いてきた。

与助は困ってしまった。

羽根なんて生えるわけないし、これはもしかしたらまた俺を笑わそうとしているのかもしれない。いや、でも今ここに来たのは偶然だ。

んゝいったい、俺は何て言つてあげたらいいのだろうか、？

「ねゝゝ、合ってるよね？」

銀次郎が再び聞いてきた。

「わかんない」

とだけ言つて、自分の隙間に戻った。





「あゝいらないな。一人でどっか行ったのかな」

「仕方がない。一人で行くか。」

朽木を降りて雑木林の奥に行ってみることにした。

これまで、この雑木林の奥に行ったことはなかった。

それは、鬱蒼とした森の奥は少し薄気味悪くて、一人で行くのは怖かったのだ。

恐る恐る奥に歩いていくと、次第に雨足も強まってきて、周りも暗くなってきた。

「なんだか怖いな。雨も結構降ってきたし、このまま進むと迷って、帰って来れなくなりそうな気がするな」  
そこで、コンクリートブロックが2段ほど重ねて置いてある場所があったので、とりあえず、その一番下のコンクリートブロックの穴の中で雨宿りすることにした。

時折、カミナリも鳴ってきて、カミナリの閃光が周りを一瞬明るくした。

すると、その光に映し出されるように、奥の大きな石の下に大きなカエルがいるのが見えた。

「うわっ、化け物だ!!なんて大きなカエルだ!見たことないぞあんな大きなカエル」

「あんなのに見つかったら、食べられてしまう。」

怖くて、動けなくなってしまうた。

すると、そのカエルは何やら自分の皮を口で引っ張って剥がしているように見えた。

「おいおい、自分の皮を自分で剥いでるぞ・・・」

「やっぱり、化け物カエルだ。」

そのカエルはどんどん自分の皮を剥いでいく。



「変わってないやないか~~~~~いい  
一人で穴の中で叫んだ。」

その声は、雨とカミナリにかき消された。

妄想アマガエル日記（18） — 8月22日（火） 晴れ

「まったく、変なもん見てしまったな〜」

雨がやみ、雲も晴れ、月明かりの中、トボトボと隙間に戻ろうと歩いていた。

「カエルは第2形態までということなのだろうな。。。。」

「しっかし、あのヒキガエル、遠目から見ても皮を脱いだらツルツルの皮膚になっていたな〜。あれを美肌っていうんだろうな〜」  
「どうやって自分で皮を剥ぐんだろうな〜」

そんなことを考えながら、来た道に戻っていると、後ろから与助が声をかけてきた。

「おっ、銀次郎じゃないか、どこ行っていたんだい？」

いつも通り、明るく笑顔で聞いてきた。

「あつ、与助くんじゃないか〜。さっき、雨が降って来たから一緒にこの雑木林の奥に行こうと誘うとしたんだけど、隙間にい

なかつたね。」

そして、ブロックの孔で雨宿りをしていた時に見たことを説明しながら一緒にテクテクと歩いていた。

「なるほどなくヒキガエルの脱皮を見たんだなく。」

ふつうに答えながら、話しを聞いて、銀次郎がカエルに第3形態なんてものがないことによろやく気付いてくれたようだったから、内心ほっとしていた。

「そのヒキガエルとは何か話したりしたのかい？」

与助が話しを変えようと質問した。

「いや、、少し遠いところにいたし。こつちのことはたぶん気づいていなさそうだったし、何より大きくて少し怖くてね。。。」

「そうか。俺もはじめてヒキガエルを見た時は驚いたなく。なんて言ったって、大きいし、体が赤色していてイボイボしてゴツゴツしていたし、体からなんか白いベタベタする液体だしていたしなく」  
思い出しながら、話しをした。

「白いベタベタする液体ってなに？」

銀次郎が不思議そうに質問した。

「あれ、見なかった？なんか体から白くてベタベタする液体だすんだよヒキガエルって。」

「へえ、、そうなんだ。」

銀次郎が見たヒキガエルはツルツルした皮膚で、風呂上りのようなすつきりした顔をしていた。

「でさ、その白いベタベタが付くとなかなか取れないんだよ」

与助がさらに詳しく説明した。

「へえ、ヒキガエルって、皮膚を剥いて、白いベタベタする液体も出すんだ」

「ん？もしかして、その白いベタベタって、美容パックなんじゃないの？」

「ヒキガエルって、皮膚を新しくしてツルツルにしたり、パックしたりして、美肌に熱心なカエルなんだな」  
銀次郎が真剣な顔で、つぶやいた。

「そうかな」

与助がヒキガエルの姿を想像しながら、返事をした。

そして、また困ってしまった。

「コイツは何で、こんな変なことばかり考えるんだろうな。。。」

「第3形態が解決したと思ったら、今度はヒキガエルが美肌に熱心だなんて、あんなイボイボでゴツゴツした皮膚のカエルが美肌に熱心なわけないだろう。まったく、なんて答えてあげればいいのか。」

2匹のカエルが真剣な顔をして、帰路についた。

妄想アマガエル日記（19） — 8月24日（木）くもり

与助と二人で朽ち木に戻ってきた。

すると、朽ち木の前に1匹のヌマガエルがいて、こちらを見ていた。

「あつ、あのヌマガエルはこの前石の下にいたやつだ！」

銀次郎が思い出して、そう与助に小声で言った。

「ん？知り合いなのかい？」

「いや、知り合いってわけじゃなくて、この前朽ち木の隙間から外を見ているときに、そこの大きな石の下にいて目が合っただけなんだ。」

「ふん、じゃ、知り合いってわけじゃないんだ。」

そのまま、そのヌマガエルの前を通り過ぎて、お互い隙間に戻ろうとしたところで、そのヌマガエルが声をかけてきた。

「俺は、小太郎っていうんだけど、お前、俺のことは覚えてないだろ？」

小太郎が聞いてきた。

「いや、なんとなく、見覚えあるけど。」

銀次郎がわざとらしく、どうにか覚えているような感じで答えた。

「お前は、水の中から陸に上がる時に、俺の頭を踏み台にしたのは覚えていないだろうけど、俺は忘れていないからな、」  
小太郎が恨めしそうに言ってきた。

「えっ、そうなの？確かに、あの時ちようどいい石があると思って踏み台にしたけど、あれは君だったのかい？」  
銀次郎がまったく知らないって感じで答えた。実際に、知らないのだ。

「あ、そうだよ。覚えていたのかい。」

「それは、話が早い。」

「お前は俺の頭を踏み台にしたんだから、一つお願いを聞いてくれ」

小太郎が、高圧的に言ってきた。

「ええ、、、だって、わざとじゃないし。。。」

銀次郎が慌てているのを見て、与助が間に入って話しはじめた。

「まあまあ、話しはわかったけど、とりあえず、そのお願いというのを聞いてみようじゃないか。」

「俺は冒険家なんだ。だから、今日もいろいろなところを巡ってきた。ただなく。あそこに黒い大きな建物があるだろ？あの上に行ってみたいんだけど、何度やっても登れないんだ。」

「そこでお願いなんだが、お前らは壁を平気で登るだろ？あれをどうやっているか教えて欲しいんだ」

・  
・  
・

銀次郎と与助がお互い顔を見合わせて考えていた。

というのも、壁を登るのに苦労したことがないからだ。

「どうやって壁を登るって聞かれてもね、、、こうやって壁に手を足を貼りついて登るだけだよ？」  
銀次郎が身振り手振りで話した。

「いや、そんな簡単に壁に手足なんて貼りつかないだろ？」

小太郎が自分の手足を見ながら言った。

「ちよつと手を見せてくれよ」

与助が小太郎に言った。

「ほら、お前らと同じ手だろ？特に、違いはないだろ？手じゃなくて、コツを教える欲しいんだよ！！」  
小太郎が呆れたように、手を二人に見せながら、言った。

その手を銀次郎と与助が覗きこんで、

「ん？、、、吸盤がないね〜」  
銀次郎が言った。

「たしかに、、、吸盤がないね〜」  
与助も言った。

「ん？吸盤ってなんのことだい？」

小太郎が不思議そうに言った。

「ほら、見てみなよ。。。僕らアマガエルは手足に吸盤があるんだよ。この吸盤を壁に貼り付けて壁を登るのさ。」  
銀次郎が自分の手を見せながら説明した。

「ええ、お前ら手に吸盤なんてついているのか！！」

「だから、あんな壁を平気で登れるのか。。。」

小太郎が少し悔しそうに言った。

「どうやったら、その吸盤 手につけるんだ？」

小太郎が聞いてきた。

「そんなのわからないよ。。。だって、オタマジヤクシからカエルになった時にはあったからさ〜」  
銀次郎が少し困った感じで答えた。

「そうなのか、、、だから、何度壁に登ろうとしても登れないわけだ。。。」  
小太郎が少し落ち込んでいた。

それを見て、銀次郎と与助は少し可哀そうに思えてきた。



「どうにかしてあげたいな」  
与助が銀次郎に話しかけた。

「確かにね、、じゃ、二人でおんぶしてあの壁登ってみようか？」  
銀次郎が提案した。

「そうだな。面白そうだからやってみるか！」  
与助もその提案に乗った。

「どうだい？僕らが君をおんぶして登るから、あの建物を登って、あの高いところからの風景を見てみないかい？」  
銀次郎が落ち込む小太郎に提案した。

すると、少し考えてから、  
「いいのかい？そんな面倒なことをお願いしても。」

「いいさ。同じ夜に同じ田から陸に上がった仲間みたいなもんだし、頭踏んだお詫びもかねて。」  
銀次郎が照れくさそうに答えた。

「じゃ、お願いするよ。。冒険家の俺は前からあの建物の上に登って、あそこからの風景をどうしても見てみたかったんだよ。」  
小太郎が嬉しそうに答えた。

「よし、じゃ、とりあえず、この辺りで練習しないとイケないな。落ちたら危ないから。」

「今日はもう遅いから、一晩休んで明日の朝から練習はじめることにしよう！」  
与助が提案した。

「じゃ、僕の隙間においでよ！」

「与助の隙間より地面に近いところにあるから入りやすいし、涼しいしさあ。」  
銀次郎が小太郎を明るく誘った。

小太郎は一瞬で考えた。

コイツの寝相の悪さは異常だ。もし、寝ている時に蹴飛ばされたりしたら、隙間から落ちて怪我するし、コイツはたぶん寝るまで話しかけてくるぞ。。。いや、寝ても話しかけてくるぞ。

「いや、壁を登る練習も兼ねて、与助の隙間で寝させて貰うよ、いいかい？」

与助はその答えを聞いてすべてを悟った。

ハハァーン。コイツ、銀次郎の寝相の悪さを知ってるな、、、

銀次郎に気づかれないように答えないといけないな。

「わかった。じゃ、練習も兼ねて俺の隙間にいこう」

その答えを聞いて小太郎も悟った。

ハハァーン。コイツも銀次郎の寝相の悪さを知ってるな、、、

そして、銀次郎を傷つけないように答えてくれたんだな。

「いい奴だ！」

妄想アマガエル日記(20) — 8月26日(土) 晴れ

「ドガツ、ドン！！ ドゴン、」

おいおい、何の音なんだ？

小太郎は与助の隙間で、寝そうになっていたが、大きな音で起こされた。

「すび〜、ドゴン、ドゲン、ドツカン、」  
「いったい、あの音はなんなのさ？」

「おい、与助。起きているかい？」

小太郎が小さな声で与助に呼びかけた。

すると、与助が眠そうな声で

「ん〜、なんだい？もう寝そうになってたのに・・」

「いや、あの大きな変な音は何の音なんだい？気になって寝れないんだよ。。。」

小太郎が困り果てて、絞り出すように言った。

「あ〜、あの音か。君は知っているんだろ？」

「銀次郎の寝相の悪さを。」

与助が当たり前のように言った。

「おいおい、もしかして、あの音は銀次郎が寝ながら、壁にぶつかったり、蹴ったりしている音なのか？」

小太郎が呆れたように言った。

「ああ、そうさ。はじめ俺もあの音を聞いた時は何の音かわからなくて、驚いたんだけど、音の鳴る方を見にいったら銀次郎が壁にぶつかっていたんだ。」

与助が淡々と説明した。

「あんな音を毎日聞いてよく寝れるな〜」

少し呆れたように小太郎が言った。そして、銀次郎の隙間で一緒に寝なくてよかった〜と内心ほっとしていた。

「いや、あの音のお陰で、夜外敵が近づかないんだ。みんな気持ち悪がってな。」

「だから、あの音に慣れてさえしまえば、安心して寝れるんだよ。」

与助がこれまでを振り返って、説明した。

「なるほど」。暗闇の中であんな変な音がしたら、みんな気持ち悪がって近づかないか」

小太郎が納得して、感心して言った。

「でも、あんなドンドン壁にぶつかって、銀次郎は大丈夫なのか？」

小太郎が心配そうに言った。

「それがね」。あいつがスゴイのは、あんなに寝相が悪いのに、隙間からは落ちることはないんだ。たまにこの朽ち木の上に登っていることはあるけど。あと、壁にぶつかっているんだけど、どうやらアイツの体がとても頑丈らしくて怪我一つしないんだ。」

「俺も最初の頃、そのことが気になって朝会った時に体を見たり、体が痛くないのか聞いたりしていたんだけど、本人はなんともないみたいなんだ。」

与助がこれまでの経験を踏まえてわかりやすく解説した。

「へえ」。銀次郎という奴はスゴイな。」

そんな話をしてしていると、音にも慣れてきたようで、いつのまにか寝てしまっていた。

どれくらい寝ただろう。久しぶりにこんなにぐっすり寝た。

これまででは、いつも初めてとところで一人で寝ていたから、あまり十分に寝ることはなかったが、与助が言うように銀次郎の大きな音のお陰で安心して寝ることができた。

「いや〜、よく寝た！」

小太郎が朝日を浴びながら、外を向いて叫んだ。

「そうか。。。よく寝れたんならよかった。」

与助が奥から、声をかけてきた。

そして、与助を朝日が照らした。

「おいおい！！！！お前、どうしたんだい？その色は。。。。（かつこいいけど）」

「全身青色じゃないか！！（なんか羨ましいけど）」

「大丈夫なのか？（めちゃくちゃイケてるけど）」

昨夜は暗くて体の色はわからなかったから、小太郎がびっくりして、声をかけた。

「あ。。。この色は生まれつきなんだよ。俺は体の色を変えられないんだ！」  
与助が説明した。

小太郎は思った。

「おいおい、銀次郎だけがスゴイ奴だと思っていたが、こいつもスゴイ奴だな。」

「変な奴らと仲良くなってしまったもんだ。。。。」

「面白くなりそうだ！」

妄想アマガエル日記（21） — 8月27日（日） 晴れ

「あつ、おはよう！」

「昨日はちゃんと寝れたかい？」

銀次郎が小太郎に声をかけた。

「あゝ、とつてもよく寝れたよ。」

「なかなか居心地のいい隙間だな。ここは。」

小太郎がぎこちなく答えた。

「そうだろう。ここはとても居心地がいいんだよ。涼しいし、静かだしね。」  
銀次郎が自慢げに言い添えた。

「ところで、君は体が痛くないのかい？」

小太郎が恐る恐る聞いてみた。

「ん？体？全然なんともないよ！」

手足を屈伸しながら、ニコニコしながら答えた。

「ふゝん。君は本当に頑丈な体をしているんだな」

小太郎が銀次郎の体を見回しながら言った。

「朝っぱらから、変なことを言うな。。。。。。」

銀次郎が前にも同じようなことを言われたな〜と思いながら言った。

「だって、君は夜中ずっと壁にぶつかっていて、スゴイ音していたんだぜ。」

小太郎が呆れたように言った。

「あゝ、そういえば、与助が前にそんなこと言っていたよ。」

「でも、本当になんともないんだよね。」

「寝相が悪いのはわかってはいるけど、あの隙間から落ちたこともあまりないし、怪我したこともないんだよね。」

「たぶん、音がするのは別の原因があると思うんだよ。」

銀次郎が不思議そうに答えた。

「そっかあ、まあ、怪我がないならいいんだけど。」

与助が言っていたことが本当だったんだなと、思いながら返事をした。

「おっ、もう集まっていたのかい！朝の餌を食べるのに少し手間取ってしまったって遅くなってすまない。」  
与助が爽やかに言ってきた。

「ところで、今朝は何食べたんだい？」

銀次郎が与助に話しかけた。

「今日は、小さなキリギリスの幼虫とハエかな。ミミズは見つからなかったんだ。探したんだけどね。まあ、それで少し時間かかったんだ。」

与助が少し残念そうに答えた。

「そうなのか。俺はさっきその田んぼの脇でミミズ食べたけどね。」  
小太郎がさらっと話しに入ってきた。

「いいなく。僕はクモを食べたんだけど、糸が口の中で絡まってね。それを取るのに苦労したよ。」  
銀次郎が困った感じで言った。

「さて、じゃ、練習してみるか。」

「まずはそのコンクリートブロックを登ってみよう。」  
与助が声をかけた。

「よし、じゃ、まずは僕が小太郎をおんぶして登ってみるよ！」

銀次郎が壁の下に登る体勢になって、背中を小太郎の方に向けて言った。

「じゃ、すまんが、背中に乗るよ。」

小太郎が銀次郎にそっくりながら背中に乗った。

「じゃ、壁を登ってみるよ！」

銀次郎が小太郎をおんぶした状態で壁を登ろうとした。

すると、

「キヤツ、キヤキヤキヤ」

銀次郎がくすぐったそうに笑った。

「脇腹に足が当たって、くすぐりたいよ。」

銀次郎が耐え切れずに地面に降りた。

「だって、どうやっても足が脇腹のところに当たってしまうだろう？」

小太郎が困ったように答えた。

「じゃ、今度は俺がやってみよう！」

与助が言ってきた。

「え〜。まだ全然登れてないんだけどな〜」

銀次郎が悔しそうに言ってきた。

「まあまあ、とりあえず今は試行錯誤の最初だから、色々やってみようじゃないか！」  
与助が銀次郎をなだめるように言った。



「わかったよ。」

銀次郎が渋々納得した。

「じゃ、乗っていいよ。」

与助が小太郎に背中を向けて言った。

「よい、しよつと！」

小太郎が銀次郎の背中に乗った。

すると、

「ウキヤ、ウキヤキヤキヤキヤキヤ」

与助がくすぐったそうに体をよじりながら、地面に降りた。

「すまない。。。君の腹はなんかとてもツルツルしていて、柔らかくて気持ちいいんだな。背中がなんかすぐくすぐったくなるよ。」

申し訳なさそうに言った。

「あゝ。俺の腹は白くてツルツルしてて、柔らかいだろう。」

「俺たちヌマガエルはツチガエルに似ていると言われることがあるんだが、ツチガエルは腹に黒いシミみたいな模様があるし、皮膚が硬いんだが、俺たちは模様もなくて真っ白で、やわらかいんだ。」

小太郎が分かりやすく説明した。

「困ったな。。。」

銀次郎と与助が、申し訳なさそうに顔を見合わせて言った。

「よし、じゃ、俺と銀次郎が何かを持って上がってさあ、それに君が掴まって登ってみるといのはどうだい？」

与助が提案した。

「なるほど。それならすぐぐったくないし、2人で持ち上げれば重さも半分でよくなるし、さすが与助だ！」  
銀次郎が納得して、感心した。

「じゃ、手始めにここに落ちているクヌギの枝はどうだい？」

与助が、落ちていた枝分かれたした、枯れた葉が数枚ついたクヌギの枝を手にとって言った。

「じゃ、こっちの枝を僕が持つて、そっちを与助が持つて、ここに小太郎がしがみついていたらどうだい？」  
銀次郎が提案した。

「じゃ、とりあえず、銀次郎と登ってみるから、ある程度登ったところで、ここにしがみついてみてくれ。」  
与助がさらに補足して、説明した。

「わかった」

小太郎が答えた。

「ん。片手で枝を持つのは少し難しいね。」

銀次郎が実際にやってみて、この問題に気づいた。

「確かに。。。。。じゃ、この葉に穴をあけてそこに体を入れて、両手を開けた状態で登ってみることにしよう。」  
与助が提案して、さっそく実際にやることにした。葉に穴をあけて頭をそこにに入れてみた。案外うまくいった。

「うん。これなら両手が開いているから登りやすい。」

銀次郎が嬉しそうに言った。

「よし、じゃ、登ってみよう。」

与助がそう言って登り始めた。それに合わせて銀次郎も登り始めた。すこし登った辺りで、小太郎が下の枝にしがみついた。

「よし、このまま上まで登ってみよう。」

与助が声をかけた。

しばらく、登っていくと、

「ちよつと待って、、穴を大きく開けすぎたかもしれない。」

「こつちの葉が破れそうだ。」

銀次郎が慌てて言った。

「じゃ、一旦降りよう。」

与助が言った。

そして、地面に降りて銀次郎が葉をのぞきこみながら、いろいろと問題点をお互い話し合った。

「この方法は危ないかもしれないね。。。」

「途中で葉が破れたら危険だ。」

銀次郎が答えた。

「確かに、、ただ、2人で持っていれば、どちらかが外れても小太郎くらい一人で持てるから安全なのはわかったな。」  
与助が、おんぶよりは、この方法をより試行錯誤する方がいいと結論をだした。

「何か、両手が使えて、2人で持てて、小太郎が安全に掴まれるものはないかな。」  
銀次郎と与助が周りを見回して言った。

すると、

「そういえば、この前冒険しているときに、あそこの水路の手前に白いマスクが落ちていたんだ。あれなら、輪っか状の紐が2つついているし、俺が乗れる部分もあるし、どうかな？」  
小太郎が提案した。

「なるほど。マスクかく。いいかもしれないな。」  
与助が言った。

そして、小太郎がマスクを取りに行った。その間に銀次郎と与助はお互いに同じスピードで登る練習をしていた。しばらくして、小太郎が戻ってきた。

「あつたよ。風で少し飛ばされていて、探すのに手間取ってしまった。」

小太郎が、白いゴムが1対ついたマスクを首に掛けながら持ってきた。

「おー！これならよさそうじゃないか。首に掛けても痛くなさそうだし。」  
与助が嬉しそうに言った。

「じゃ、さっそく、やってみよう！」

銀次郎が与助に言われる前に言ってみた。

まず、与助と銀次郎がマスクのゴムを首に掛けて、ある程度登って、ハンモックのような状態になったところで、小太郎がそこに乗った。

「なかなか順調にいけそうじゃないか！」  
与助が嬉しそうにいった。

コンクリートの壁を半分くらい登ったところで、小太郎がマスクの上に立った。すると、マスクがひどく不安定になった。

「おいおい、立ったらダメだよ。そこで大人しく座っていてくれよ。。。」  
与助が小太郎に言った。

「そうか、悪いな。立った方がなんかカッコイイと思ったんだけどな。」  
小太郎がバツが悪そうに言った。

そのまま、大人しく座った状態でコンクリートの壁を上まで登った。最後は、立って、小太郎が自分で壁の上に立った。

「おーーーーー！」

「スゴいなーーーーー！こんな風景は初めて見た！！」

「いつも草の根際とか、土の中しか見たことないから、こんな高いところから見たのは初めてだーーーーー」  
小太郎が嬉しそうに叫んだ。

それを見て、銀次郎と与助は顔を見合わせて、笑った。

「じゃ、このままこの奥に歩いて行って、柳の木の下で少し休もうか！」

銀次郎が提案した。

与助、銀次郎、小太郎の順に連なって、柳の木の下までやってきた。

「おーーーーー！！ここはまた涼しくて、快適な場所だな」

小太郎がとても嬉しそうに叫んでいた。

「そうだろう。ここは秘密の場所なんだ。」

銀次郎が照れくさそうに言った。

この前、与助とここに来た時にお互い笑った話しを一通りして、それを聞いた小太郎も大爆笑をして、しばらくの間を柳の木の下で3匹のカエルが笑って過ごした。

「いやゝ、面白い！お前らはやっぱり変な奴だなゝ」  
小太郎が嬉しそうに言った。

「じゃ、そろそろ降りようか！」  
与助が提案した。

「そうしよう！」  
小太郎と銀次郎が相槌をした。

・  
・  
・

3匹のカエルが顔を見合わせて、言った。

「どうやって、降りようか。。。？」

登ることしか考えていなかったのだから、降りる方法は考えていなかったのだ。

3匹のカエルが柳の木の下で並んで沈黙した。

「ちーーーーーん」

「どうやって降りようか、？」

銀次郎が腕を組んで与助に話しかけた。

「そうだな、自分たちだけなら、簡単なんだけどね。」

「小太郎を安全に降ろさないといけないし、ここはそんなに高くないから、どうやっても降ろせるけど、最終的な目標はあの大きな建物の上だからな。」

与助が黒い大きな建物を指差しながら言った。

「なんか悪いな。。。」

小太郎が申し訳なさそうに言った。

「ところで、君たちは一人の時はどうやって、こんな壁を降りるんだい？」

「どうやって？と言われても、ほらっ、こうやって、こうやって、たまにジャンプして、こうやって降りるんだよ」

銀次郎が身振り手振りで説明した。

それを見て、与助がわかりやすく補足した。

「この手の吸盤を壁に貼れば体を固定できるんだ。しかも、全部の手足が貼りついていなくてもよくて、1つの手の吸盤だけで自分の体くらい支えられるんだ。」

「へえ、便利な手足をしているんだな。」

小太郎が感心して言った。

「じゃあさ、そんな体を支えることができる強い吸盤をどうやって、そんな簡単に剥がすんだい？」

小太郎が不思議そうに聞いた。

「剥がし方？」

銀次郎と与助がお互いを見て首をかしげた。

「だってそうだろう？片手だけで体を支えられるほど吸盤の吸着が強いんだろう？それを剥がすのはとても大変そうじゃないか。。。？」

小太郎が真剣な顔で聞いた。

「そういわれてもね。。。こうやって、こうやったら剥がせるんだよ。」

銀次郎が身振り手振りで説明した。

それを見て与助が補足した。

「手の吸盤は先にあつて、なんかベタベタする感じなんで、それを手の根元から持ち上げると案外簡単に取れるんだよ」

「へえ、、、ベタベタするんだ！！」

小太郎が感心して言った。

「じゃあさ、泥の地面とか歩いていたら手足に砂とか土とかくつついて大変なんじゃないかい？どうやってくつつかないように歩くんだい？」

小太郎が不思議そうに聞いた。

「砂とか土がくつつく？」

銀次郎と与助がお互いを見て首をかしげた。

「そういわれてもね。。。あまり付かないんだよね。」



銀次郎が手を見せながら言った。

それを見て与助が補足した。

「手は触るとベタベタする感じなんだけど、一応小さな吸盤なんだよ。だから、ベタベタする感じはあるんだけど、ベタベタする粘液みたいなのが出ているわけじゃないから、砂とか土とかはあまり付かないんだ。」

「まあ、詳しくはわからないけど、指の先に小さな小さな六角形の上皮細胞があつてね、それがそれぞれさらに繊維状に枝分かれしていて摩擦力を高めて貼りつくんだ。」

「へ〜〜〜?」

与助の説明を聞いて、小太郎と銀次郎がよくわからなくて、首を傾げた。

「まあ、なんだかんだで壁にくっついて、簡単に剥がれるけど、砂とか土は付かないってことさ!!」  
二人を見て、与助が簡単に説明を変えた。

「じゃ、とりあえず、銀次郎に一人で降りてもらってさ、それを見ながら、なんか降りるいい方法を考えようじゃないか!」  
与助が小太郎に言った。

「そうだな。まあ、吸盤のことはよくわからないけど、降り方を見て考えてみよう!!」  
小太郎が与助に答えた。

「じゃ、銀次郎、降りてみてくれる?」  
与助が銀次郎にお願いした。

「わかったよ。」

銀次郎が答えて、降りようと壁の淵に立った。

「あのさく。。。。与助がなんか手足の吸盤のことをなんか難しく言っていたからさく。。。。なんか貼りつき方がよくわからなくなっちゃったんだよね。。。。」  
銀次郎が困ったように答えた。

「えっ?」

与助と小太郎が驚いて、顔を見合わせた。

「どうやって、壁に張り付いて、剥がすんだっけ。。。。?」

銀次郎が与助に聞いてきた。

「おいおい。。。。どうやってって、こうやって壁に張り付けて。。。」

「ん?どうやって貼り付いていたっけ。。。。?どっちの足が先だっけ。。。。?」  
与助もいろいろ考え過ぎて、わからなくなってしまった。

・  
・  
・

「あれ?みんな降りれなくなっちゃったね。。。。」  
銀次郎がつぶやいた。

3匹のカエルが柳の木の下で並んで沈黙した。

「ちーーーーーん」

「どうやって降りようか、？一応、吸盤の使い方はお互い思いだしたしさ、」  
「じゃあさ、こうやって、こうやって小太郎を支えて降りてみようか。」

銀次郎が片足を上げて身振り手振りで与助に提案していた。

すると突然、突風が吹いて銀次郎が吹き飛ばされてしまった。

「あれ~~~~~」

・  
・  
・  
「ピタッ」

銀次郎は壁の下に落ちたが、何事もなかったように地面に着地した。

「お~~~~い、大丈夫か？」

小太郎が壁の上から身を乗り出して下にいる銀次郎に声をかけた。

「全然大丈夫~~~~。一応、降りれたよ~~~~」

銀次郎が恥ずかしそうに言った。

「おいおい、お前だけ降りてどうするんだい？」

「これは練習なんだよ。ほんと頑丈な体だな。。。」

与助が呆れるように言った。

「そんなこと言ったってさ。。。。風で飛ばされちゃったんだから仕方ないよ。」

銀次郎が困ったように答えた。

「早く登ってこいよ。二人いないと練習にならないからさ。」  
与助が銀次郎に声をかけた。

「わかったよ。今すぐ行くよ。」

銀次郎が急いで壁をよじ登った。

・  
・  
・  
・

「ハアハア、登って来たよ！早かったでしょ。」

「確かに早かった。相変わらずスゴイ体しているな。」

与助が呆れたように褒めて、それを見て小太郎も頷いていた。

「じゃ、どうやって小太郎を降ろそうか。？」

与助が銀次郎に聞いた。

「そうだね。マスクをパラシュートみたいにして降りるのはどうだろう？」

銀次郎が自信を持って提案した。

「いやいや、ここからならまだ大丈夫だろうけど、」

「最終的にはあの高い黒い建物の上から降りるんだぜ。さすがにあそこから落ちたら危険だろう。今は練習なんだから、本番で使える降り方を練習しないとイケないんだ。」

与助が銀次郎の提案をやんわりと断った。

「じゃさ、お互いの腰にマスクのゴムをかけて、小太郎はマスクの部分にどうにかしがみついて降りるってのはどうだい？一番シンプルだけど、小太郎はしがみつくの強そうだし、僕らも自由に降りれるしさ。」  
銀次郎があまり自信なさそうに提案してみた。

「なるほど！それなら、お互い自由に降りれるから、難しく考えて降り方がわからなくなることもなさそうだな。」  
「でも、小太郎は大丈夫かい？」

「大丈夫だ！あまり俺を見くびってくれるなよ。」  
小太郎が胸を張って答えた。

「よし、じゃ、やってみよう！」  
与助がいつものように声をかけて、ゴムを頭から通して腰のクビレのところにつけて、マスクの部分に小太郎がしがみついた。

まず、与助が壁を降り始め、続いて銀次郎が降り始めた。  
壁の上にマスクと小太郎が残った。

「おいおい、、、ここからどうやって俺は動けばいい？」  
小太郎が少し困ったように聞いてきた。

「まずは、マスクを壁に降ろしてそれに乗るか、このまま俺たちが下に降りてそのままマスクが引っ張られて降りるかだけど、引っ張った方が早くない？」  
与助が小太郎に言った。

「でも、そうやったら、落ちた瞬間にゴムの力でビヨン、ビヨンと上下に動くんじゃないか？」

「下手したら上に飛ばされるんじゃないか？」

小太郎が少し心配そうに言ってきた。

「確かにね。。。じゃあさ、僕たちがもう少し上に登って、まず最初にマスクと小太郎を壁の外に降ろしてから、降りたらどうかね？」

銀次郎が提案した。

「よし！それでやってみよう」

与助が同意して、さっそくやってみることにした。

「どうだい小太郎？大丈夫かい？」

与助が聞いた。

「あゝ、まあ、大丈夫だけど、空中に浮いてる感じがなかなかスリルがあるな。。。」

「まあ、余裕だけだな。」

小太郎が、怖がってるのがバレないように言った。

「よし、じゃ降りてみよう！」

与助と銀次郎がジャンプして、お互いいつも通り降りていった。

すると、

「ひゃゝゝゝ、ひよえゝゝゝ」

小太郎はゴムで上下に大きくゆれて、落ちそうになる度に悲鳴が出てしまうのを必死にばれないように耐えていた。

そして、無事地面に着いた。

「安全に降りることができたな！」  
与助が銀次郎に声をかけた。

「そうだね。これなら小太郎も危なくなく降りれるよ！」  
銀次郎が自信たつぷりに答えた。

「あああ、そうだな。これなら余裕だなあああ。」

足の震えがバレないように一生懸命押さえて、小太郎が答えた。

「オエツ。」

妄想アマガエル日記(24) — 9月9日(土) 晴れ

オタマジャクシの頃は水の中を泳いでいた。その頃は、水を吸いこんで呼吸していたし、水を吸いこんで餌を食べていた。それがあがる程度成長すると次第に頭の皮膚は硬くなり、ヒレはどんどん短くなって使えなくなっていた。ある夜、田んぼから陸に上がるとうとした。その時、変なアマガエルに頭を踏み台に使われて、少し溺れそうになったが、どうにか陸に上がった。そして、俺は冒険家になった。色々なところを冒険した。まさに、怖いものなんて、何もなかった。でも、いつのまにか、手足がなくなつて、背中から1対の大きな羽根が生えていた。そして、今は、大空を飛んでいる。今日も空高く飛んでいる。

「雲の上まで飛んでみようー！」

ぐんぐん高く飛んでいる。もう少しで、雲まで届く。すると、大きなジヨロウグモの巣に引っかかってしまった。。。

「なんてことだ!!」

「クモの巣がこんなところにあるなんて、、、」

もがいて、もがいてクモの巣から逃れるためにもがいた。すると、糸が切れて、落下した。

「よし!糸から外れた!!」

「ん????羽根がない。。。」

飛ぼうとしても全然飛べない。体がカエルに戻っていた。どンドン落下する。このままでは、地面に叩きつけられる。。。。。

すると、

大きなアマガエルの柔らかい手の平に落ちた。

「はっ!!」

小太郎がその瞬間目を覚ました。

「大丈夫かい?だいぶうなされていたけど。。。」  
心配そうに銀次郎が覗き込んでいた。

「夢か!」

小太郎がほっと安心してつぶやいた。



「どんな夢を見ていたんだよ、丸2日もうなされて寝ていたんだよ。心配したよ」  
銀次郎がほっとしていた。

「今、与助は外に出ているけど、アイツもさっきまでここで心配していたんだ。」

「そうか、、、そんなに寝ていたのか。。。」

壁を登って降りる練習の後のことをあまり覚えていないのだ。

「おっ、起きたか！」

与助がちょうど隙間に入ってきた。

「なんか、、、心配させてすまんな。」

小太郎が申し訳なさそうに言った。

「いや、大したことないさ。」

「でも、驚いたよ。」

「壁を降りてから皆でここに戻ろうとしたら、突然君が倒れるんだから。」  
与助がその時のことを説明した。

「えっ？俺は倒れたのかい？」

「そうだよ。。突然倒れてブルブル震えていたから、僕の隙間に与助と運んで寝かせたんだよ。」  
銀次郎が付け加えるように説明した。

倒れたのか、あの時のことはあまり覚えていない。

確か、降りる時にマスクにしがみついていたが、それが上下にゆれて生きてきた心地がしなかったのは覚えている。あれが原因で倒れたのかもしれない。。。。でも、冒険家の俺が怖かったから倒れたなんて、この二人に知られるわけにはいかないな。

「そっかあ。たぶん、あの日の朝に食べたミミズが毒ミミズだったのかもしれないな」  
「変な色していたし。」

どうにか誤魔化すために、知恵を絞って説明した。

「そっかあ、毒ミミズなんてのがいるんだな」

「危ないね、あんなに震えて、落ちるゝとかうなされるのは嫌だからなく今度いたら教えてね。」

「ちなみに、どんな色をしているんだろ？」

銀次郎が素直に、教えて欲しいと話した。

「まあまあ、食べ物には気をつけないといけないな。」

与助が、これ以上銀次郎が毒ミミズのことを聞かないように話しを変えようとつぶやいた。

小太郎が遠くを見るような顔で思った。

与助よ。。。。君はすべてをわかっているんだな。。。。

本当に、君はいい奴だ。

心の底から思った。

妄想アマガエル日記(25) — 9月17日(日)曇り時々雨

「よし、小太郎も目を覚ましたし、どっか行こうか！」

銀次郎が二人に声をかけた。

「大丈夫かい？歩いたりできるかい？」  
与助が小太郎を心配して聞いた。

「ああ、全然問題ないさ。寝続けていたみたいだから少し外の空気を吸いたいしな。。。」  
小太郎が隙間の外をちらりと見ながら言った。

「じゃ、この前、雨の日に行ったこの雑木林の奥に行ってみない？」  
銀次郎が提案した。

「あゝ、大きなヒキガエルが脱皮していたところだろ？」

「そうそう、あの時は怖かったけど、3人で行けば怖くないし、今日は時折雨が降るから歩くのにちょうどいいからね。」

「大きなヒキガエルが脱皮？なんのことだい？」  
小太郎が不思議そうに聞いた。

「あゝ、君に出会った日にね、一人でこの雑木林の奥に行ったんだけど、その時に大きなヒキガエルが自分の皮を剥いて、脱皮していたんだよ！」

銀次郎がその時の様子やカミナリに映し出される姿や第3形態になると思っていたけどただ美肌になったただけだったことなどを嬉しそうに話した。

それを聞いた小太郎は腹を抱えて笑って、笑いすぎて、苦しそうになりながら、銀次郎が言う第3形態ってのをこの前夢で見たな〜と考えていた。ただ、さすがにそんな夢の話をするとう銀次郎と同じように思われるから、やめといた。

「よし、じゃ、ご飯を食べてから、雑木林の奥に行ってみようよ。」  
与助が二人に声をかけた。

「そうだね。毒ミミズは食べちゃだめだよ！」  
銀次郎が小太郎に声をかけた。

「あああ、そうだな。気をつけるよ。」  
気まずそうに答えた。

しばらく、個々に餌を探して食べて、それぞれがお腹がいっぱいになった頃、3人が集まった。

「小太郎はずっと寝ていたから、お腹すいていたろ？」

「いっぱい、食べた？」  
銀次郎が優しく声をかけた。

「ああ、とりあえず、お腹もいっぱいになったし、気分もよくなったからよかったよ。」  
小太郎が申し訳なさそうに言った。

「じゃ、雑木林の奥に行ってみよう！」  
与助が声をかけて、3人で歩き始めた。

銀次郎がこの前一人で歩いていた時のことを話しながら、前と同じ道を歩くように思い出しながら先頭で歩いていた。その次に小太郎、与助の順で続いた。

しばらく歩いて行くと、この前雨宿りをしたコンクリートブロックが置いてあるところまでやってきた。

「へへ。。。この前一人で歩いて来た時はここまで来るのに結構時間がかかって、だいぶ遠くまで歩いてきたような気がしていた



「この辺りに、デカくて、自分の皮を剥ぐ、変なヒキガエルがいたんだな！」  
小太郎が嬉しそうに返事した。

「しかし、こんなところにそんな変なヒキガエルがいるんだな」

「冒険家の俺としては、一回見てみたいもんだよ！！はっはっはっ」

小太郎が大きな声でそういうと、強い風が吹いた。

そして、銀次郎と与助が何か言っているが、その声をかき消した。ただ、二人が何かを言いながら、後ろを指差していた。

「え？なに？？聞こえないよ」

小太郎が大きな声で聞いた。

すると、その瞬間風が止み、銀次郎と与助の声が聞こえた。

「後ろお、後ろお」

「後ろお、後ろお」

小太郎がゆっくり後ろを振り向くと、そこには、大きな大きなヒキガエルが自分を見下げているのが見えた。鼻の穴がひくひく動いていた。大きな腕をしていて、その腕の方が自分の体より大きいくらいだった。赤と黒のその模様とその大きな大きな姿は、まるで悪魔のように見えた。

「あへえ」

気を失った。

冒険家の俺は危険なところに色々行った。

時には、大きな石が落ちて来そうな崖を登ったこともあったし、ある時は真っ暗な洞窟の中を奥まで進んだこともあった。どんな危険なところでも後ろを振り返ることなんてありえない。冒険家の俺が通った後に道というのはできるのである。後ろを振り返っている暇なんてないのだ。どんどん進むんだ。時には大きな海原を泳いで進むことだってあった。

そして、今も、大きな大きな大海を泳いでいる。見渡す限り水平線だ。陸地は既に見えない。

「よし、もっともっと遠くまで泳いでいこう!!!」

どんどん泳いでいく。いつまで泳いでも陸は見えない。

すると、急に水が1ヶ所に吸い込まれはじめた。渦潮のように洗濯機のように回転する水の中央に吸い込まれいく。

「このままではいけない!!!」

必死に吸い込まれないように逆に泳ごうとするが、流れが強すぎてどんどん吸い込まれてしまう。

「なんてことだ!!!」

「どんどん吸い込まれてしまうぞ、、、このままでは海底まで沈んで海の藻屑になってしまう、、、」

もがいて、もがいて、どうにか流れに逆らおうとするがどうしても流れに逆らえない。

そして、渦潮の真ん中に吸い込まれてしまった。真っ暗な水の中を勢いよく流されていく。。。。

すると、遠くに明かりが見えて、

大きなアマガエルの鼻の中からポンツと、外に投げ出された。

「はっ！！！！」

小太郎がその瞬間目を覚ました。

「大丈夫かい？だいぶうなされていかけど。。。。」  
心配そうに銀次郎が覗きこんでいた。

「夢か！」

小太郎がほっと安心してつぶやいた。

「いや〜心配したよ。。。」

与助も小太郎を覗きこみながら言った。

「すまないな。。。。何があったんだろう？」

「確か、雑木林の奥まで歩いて来て、ヒキガエルの位置を銀次郎と確かめていたら。。。。」

「あつ、あの悪魔はどうなったんだい？」

小太郎が気絶する前のことを思い出して、むくつと起きて二人に聞いた。

「悪魔？」

「あゝ　もしかして、ヒキガエルのことかい？」  
銀次郎が優しく答えた。

「そうそう」

「彼なら君を抱っこしてくれているじゃないか。」



与助が指差して言った。

「?!?!?!?!」

小太郎は与助が言っている意味がわからなかった。しかし、周りを見渡してようやく自分が大きなヒキガエルに抱っこされていることを理解した。

「えっ。。えーーーーー」

「お前、俺をどうするつもりなんだよ!!」

小太郎が逃げようともがきながら、震える声で視線の先の大きな大きなヒキガエルに言った。

「あらまあ、、、元気な男の子ね」

「肌も柔らかいし、カワイイし、食べちゃおうかしら？」

ヒキガエルがニコニコしながら言ってきた。

小太郎は逃げようともがくけど、大きな腕に掴まれて身動きができない。

「冗談はやめてあげておくれよ。」

「小太郎が驚いてしまうじゃないか」

与助がニコニコしながらヒキガエルを注意した。

「そうね。元気そうでよかったわ。」

ヒキガエルが小太郎を離して言った。

離された小太郎は、スゴイ勢いで逃げて近くの木陰に隠れた。

隠れた小太郎の近くに銀次郎が近づいた。

「おっ、い、い、小太郎」

「この人は危険じゃないから、出ておいでよ〜」

「危険じゃない？」

「んなわけないだろう〜。。。あんな化け物みたいな奴が。。。」

小太郎が木陰の隙間からヒキガエルを指差して言った。

「本当なんだって。」

「あの人はとてもいいヒキガエルなんだよ。君が気絶して倒れて頭を石にぶつけそうになったから、そうならないように守ってくれたんだし、うなされてなかなか起きない君を涼しいこの場所まで連れて来てくれたのも彼なんだよ。」

「まあ、彼というか、彼女というか。その辺りはよくわからないんだけどね。。。」

銀次郎が小太郎が気絶していた時のことを丁寧の説明して、ヒキガエルが危険じゃないということを説明した。

それを聞いて、ようやく小太郎が木陰から出てきた。

そして、銀次郎と一緒にヒキガエルと与助のところまで歩いて近づいた。

「銀次郎からいろいろと聞いたんだが、、、なんか勘違いしてしまってますまない。」

小太郎がヒキガエルに謝り、それを見て与助と銀次郎はほっとしていた。

「まあ、気にしていないから、全然いいわよ〜」

「私はね、ヒキガエルの日出夫。まあ、姿も名前も男だけど、心は乙女だから。。。。。」

「ひでおちゃんって、呼んでね♡」

「ひでおちゃん。。。。。」

小太郎が唾をゴクリと飲んだ。

「そうそう、ひでおちゃん→って、最後は上げるのよ！」

「ひでおちゃん→」

「そうそう、それでいいわよ！」

小太郎を持ち上げた日出夫が小太郎の腹をほっぺにすりすりしながら答えた。

「ほんと、あなたのお腹の皮膚は、柔らかくて、すべすべしていて綺麗だわね」

「私は、美肌に熱心だから、あなたのお肌がとっても羨ましいわあ」

「どうやったら、こんな美肌になるのかしら？」

日出夫が小太郎を持ち上げながらいろいろと質問したが、小太郎はとても嫌がってもがいていた。

それを見ながら、与助は思った。

このヒキガエル、、美肌に熱心なんだな。。。

銀次郎の想像も、まんざら間違えではなかったのか。。。

そんなヒキガエルがいるんだな。。。

妄想アマガエル日記(27) — 10月4日(水) 晴れ

「まったく、なんなんだよ、、あのヒキガエルは。。。」

小太郎は本当に迷惑そうにつぶやいた。

そりゃ、、気絶している時に助けてくれたのはありがたいけど、そもそも気絶するくらい驚かしたのはアイツじゃないか。。。

アイツに近づくとまた腹をほっぺたに擦りつけるから、近づかないようにしよ。アイツのほっぺはジャリジャリして、こそばゆいんだよ。。。

そんなことを考えながら、日出夫が与助と喋っている隙に離れることにした。

銀次郎は日出夫と与助の間でニコニコしながら2人の話しを聞いているから、どうにかしてあの2人に声をかけて、あのヒキガエルから離れないといけない。

「いったい、どうやったたらあの2人にここから離れて帰ろうと伝えられるだろうか？」  
小太郎は少し離れた石の裏に隠れて考えていた。

「そうだ！まず銀次郎をどうにかしてこっちに呼んで、帰ろうと与助に伝えてもらおう！」

隠れているの石からチラッと顔を出して、銀次郎がこちらを見るのを待つことにした。

・  
・  
・  
「おいおい、、アイツは何であんなにニコニコしながら2人の話しを聞いているんだよ。。。」

銀次郎の能天気で楽しそうな顔を見て、だんだんイライラしてきた。しかし、その内周りを見るだろうから、もうしばらく待つことにしよう。

・  
・  
・  
「いつまで話しを聞いているんだ。。こっちを見るよ。。。」

「せめて、こっちじゃなくてもいいから、周りを見るよ・・」  
全然周りを見ない銀次郎に、さらにイライラしてきた。

ダメだな。銀次郎は自分で話しをするのも好きだけど、人の話しを聞くのも好きな奴だからな。。別の方法を考えるとするか。

「よし！じゃ、俺は一人で帰るから、ここに帰ることを記した置き手紙を書いておこう！」

なんか書けるものはないだろうか。。。

周りを見渡すとヨモギの葉くらいいしかなかった。

葉の裏に文字を書いて、ここに置いておいてもアイツらがそれに気づくとは思えない。与助はもしかしたら気づくかもしれないけど、銀次郎が気づくはずがない。ただ、もし気づかなかつたら心配をかけることになるな。。。

別の方法を考えるところか。

「仕方がないが、ヒキガエルにはれないように少しずつ近づいて、耳元で伝えるしかないな！」

そこで、日出夫と与助は向かい合ってしゃべっているから、銀次郎の後ろから近づいて、日出夫に見えないように銀次郎を楯にして近づくしかない。

そろり、そろり、遠回りしながら銀次郎の背中側に移動した。途中、チラッと日出夫を見たが、おしゃべりに夢中になっていて、こちらにはまったく気づいていない。

「よしよし！この調子！」

そこからは身をかがめ、日出夫と銀次郎が一直線になって、自分の姿が日出夫に見えないように銀次郎の陰のように少しずつ歩きはじめた。その姿はまさに鳥を捕らえようとする猫、いやカエルを捕らえようとするヘビのようだと自分で思いながら少しずつ近づいた。

冒険家の俺からしたら、こんな特殊任務は朝飯前だ。これまでの冒険の成果だな、なんてことを思いながら、今の自分はなんてカッコイイんだ〜なんてことを思いながら、さらに進んだ。

そして、ようやく誰にもバレずに銀次郎の背中まで来ることができた。ここまで来たら、あとは銀次郎の耳元で声をかけるだけだ。

「さすが、俺だな。」

自分が誇らしかった。

息を殺して、銀次郎の後ろから耳元に向けて

「帰ろう」と伝えた。

すると、

「ぎゃーーーーーーーーーーーーーーーー」

銀次郎が飛びあがって驚いた。

そして、日出夫と与助がこちらを振り向いた。

「どうしたんだい？銀次郎？」

与助が声をかけた。

「お化けみたいな声がしたんだよ！！」

「お化け？そんなもんがこんな昼間っからいるわけないだろ？」

「ん？後ろにいるのは小太郎じゃないか！」

銀次郎が振り返って

「おっ、ほんと。小太郎なにしてんだい？」

「びつくりした……。驚かさないでくれよ。。。」

すると、日出夫が嬉しそうに目を輝かせて

「あら♡ 小太郎ちゃん、そこにいたのね♡」

そういうと、のしっのしっ和小太郎に近づいてきた。そして、小太郎を両手で持ち上げて、小太郎の腹をほっぺにスリスリし

はじめた。

「くそく、またこうなっちゃった。。。」

小太郎は、一人で帰ればよかった、と思った。

妄想アマガエル日記(28) — 10月6日(金) 晴れ

「話しは聞いたわよ。小太郎ちゃん♡」

「あんた、あの建物を登りたいらしいわね。。。」

「そんな無謀なことを考えるなんて、さすが私が惚れた腹の持ち主だけあるわ♡」  
日出夫が小太郎を持ち上げながら嬉しそうに言った。

「あゝそうですか。。。」

小太郎はなされるがまま腹をほっぺにすりすりされ過ぎて、遠い目をして言った。

「じゃ、私もあなたのその無謀な夢を叶える手伝いをしてあげようじゃないの!!」  
日出夫が小太郎を地面に降ろして、胸を叩いて言った。

「ええく。。いいよ。。もう俺たち帰らないといけなし。。。」

「なあ、なあ、もう帰るもんな？」

与助と銀次郎にどうにか、うんと言ってもらおうと必死で聞いた。

「それがね。。日出夫も俺たちが住んでるあの朽ち木を見たいって言うんだよ。。。」

「だからね、これから帰るんだけど、日出夫も一緒なんだよ。」

与助が申し訳なさそうに答えた。

「え〜。そりゃないよ〜」

「だって、あの隙間にはこんな大きなヒキガエルは入れないじゃないか。」

小太郎はともシヨツクを受けて、2人を日出夫から遠ざけて3人で話すことにした。

「あつ、住んでるところを見るだけって話しか！」

与助が言ったことをもう一度思い出して、一緒に住むことではないことを確認した。

「まあ、一緒に住むわけではないんだけどね。」

銀次郎が申し訳なさそうに言った。

「でもね、朽ち木の前に大きな石があるでしょ？あそこに住むことになるかもしれないんだよ〜」  
銀次郎がさらに申し訳なさそうに言った。

「おいおい、どうして、そんな話しになるんだよ！」

小太郎が銀次郎を日出夫に聞こえないように小声で問い詰めた。

「こいつが、誘ったんだよ。」

与助が銀次郎を指差して言った。

「いやいや、誘ったわけじゃないんだよ。」

「僕らが住んでいる朽ち木の居心地の良さを話してね。そして、ちょうど日出夫が住めるような大きな石が朽ち木の前にあってね。そこは今は誰も使っていないんだよって言ってね。あの辺りは常に湿っていて餌も豊富だよって言ってね。小太郎があつて建物に登りたいって言うから手伝って欲しいんだよ。って話しただけなんだよ。。。」



銀次郎が身振り手振りで2人に弁明した。

「いや、それを誘ってるって言うんだらうが」

小太郎が銀次郎に近づいて睨みながら言った。

「まあまあ、日出夫もここは乾燥していて、あまり餌がないから引越先を探していたみたいだしさ。小太郎が登るのを手伝ってくれるって言うてるしさ。悪い奴じゃないしさ。いいじゃないか！」

与助が銀次郎をかばうように言って、小太郎をなだめた。

「いやだ！ぜったい嫌だ！」

小太郎が、もし一緒に住むくらいなら、建物を登るのは諦めて出て行くとぐちぐち言い始めた。

すると、ノシツノシツと日出夫が3人のところに近づいてきた。

「どうしたのかしら？小太郎ちゃん。そんなに嫌がらなくてもいいじゃないの。」

3人の様子を遠くから見て、たまに漏れてくる単語を聞いて、だいたいの話しの内容を察して言った。

さらに、

「あなたは冒険家なんですよ。なのに、1回決めたことを諦めるの？」

日出夫が上から見下ろして小太郎に言った。

「あと、あなたは高いところが怖くなってしまったんでしょ？」

「与助ちゃんから内緒で聞いてしまったのよ。」

「与助く。。」

小太郎が与助を睨みながら言った。

与助は申し訳なさそうな顔をして、謝る身振りをした。

「だから、私があなただの高いところが怖いというのを治してあげようじゃないの！」  
日出夫が小太郎に提案した。

皆が呆気に取られた。

「ん？どうやってたらそんなことができるんだい？」  
銀次郎が小太郎に代わって聞いてみた。

「ん〜そうね、、、」

「とりあえず、私の頭の上に乗っていたらいいんじゃないかしら？」  
日出夫は思い付きで言ってみた。

「なるほど！！日出夫の頭の高さは相当高いから、そんなところにいつも乗って移動していたら、高いところなんて怖くなくなるかもしれないな！！」  
与助が感心して、言った。

「そんなんで、高いところが怖くなくなるかね？」  
小太郎が信じられないといった顔で与助を見た。

「まあ、とりあえずさ〜。日出夫ちゃんの頭の上に乗ってみたら？」  
銀次郎が小太郎を促した。

「まあ、冒険家の俺が高い所が怖いままってのも情けないし、治せるのならありがたいからな。。。」「  
小太郎がしぶしぶ日出夫の提案に乗ることにした。

「どうやって、乗ればいいんだ？」

小太郎が日出夫に聞いた。

「そりゃ、私がいつもみたい持ち上げてもいいけど、それもなんかあなたのプライドが許さないみたいだから、自分の力で私の背中から登ってみたらいいんじゃないの？」

日出夫が背中を指差して言った。

「よし、じゃ、そうさせてもらおう！」

そう言うと、日出夫の後ろに回りこんだ。

へえへえ、初めて背中を見たけど、これは小さな山みたいだな

小太郎は思った。

「じゃ、失礼させてもらうよ！」

小太郎は日出夫に言って登り始めた。

登り始めてわかったことだが、ちょうど、自分が登るための足場のように、ちょうどいいところにちょうどいい大きさのイボが配置されていたのである。そして、するすると簡単に頭の上まで登ることができた。

「上手じゃない!!」

日出夫が嬉しそうに言った。

「ほんと、上手だったね！」

銀次郎も褒めた。

それを聞いて、少し嬉しくなった小太郎は日出夫の頭の上に立ってみた。そこは、まさに今までとはまったく違う世界だった。

なんて高くて、遠くまで見渡せるんだ！確かにここからの風景に慣れたら、高いところなんて怖くなくなるかもしれない！心の中でとても感動していた。

「よかったじゃないか！それくらいの高さに慣れたら、高いところなんて怖くなくなるさ！」  
与助が嬉しそうに言った。

「じゃ、帰ろう。」

銀次郎が提案して、皆で帰りはじめた。

しばらく、歩いていくと

「うえ、オエ。。。」

「もう少し振動を抑えて歩いてくれないかい？」

小太郎が日出夫の歩く上下の振動に酔ってしまっていた。

「立っているからよ♡」

日出夫が上を見て、小太郎に言った。

「じゃ、どうしたらいいんだよ。オエ」

小太郎が少し不機嫌に言った。

「頭の上にあなたの腹を付けて、身をかがめて乗るのよ♡」  
日出夫が真面目にアドバイスした。

「こうか？」

小太郎は日出夫に言われる通りにやってみた。

「いや、もっと腹を押し付けないと振動を吸収できないでしょ！まったく世話が焼ける。」  
日出夫が少し怒って言った。

「ああ、わかったよ。こうだね？」

「そうそう、それなら振動を吸収して酔わないでしょ？」

日出夫が少し動きながらそう言った。

「確かに、これなら振動は感じないけど、高さは立っているのとあまり変わらないから慣れることができそうだよ。ありがとう。」  
小太郎が日出夫に感謝した。

それを見ていた与助は、銀次郎に小声で言った。

「日出夫はさあ、ただ小太郎の腹の柔らかさを感じたいだけなんじゃないか？」

そう言われて、銀次郎が日出夫を見ると、とても気持ちよさそうな顔をしていた。

「確かにね、あれはただ小太郎の腹の柔らかさを感じただけみたいだね。」

「まあ、お互い嬉しそうだから、このことは小太郎には内緒にしておこう！」

与助が銀次郎に小声で言った。

「そうだね」

2匹のアマガエルと1匹のヒキガエル、そしてその頭の上に身をかがめたヌマガエルが1匹。  
ゆっくりと雑木林を後にした。

「着いたよ」

先頭を歩いていた銀次郎が振り返って、日出夫に言った。

「へへ ここがあなたたちの暮らしている居心地がいいと言っていた場所なのね！」

「確かに、ここは湿っているし、近くに田んぼがあって小さな生き物も多そうね！」

日出夫が嬉しそうに言った。

「この一番上の隙間が与助と小太郎が住んでいて、その隙間が僕が住んでいる隙間なんだよ。」

銀次郎が朽ち木を見上げて、指差しながら説明した。

「あら？小太郎ちゃんは与助ちゃんと一緒に暮らしているの？」

日出夫が頭に乗っている小太郎に聞いた。

「あゝそうなんだよ。でも、俺は冒険家だから、ずっとここにいるというわけではなくて、一時的に今だけ居候しているだけなんだ。」

小太郎が答えた。

「ふふん。でも、そろそろ寒くなって来たから、早くあの建物に登って、冬を越す居心地のいい場所を探さないといけないわね？」

日出夫が皆に言った。

「ん？どういうこと？」

皆が首を傾げて言った。

「あら？あなたたちはまだ冬を越したことがないのかしら？」

「そうだね。俺たちは今年カエルになったばかりだから、まだ冬を越したことはないんだ。」  
与助が説明した。

「そうだったのね。」

「私たちカエルはね。寒くなると動けなくなるのよ。だから、土の中とか落ち葉の下とか朽ち木の下とか、多少寒さを防いで、外敵から見つからないようなところでじっと寒い冬を耐えないといけないのよ。」

日出夫が皆にわかりやすく説明した。

「えー！ー！ー！」

皆が目を大きく見開いて驚いた。

「知らなかったあゝ」

「寒いと動けなくなるんだゝ！ー！」

銀次郎がびっくりして声を上げた。

「じゃ、急いであの建物を登らないといけないじゃないか！」

与助が日出夫の頭の上にいる小太郎に言った。

「本当だなく。ところで、いつくらいになったら動けなくなるんだい？」

小太郎が日出夫に聞いた。

「そうねゝ。カエルにもよるのよね。。。ツチガエルのように冬でも水の中にいるのもいるけど、あなたたちだとだいたい11月くらいには姿を見なくなるわね。」

「じゃ、あと1ヶ月くらいしかないじゃないかゝ。」

与助が小太郎を見上げて言った。

「でも、冬を越すためには、やるのが色々あるのよ。」

「餌を食べておいたり、冬を越す居心地のいいところを探したり、お肌の手入れをしたり、ほんと忙しいの。」

「そんなにいろいろなことをやらないといけないの！！！」

「肌の手入れなんて、やったことないよ！！！」

銀次郎が驚いて答えた。

「肌の手入れは日出夫だけだろうけど、他のことはやっておかないといけないね。特に、冬を越す場所を探すだけ探しておかないといけないな！」

与助が皆に言った。

「ところで、これまでひでおちゃんはどんなところで冬を越していたんだい？」

銀次郎が日出夫に聞いた。

「そうね。。。。だいたい大きな木の下の根の奥の隙間とか、大きな石の下の隙間とかかしら。。」

「そうそう、この大きな石の下の隙間なんかちょうどいい感じよ。」

日出夫は新しく住むことになる自分の石の下を指差して言った。

「じゃ、みんなでここで一緒に冬を越したらいいんじゃない？」

銀次郎が提案した。

小太郎はその様子を想像した。

たぶん、ずっと日出夫に腹を触られるぞ。寒くて動けないというから逃げることもできないぞ。。。いや、でも日出夫も動けないのか???

いやいや、コイツなら動けるのかもしれないぞ。



与助はその様子を想像した。

たぶん、銀次郎は動けないと言っても寝るんだから、寝相悪いぞ。。。寒くて動けないというから逃げることもできないぞ。いや、でも銀次郎も動けないのか???  
いやいや、コイツなら動けるのかもしれないぞ。

銀次郎はその様子を想像した。

みんなで冬を越すのか。楽しそうだな〜〜。

そして、与助が提案した。

「まあ、まだ時間はあるから、もう少し冬を越す場所は探してみようじゃないか！」

それを聞いた小太郎が

「そうだな。きつともっといいところがあるかもしれないな!!」  
すぐに同意した。

与助は思った。

ははくん。小太郎は日出夫に腹を触られるのを想像したんだな。

小太郎は思った。

ははくん。与助は銀次郎の寝相の悪さを想像したんだな。

お互い思った。

どうにか、みんなで冬を越すのだけは回避するぞ。

「どうだった？あの石の下は？」

銀次郎が日出夫に聞いた。

「とつても、よかったわよ♡」

「いいところを教えてくれてありがとうね」

とても嬉しそうに、満足気に答えた。

「それはよかったよ！」

「そんなにいいのなら、みんなと一緒にそこで冬を越したらいいね？」

銀次郎が嬉しそうに言った。

「ほんとね。ここなら4人分の空間は十分にあるし、寒さもしのげそうだし、みんなと一緒にだったら楽しそうだしね。」

「あと、1匹で冬を越すと危険が多いから、イモリとか見ていると何匹かで冬を越すようにしていたから、安全のことも考えたらあなたたちは単独よりは複数で冬を越した方がよさそうだしね。」

日出夫が銀次郎の提案に賛成して、さらに先輩としての助言もして、それを聞いた銀次郎は大いに感心した。

2人の会話を隙間から耳を澄まして聞いていた与助が、まだ寝ている小太郎を起こした。

「おい、そろそろ起きろよ」

「んん。もう朝か。。」

「あの2人がさつき話していたんだけど、4人であの石の下で冬を越そうって言っていたんだよ！」

「えー。それはどうにか阻止しないと!!」

それを聞いて、小太郎は一気に目が覚めた。

「どうやって、阻止するか考えないといけないな!!!」  
与助が提案した。

「そうだな。」

「あの隙間は4人には狭いから、銀次郎と日出夫はあそこで、俺らは別のところでって提案するのはどうだい？」

「いや、それがね。。。さっきの2人の会話だと、4人が入るのに十分な広さがあるみたいなんだよ。。。」

「そうか、じゃダメか。」

腕を組んで小太郎が考えを巡らした。

「じゃさ、2人とかにすると何か言われるかもしれないから、みんながそれぞれ別々に冬を越すように提案したらどうだろう？」  
小太郎がいいアイデアが思いついたという顔で提案した。

「いや、それがね。日出夫が何度も冬を越していて、その経験から単独で冬を越すより集まって冬を越した方が安全だと言っていたんだよ。」

「特に俺ら小さなカエルは。」  
与助が困ったように答えた。

「そうなのか。」

小太郎は腕組をしながら、考えた。

「じゃさ、日出夫の石の下の隙間の中に部屋をどうにか作って、銀次郎の寝相の悪さとか、日出夫が腹を触ってくるのを阻止するようにするってのはどうだい？」

小太郎は身振り手振りで説明した。

「それはとてもいいアイデアだけどさ、あいつらが、部屋を作るのを嫌がると思うんだよね。」  
与助が提案した時の2人の態度を想像して答えた。

「確かにさ。銀次郎はみんなで楽しく過ごすとか言っていたからさ」  
小太郎が斜め上を見上げながら言った。

「困ったさ。」

2人が同時に言った。

・  
・  
・

「まあ、とりあえず、まだ時間はある訳だし、あいつらも冬を越す場所のことなんか、ずっと覚えているわけじゃないだろうから、少し様子を見ることにしよう。」  
与助が提案した。

「そうだな。さすがにすぐに冬を越す場所を決めるなんてことは言いださないだろ。」

「まあ、とりあえず腹が減ったから、何か食べに行こうか？」

「そうだな。」

2人が朽ち木の隙間から出て行くと、朽ち木の陰から日出夫と銀次郎が2人を待ち構えていた。

「ん？どうしたんだい？」

与助が銀次郎と日出夫を交互に見て言った。

「あのさく、冬を越す場所についてなんだけどさく。日出夫ちゃんの石の下の隙間がとてもしらんだよね。みんなであそこで冬を越すのを決めない？」

銀次郎が2人に提案した。その横にはニコニコしながら日出夫が見下ろしていた。

「え！だって、まだ寒くなるまで時間があるから、もう少し考えるって話だったじゃないか！」  
与助が困りながら返事した。

「でもね。探している時間があつたら、早くあの建物を登った方がいいんじゃないかと思うんだよね。」

銀次郎がまともなことを言って来たので、与助も小太郎も返答に困ってしまった。

「まあ、その石の下の隙間に行ったことがないから、よくわからないから、とりあえず、一回見るだけ見てみようか？銀次郎、君は見たのかい？」

与助が冷静を取り繕いながら銀次郎に答えた。

「そういえば、まだ見ていなかったよ。」

「じゃ、とりあえず、腹減っているから、何か食べたらまた集まって、皆であの石の下の隙間に行ってみようじゃないか。」  
与助が提案した。

「そ、そうだな。」  
小太郎が答えた。

さて、どうする？行ってしまったらもう逃げられないぞ。

与助と小太郎は目を合わせた。

妄想アマガエル日記（31） — 10月15日（日） 晴れ

「ちゃんと食べれたかい？」

与助が小太郎に聞いた。

「あゝまあ、それなりにな。」

「でも、どうやって一緒に冬を越すのを回避するのか考えていたから、何を食べたのかあまり記憶にないんだよ。たぶん、なんか、小さなハエみたいなのを食べたと思うんだけどな。」

小太郎が困ったように言った。

「君もかゝ 実は俺もいろいろ考え過ぎて、何をどうやって食べたのかあまり覚えていないんだよ。」

そして、待ち合わせの石の前に2人は来てしまった。2人でいろいろと相談したが、逃げるアイデアが何も思いつかなかったのである。

すると、石の下の穴の中から日出夫と銀次郎が一緒に出てきた。

「銀次郎、君は中に入ったんだ！」

与助が少し驚いて聞いた。

「あゝそうなんだよ。僕はもう朝は食べていたし、待っている間 時間があつたし、ひでおちゃんも朝はもう食べたって言うからさゝ」

銀次郎が日出夫を見ながら言った。

「でも、この中すごく広くて快適だったんだよ。驚いたよ。この石の下がこんなに広くて快適だったなんて!!!」  
「これなら4人どころか、10人くらい冬を越すことができそうだったよ!!!」  
銀次郎が嬉しそうに言った。

「そっかあ。。。まあ、とりあえず、見てみるか。」  
与助が小太郎を見ながら言った。

「そうだな。。。とりあえず、見るだけ見てもみよう。。。」  
小太郎がいやいやそうに返事した。

銀次郎たちが住んでいる朽ち木の前にある幹の細い木の下に、スイカ大の石があつて、その石を取り囲むように朽ち木が積み重ねられ、石に直接雨や風が当たらないようになっていた。その石の下にちょうど日出夫が1匹入れるくらいの拳大の穴が下に向けて開いていて、その入り口の穴の手前には土の山が出来ていて穴に雨が入らないようになっていた。おそらく、この穴は何かの動物が掘った穴であるようで、その穴を掘った時の土が入り口に積み上げられているのであった。

「じゃ、中に入りましょうか♡」

日出夫が先頭で穴に入っていた。

その後に、銀次郎が嬉しそうについて行って、与助と小太郎がしぶしぶついていった。

穴に入ると外とは違い少し暖かくて、外の温度とは少し違うことがわかった。

「どう？いいでしょ？」

銀次郎が振り返って2人に聞いた。

「いやいや、まだ入ったばかりだろ。」

与助が答えた。

そのまま奥に進むと、広い空間が広がっていた。そこは日出夫が5匹は入れるほどの広い空間だった。

「ほほ〜、これは、なかなかいい空間だな〜」  
与助が見まわしながら感心した。

「でしょ〜。あそこから小さな光が差し込むから、真っ暗にもならないんだよ!!!」  
銀次郎が光の先を指差しながら言った。

「ほおほ〜。いいね〜すごいね〜」  
与助が感心して言った。

さらに、その奥に進むと、小さなトンネルにつながっていた。たぶん、それはモグラのトンネルのようだったが、今は使われていないものようだった。トンネルを少し進むと泥が湿っていて、小さなミミズが這い出てきた。

「どう?ここは餌にも困らないんだよ!!!」  
銀次郎がさらに嬉しそうに言った。

「ほおほ〜。これは素晴らしいね〜」  
与助がさらに感心して言った。

「おいおい、お前。何そんなに感心してんだよ。」  
小太郎が後ろから与助に小声で言った。

「あっ!そうか。すまんすまん。あまりに素晴らしすぎて、忘れていたよ。」



与助が我に返って、少し反省しながら言った。

「さらに、このトンネルは朽ち木の隙間からこの大きな石の上に出れるトンネルがあつて、この石の上からの景色は絶景なんだよ！！！！！！」

銀次郎が案内しながら、嬉しそうに説明した。

その景色を見た与助は

「いやあ〜。これは素晴らしいですね〜。本当に素晴らしいですね〜。」  
と感心して言った。

小太郎は与助を見ながら思った。

たぶん、皆と一緒にここで冬を越すことになりそうだな。。。

まあ、仕方ないか、なかなかよさそうところだしな。。。

どうにか日出夫から離れる方法を考えよう。

それよりも、与助こいつ、、、

建もの探訪の時の渡邊篤史みたいだな。。。最後の方なんか自分から渡邊篤史に寄せにいつていたしな。。。  
やっぱり、面白い奴だ。

妄想アマガエル日記(32) — 10月21日(土) 晴れ

「とりあえず、冬を越す場所は決まったことだし、あの建物を登る練習をはじめないといけないな。。。」  
与助が朽ち木の部屋で横で寝転んでいる小太郎に言った。

「そうだな〜。でもな。。。」

「あの穴の中は本当に冬を越すのに最適な場所というのはよくわかったんだけど。。。日出夫からどうやって俺は逃げたらいいの  
だろうか？」

天井を見ながら独り言のように言った。

「あゝ、そうだな。。」

「俺も、銀次郎の寝相の悪さというか、あの危険をよく知っているから、あれからどうやって身を守ればいいのかと、考えて  
いるところなんだよ。。。。」

与助が寝転んでいる小太郎を見ながら呟くように言った。

「そうだよな。。」

「日出夫から腹を触られるのを避けながら、銀次郎の寝相の悪さからも逃れる方法を考えないといけないな。」

「ほんとだな。どうしたもんかね。。」

「まあ、俺は日出夫から腹を触れる心配はないのだけどね。」

「羨ましいよ。。」

「日出夫はどうしてあんなにも俺の腹が好きなんだだろうな。。」

「小太郎の腹が柔らかくて、ツルツルで、美肌だからだろ？」

「確かに、前に背中に乗られた時に君の腹は本当に柔らかくて、気持ちよかったもんな。。」

「そうか？俺にはわからんな。」

「でも、どうにかして、触られないようにしないとゆっくり寝てられないよね？」

「そうなんだよな。。」

「日出夫のほっぺたはなんかざらざらしてて、こそばゆいんだよ、」

「じゃ、触られないようにするしかないけど、それには何か理由が必要になるね。」

「例えば、地面に腹を付けていないと寝れないとか、腹を触られると体がだるくなるとか、寝ている時に腹から毒が出るから危ないとか。」

与助が腕を組みながら、ゆっくり考えながら提案した。

「それだー!!」

「まだ寝ている時に腹を触られたことはないからさ。寝ている時に腹から毒が出るってのはいいんじゃないか!!!」

「いいこと思いつくじゃないか!!! さすがだ!!!」

小太郎は飛び起きて、与助に向かって言った。

「そうか? じゃ、まあそれでどうにか乗り切ってみようじゃないか。」

「次は、銀次郎の寝相の悪さをどうするかだな?」

「確かにさ。でも、銀次郎にはいつも寝相の悪さについては言っているわけだし、アイツにちゃんと行ってさあ、個室で寝て貰うとか、体があまり動かないように固定するとかしたらいいんじゃないかい?」

「そうだね。日出夫と違って、銀次郎なら、どうにかなるか!!!」

その日は、そのまま2人は解決策を思いついて、安心して寝ることができた。

そして、次の朝。

隙間から降りたところにちょうど銀次郎と日出夫が話しをしていた。

「おはよう! 銀次郎と日出夫は最近よく一緒にいるね。もうなんか食べたのかい?」

与助が2人に聞いた。

すると、銀次郎が

「そうだね。今ちようどミミズを食べて戻ってきたところなんだよ。」

「昨日は早速、ひでおちゃんの穴と一緒に寝たんだけど、本当に寝心地がよくてね、よく寝れたよ！」

「そうなんだ。。。」

与助は日出夫をチラリと見た。

日出夫は体中、あざだらけで目の上に大きなたんこぶが出来ていた。

「大丈夫かい？日出夫。。。」

与助は心配そうに聞いてみた。

「え、、、」

日出夫は目を逸らして返答した。

その間に銀次郎が自分の隙間に戻ったので、その隙に与助が日出夫を少し離れたところに連れていった。

「大丈夫かい？その体のアザは銀次郎の仕業だろ？」

日出夫はうなずいた。

「やっぱりなく、銀次郎の寝相の悪さは異常なんだよ。」

与助は日出夫を同情して言った。



それを見て与助は思った。

「フオ~~~~!!」

2つの問題が一気に解決するかもしれないぞ!!俺って天才!!

早く小太郎に話してあげたいなあ。

妄想アマガエル日記(33) — 10月23日(月) 晴れ

ニヤニヤしながら与助が小太郎を探していた。

「いったい、どこに行ったんだろう〜な〜」

「早く、俺の素晴らしい天才ぶりを教えてあげたいんだけどな〜」

その頃、小太郎は餌を探して少し遠くまで来ていた。

与助は朽ち木の周りを探していたが、なかなか小太郎の姿を見つけないことができなかった。そこで、少し水路側を探していることにした。たぶん、餌を探して移動しているだろうと予想して、餌が多い水路に向かったのである。

その頃、小太郎は水路を離れて雑木林の前に広がる草原で餌を探していた。

やっと水路に着いた与助は周りをぐるっと見渡したが、どこにも小太郎の姿はなかった。仕方なく戻ろうとした時、小太郎の後ろ姿を見つけた。

「お〜い、小太郎〜」

与助が近づいていくと、それは小太郎ではなく別のヌマガエルだった。

「あつ、すまない。知り合いのヌマガエルを探していて、間違えてしまった。」  
そのヌマガエルに謝って、雑木林に戻ろうとすると、銀次郎が雑木林の前の草原にいるのが見えた。

あいつはあんなどころで何をしているんだ？

気になった与助は銀次郎を遠くから、少し眺めてみることにした。

銀次郎は、一人でニコニコしながら何かを集めているように見えた。

ん？アイツはあんなどころでいったい何を集めているんだ？

気になった与助は気づかれないように少しずつ近づいて行った。

すると、銀次郎が何かをまとめて、雑木林の方に走って行った。

与助は銀次郎に気づかれてはいなかったようではあるが、ちょうどどこかに行ってしまったのである。とても気になったので、銀次郎の後を追いかけることにした。

そこは、いつもの朽ち木とは違う雑木林の少し陰になったところにあつた朽ち木であつた。

銀次郎の奴、いったいこんなところで何をやってんだ、？

与助は銀次郎が何をしているのかとても気になってしまった。

息を殺して隠れていると、背中から

「おい！与助、こんなところで何してんだ？」

小太郎が声をかけてきた。

「しー、今、銀次郎が変なことをして、あの見知らぬ朽ち木の中に入っていったから見張っているんだよ。」  
与助が小太郎に身を隠すように身振りして小声で言った。

「変なことつてなんだい？」

小太郎が小声で言った。

「あそこに草むらがあるだろ？あそこでなんかを集めていたんだよ。食べ物とかじゃなくて、なんか物を集めていたんだ！」  
「物？その物は見ていないのかい？」

「気になって近づいて見ようと思ったんだけど、ちょうど走って行ってしまって、後を追ったらここに着いたってわけさ。」

「そういうことか。いったい何を集めていたんだろう？」

「ところで、この朽ち木って初めて知ったな。こんなところにこんな朽ち木があつたんだな。」  
小太郎が見まわしながら言った。

「ほんとだよな。案外近いところにあつたのに、あの大きな木の陰になっていたし、地面が少し凹んでいるから、全然気づかなかつたよ。」

「アイツはいったいこんなところで何をしているんだろう？」

「俺も気になってきたよ。」

2人でここそと話していると、朽ち木の隙間から銀次郎がニコニコしながら出て来た。

「おい、出てきたぞ。」

与助が小太郎に小声で言うと、小太郎が静かにうなずいた。



銀次郎がどこかに行くのを身をかがめて気づかれないようにやり過ごした2人は、身を上げた。

「おい、どうする？」

与助が小太郎に聞いた。

「そりゃ、アイツがいたあの朽ち木の隙間を見にいくだろ！」

「そうだな。どうしても気になる。」

2人は周りを見渡しながら、少しずつその朽ち木に近づいて行った。そして、銀次郎が入っていた隙間を覗いた。

2人同時に声が出た。

「おっ、これは、、、」

妄想アマガエル日記(34) — 10月27日(金) 晴れ

「おっ、これは、、、」

与助と小太郎を顔を見合わせた。

そこには、小さな丸い小石や植物の葉が置いてあった。また、隙間の奥にはクヌギのドングリの帽(殻斗)が3つ裏返して置いてあった。

「おいおい、、、これらはいったいなんなんだ？」

小太郎が与助に聞いた。

「さあ。わからないよ。この丸い小石をさつきは集めていたんだな。小石を手に取って与助が答えた。」

「でも、こんなものをアイツは何でこんなに集めているんだろうな？」

「確かにな。」

「あの奥に3つ並んで置いてあるドンダリの帽はいつたいたなんだろうな？」  
小太郎が指差して言った。

「確かに。。。。なんであんなものをあそこに並べて置いているんだろうな？」  
与助が腕を組んで考えながら言った。

「もしかしたら、あれは座るためのものかなんかなんじゃないか？」  
小太郎が思いついたような顔で言った。

「いやいや、よく見てみるよ。あれはモケモケした毛みみたいなトゲみみたいなので覆われているじゃないか！あんなものの上に座ったらお尻が痛いじゃないか。」  
与助がすぐに否定した。

「じゃ、あれはいつたいたなんだっていうんだい？」  
小太郎が不満げに答えた。

「あれは何かを隠すために被せているんじゃないか？」  
与助が色々と考えて言った。

「確かになく。じゃ、何を隠しているか見てみないか？」

「そうだな。ここまで来たら見てみるか！あまりいいことじゃないけど。」

そして、2人でゆっくりと奥に進み、一番左側のクヌギの帽を小太郎が持ち上げた。

「ぎゃっ！！」

与助がびっくりして声を出した。

「おいおい、これは、ナメクジじゃないか！！」

「なんでこんなもんをこんなところにアイツは入れているんだろ？」

「もしかして、これはペットか何かなんだろうか？」

小太郎が持ち上げたクヌギの帽の裏を見ながら言った。

「確かに、まさかナメクジが出てくるなんて思ってなかったから、びっくりしたよ。他の2つのも見てみるか。」

そういうと、与助が残りの2つも持ち上げて見てみると、その2つにも同じように小さなナメクジが何匹も入っていた。

「銀次郎の奴、こんなにいっぱいナメクジを飼育して何をしようというんだろう？？？ あの大量の葉やら小石はこのナメクジの飼育に使うのだろうか？？」

与助がクヌギの帽を元通りに戻しながら言った。

「ほんとだな。まったくわからないな。」

「でも、そろそろ出るか！！ アイツがいつ戻ってくるかわからないからな。」  
小太郎が提案した。

「そうだな！じゃ、バレないようにすべてを元に戻して、ずらかるとしよう。」

いつもの朽ち木に戻ってきた2人は銀次郎の姿を探した。でも、そこに銀次郎の姿はなかった。

「アイツいったいどこに行っただらうな」

与助がそう言いながら周りを見渡していると、日出夫の穴の中から銀次郎が出てきた。

「おっ、そんなところにいたのかい！」

与助が銀次郎に言った。

「そうなんだ。ひでおちゃんにいろいろと教わっていてね。」

銀次郎が嬉しそうに答えた。

「へへ。これからどっか行くのかい？」

小太郎が銀次郎に聞いた。

「そうね。ちよつと、やることがあるからね！」

「ふうん」

与助と小太郎は同時に言った。

「じゃ、またあとで！」

そういうと、銀次郎は草むらの方に走っていった。

その後ろ姿を見た2人は、何も言わずに頷いて、銀次郎のあとを追い始めた。見つからないように追った2人は、途中で銀次郎の姿を見失ってしまった。

「どこいったんだらうな。さっきまで姿見えていたのにな」

小太郎が周りを見渡しながら言った。

すると、与助が

「ここはさっきのあの朽ち木に近いだろ？アイツはあそこに行つたんじゃないか？」

「確かに、その可能性はあるな。」

2人は朽ち木に周りこみながら隙間の反対側からゆっくりと登り、朽ち木の上に登った。そして、隙間の中を上から覗きこんだ。すると、そこには銀次郎がこちらを背にして何かをしているところだった。

右手にはナメクジを持っていて、左手には小さな丸い石を持っている。それを時折、体や顔にひっつけて何かしていた。また、よく見ると体に植物の葉を貼っているように見えた。

「おいおい、アイツなにやってんだく????????」

小太郎が与助に小さな声で聞いた。

「わからないな、、、いったいあれは何やってんだろ？」

「おい！もう少しこっちを向いてくれないかな、、、よく見えない。」

小太郎が頭を穴の奥にぐいと伸ばしてみようとしていた。

「おい、小太郎、そんなに首を伸ばしたらバレてしまうだろ！！」

「もう少しで見えそうなんだよ。もう少し、もう少し」

小太郎が銀次郎が何をしているかよく見ようと、首を伸ばして力を入れていると力が入り過ぎたのか、乗っていた隙間の上の

部分がくずれて、隙間の中に2人とも落ちてしまった。

ドスーーン

「イテテ、、、」

与助と小太郎がくずれた木くずをのけながら見上げると、こちらに背を向けていた銀次郎がゆっくりこちらを振り返った。そして、低い声で言った

「見たな〜」

妄想アマガエル日記(35) — 10月31日(火) 晴れ

「お前、いったいそれは、、、何やってんだ、、、????」

落ちた朽ち木の残骸をのけながら、うつ伏せになった与助が体を起こしながら銀次郎を見上げて言った。

「.....」

数日前の夜 @ 日出夫の石の下の穴の中——

日出夫と銀次郎は並んで寝ようとしていた。その夜は満月で月の明かりが隙間から2人を照らしていた。

「ひでおちゃんはさ〜。どれくらい生きてるんだい?」

銀次郎が天井を見ながら聞いた。

「そうね。オタマジヤクシからカエルになってたぶん、6年くらい経つよね。早いわよね」

「これまで、冬はどうやって過ごしていたんだい？」

「冬つてのは、寒いんだろ？体が凍ったりするんだらうか？」

「そうね。とても寒いよね。でも、寒い時はほとんど動けなくなるのよ。だから、あまり覚えていないよね。考えることもあまりできなくなるのよ。まあ、ここにいたら敵も来ないだろうし、寒さも多少しのげるから心配ないわよ！」

「へ〜そうなんだ。動けなくなつて、考えることもできないんだ。あと、へびも動けなくなるのはよかつたよ！じゃ、心配ないね！」

銀次郎が何度も頷きながら、真剣に返事した。

「ただね、私たちヒキガエルは、あなたたちアマガエルとか小太郎ちゃんみたいなヌマガエルと違って、2月とか3月とかの寒い時期に産卵するのよ。あれがキツイわよ。水が超冷たいのよ。」

「まあ、私は産卵はできないのだけどね。」

「そうなんだ。僕がオタマジヤクシだったのは6月くらいだったから、そのくらいに産卵するんだらうけど、ヒキガエルってそんな寒い時期に産卵するんだ。違うもんだね！」

銀次郎は日出夫が話すことが知らないことばかりで、感心しっぱなしだった。

「あとさ。この前さ。冬を越すためにやっておかないといけないことがあるって言ってたでしょ？ 確か、餌をいっぱい食べるとか、冬を越す場所を探すとか、肌の手入れとか。」

「そうね。場所はもうみんな決まったし、餌はここは豊富だから心配ないとして、肌の手入れを教えておかないといけなわね！」

「肌の手入れってのは大事なのかい？」

「そりゃもちろんよ！！冬は乾燥するから肌の手入れをちゃんとしておかないと肌がポロポロになって春に起きた時にミイラみたいになるのよ！！そして、水分がなくなつて干し柿みたいになることもあるのよ！！一番ひどいのは、水分が抜けてペツちゃんこになって落ち葉みたいになったりするのよ！！！」

「ええー。そうなの？？じゃ、肌の手入れってとても大事じゃないか！！！落ち葉って、あんなペラペラになるのかい??？」

「そうよ！！！」

「じゃ、どうやって手入れしたらいいんだい??頼むから教えてくれよ」

「いいわよ！！銀次郎ちゃんだけに特別にひでおちゃんオリジナルの肌の手入れを教えてあげるわよ！！！」

それから、日出夫先生の肌の手入れの説明と実践が繰り広げられ、銀次郎はそれメモにとり真剣に聞いた。

そして、気づいたら2人は寝落ちしていた。

次の日、銀次郎は昨夜聞いた肌の手入れに必要な物を集めて、それらを探している途中で見つけた朽ち木の隙間にそれらを隠した。ただ、必要な物はだいたい揃ったが、使い方がわからなかったのので、再び日出夫先生の元を訪ねた。しばらく講釈を受けて理解して、朽ち木に戻り肌の手入れを始めた。



「さっそく、日出夫先生に教えて貰った通りやってみよう！」  
美肌になる自分を想像するとワクワクしてきた。

丸い小石で美顔ローラーのように肌を転がし、美肌に効くと日出夫が言っていたナメクジの粘液を体中に塗り、それをヨモギの葉で覆った。

なんか、肌がツルツルしてきたような気がするぞ〜と内心とても嬉しくなってきた。そこで、さらに丸い小石を顔に転がして、ナメクジの粘液を体中に塗っていると、後ろから

「ミシツ ミシツ、ドスーローーン」  
と大きな音と振動がした。

振り返るとそこには、朽ち木の残骸とともに与助と小太郎の姿があった。

銀次郎は、日出夫から内緒で教えてもらった肌の手入れを2人に見られてしまったと思った。

そして、声が出た。。。

「見たな〜」

妄想アマガエル日記(36) — 11月5日(日) 晴れ

「お前、いったいそれは、何やってんだ、???」

落ちた朽ち木の残骸を除けながら、うつ伏せになった与助が体を起こしながら銀次郎を見上げて言った。

「・・・・・・・・」

「その体中に貼っている葉とか、その手に持っている小石とか、それはなんなんだ？ 起き上がった小太郎が銀次郎に聞いた。」

すると、

「これはね。。。本当は内緒なんだけどね。。。日出夫先生に教えて貰ったお肌の手入れなんだよ。。。銀次郎が少し恥ずかしそうに言った。」

「肌の手入れ？んなもん、なんでやっているんだ？」

与助が体についた朽ち木の粉をはたきながら起き上がって聞いた。

そして、日出夫と一緒に穴に泊まった時に聞いた、肌の手入れをしないと冬を越した時に大変になることや、その後に肌の手入れの仕方や必要な物を教えて貰ったことなどを説明した。

それを聞いた与助と小太郎は2人で顔を見合わせた。

「んなわけないだろ？肌の手入れしている蛙なんてアイツだけだろ！」

「銀次郎、、お前は騙されているんだよ！」

与助が少し呆れて言った。

「そうそう、肌の手入れなんてする蛙なんて、アイツだけだろ。」

小太郎も与助に同調して言った。

「そうなのかい？？だってちゃんと肌の手入れしないと落ち葉みたいにペラペラになるなんて言っていたんだよ！！」  
銀次郎が困ったように言った。

「んなわけないだろ？」

「ペラペラになるって、ど根性がエルじゃあるまいし。」  
与助が呆れて言った。

「じゃ、なんで日出夫先生はそんなことを言ったんだい？」

「そのさく、先生ってのやめろよ」

与助が嫌そうに指摘した。

「ひでおちゃんはなんでそんなことを言うんだい？」

銀次郎が言い直して言った。

「わからないけど、たぶん悪気はないんだろ。確かにそれをやったら多少肌にはいいのかもしれないし。」

「銀次郎の肌も美肌にして小太郎だけじゃなくて、2人の肌を触りたいんじゃないか？」  
与助が冷静に想像した。

「なるほどな。」

銀次郎が少し納得して返事をした。

「まあ、とりあえず理由は後で日出夫に聞いてみるとして、とりあえずその体に貼ってる葉っぱとか取ろうじゃないか。」  
与助が銀次郎に提案した。

「そうだね。でもね、さつきから取ろうとするんだけど、このナメクジのぬめりってなかなか取れないんだよね」  
銀次郎が困ったように言った。

「そうなのかい？」

小太郎がナメクジを触ってぬめりを確かめた。

「ほんとだなく。全然取れないな。」

「日出夫に取り方は教わってないのかい？」

与助が銀次郎に聞いた。

「そうなんだよ。使い方は習ったんだけど、取り方を習うの忘れていたんだよ。」

「じゃ、とりあえず日出夫に聞きに行こうじゃないか。」

与助が提案した。

そして、集めて置いたナメクジを逃がして、3人で朽ち木に戻ることにした。

途中、銀次郎がぎこちなく体を動かしながら

「なんだか、ぬめりがなくなっただけでカピカピに固まってしまったよ」と

と困りながら言うのと、

与助が「困ったなく、これじゃなおさら簡単には取れないな。。。このままだと体が動かさなくなるんじゃないか？」と心配して言った。

どうにかいつもの朽ち木に戻った3人は、日出夫の穴に入って日出夫を呼んだ。

でも、いくら呼んでも日出夫の姿はなく、出て来なかった。

諦めて戻ろうとすると、穴の奥にいた小太郎が落ちていた報告書のような冊子を拾い上げて、2人に見せて言った。

「おい！見てみるよ！これを！！！！！」

その表紙にはこう書いてあった。

『蛙第3形態計画（秘）』

「おい、これは？」

3人が、つぶやいた。

妄想アマガエル日記（37） — 11月11日（土）晴れ

「蛙第3形態計画（秘）」?????

皆が顔を見合わせた。

「おい、これは一体なんなんだ？」

「ちよつと、中を見てみようじゃないか！」

与助が小太郎の手から取って言った。

「でも、これさつき中を見ようとめくってみただけだな、ページの端が貼りついていて開くことができなかつたんだ。小太郎が与助が持っている報告書の小口（背表紙の反対側）の部分を指差して言った。

「あつ、ほんとだ！貼りがついているね。」

与助が試してから言った。

「じゃ、この貼りついていない上か下から見てみたらいいんじゃない？」

銀次郎が提案した。

「そうだな！」

与助がそう言つて上の隙間から最初のページを覗くと、そこには文字やイラストが書いてあるのが見えたが、ちゃんと読むことはできなかった。しかし、かろうじて読める部分が見えた。

・・・アマガエルを食べやすい大きさに切つて・・・

「え！！！アマガエルを食べやすい大きさに切つてつて書いてあるぞ！！！」  
与助が怯えながら言った。

「え！！！どうということだい？日出夫は僕らを食べようとしているっていうのかい？」  
銀次郎もビックリして与助を見て言った。

「これは、大変なことになったな、、だから、俺は最初っからアイツはヤバい奴だって言ったんだ！！」  
小太郎が大きな声で言った。

すると、その時入り口からの日差しを覆うように、黒い影がヌツとでて日差しを遮った。そして、黒くて大きな大きな影が日差しを遮つて、穴の中は暗くなった。

「・・・・・・・・」

3人は振り返り、その黒い大きな大きな影を見て声が出なくなってしまった。

日出夫が帰ってきた。

でも、まだ穴の奥にいるこちらの存在には気づいていない。

どうにか、ここから逃げなくてはいけない。。。

3人はアイコンタクトをした。

少しずつ、少しずつ、音を立てずに暗い暗いトンネルの奥に進んだ。

少し進んだところで、銀次郎の体がナメクジの粘液が固まってきて、次第に動けなくなってしまうた。

「もうダメだ！！僕は歩けない。。。せめて君たちだけでも逃げてくれ。。。」  
銀次郎が小さな声で言った。

「いやいや、何言っているんだ！！」

「俺がおぶっていくから大丈夫だ！」

与助が銀次郎を背に載せようとしたが、銀次郎の体が固まって背に載せることができなくなっていた。

「じゃ、2人で持っていこう！」

小太郎がそういうと、銀次郎のぴゅんと伸びた脚を持った。

そして、与助が頭を持ち与助を先頭に1列になってトンネルを進むことにした。

「すまない。。。」

銀次郎が申し訳なさそうに小さな声で言った。

ようやく、トンネルの奥に石の上に繋がる隙間が見えてきて、そこから光がトンネルの先を照らしていた。

「あの隙間から外に出られるぞ！！」

先頭に行くが与助が嬉しそうに先を指差して言った。

その時、後ろの少し離れたところからノシツノシツと大きな生き物が歩く音が聞こえてきた。それは次第に近づいて来ていた。

「おいおい、、、日出夫が気づいて追ってきているんじゃないか??後ろの遠くからなんかでかい生き物の歩く音が聞こえてくるぞ！！！」

小太郎がその音に気付いて小さな声で言った。

「！！！大変だ、あの隙間からの光に照らされると、ここにいることがバレてしまうぞ。。。。」  
与助がそう言ってトンネルの脇の窪みを指差して  
「ひとまず、あそこに隠れよう。」  
小さな声で小太郎に言った。

3人はどうにか、トンネルの脇の窪みに隠れた。  
次第に大きな生き物の足音が大きくなってきた。

ノシッ ノシッ ノシッ

妄想アマガエル日記(38) — 11月16日(木)曇り

ノシッ、ノシッ、ノシッ

歩く音が次第に大きくなってきた。

そして、ぬっと大きな体が視界に入った。  
やはり、日出夫だ。

大きな体をゆっくりと前進させている。  
息を殺して通り過ぎるのをじっと待った。

ノシッ、ノシッ、ノシッ

どうにか気づかれず通り過ぎて行った。

「ほ。。。」



皆が安堵した。

まず与助が窪みから頭を出して周りを見渡した。

「どうやら、姿が見えないから、隙間の上に行ったようだな。もう大丈夫だろ。」  
小さな声で2人に言った。

「そっかあ。。。よかった〜」

銀次郎が脚をぴくんと伸びた状態で仰向けで言った。

「ほんと、改めて見ると日出夫って大きいよな。。。あんなのに襲われたらひとたまりもないや。。。」

小太郎が身振り手振りしながら2人に小声で言った。

「よし！じゃ、隙間の上には日出夫がいるかもしれないから、来た道に戻って穴の出口から出るか！！」  
与助が提案した。

2人がこくりと頷いた。

そして、銀次郎を2人でタンカのように持って、与助が前で小太郎が後ろで窪みから出て方向を変えようとした時、左奥の大きな岩が動いたように見えた。

そして、その岩がぬっと近づいてきて

「あら！！与助ちゃんと、銀次郎ちゃんと、小太郎ちゃんじゃないの！！！」  
日出夫が3人の後ろから声をかけてきた。

その瞬間、小太郎が腰を抜かして銀次郎を落としてしまった。そして与助が必死に2人を引っ張ろうとするがさすがに2人は

動かせなかった。

「どうしたのよ。なんで、そんなに私を怖がるのよ」  
日出夫が困ったように言ってきた。

「だって、だって、だって、お前、俺たちを食べようとしているんだろ？」  
与助が地面に尻を付けて震えながら言った。

「ん???私なんであんたちを食べるのよ！」  
日出夫が啞然とした。

「俺は知っているんだぞ!!お前の報告書を見たんだからな!!」  
与助が日出夫を指差して言った。銀次郎と小太郎は身動きできずに与助を見ていた。

「報告書???なんのことよ!!」  
日出夫がさらに啞然とした。

「その穴のところにあつた、お前の蛙第3形態計画ってやつのことだよ!!」  
与助が少し冷静になってきた。

「蛙第3形態計画????? なんのことよ!!」  
日出夫はわけのわからないことを言われ過ぎて、少し呆れてきた。

「だから、この報告書のことだよ!!」  
与助が少し戻って、穴の脇から報告書を取ってきて、報告書をパンパン叩きながら日出夫に見せた。

「ん〜???こののどろが報告書なのよ?」

「これはただの私のメモ帳よ。」

日出夫が頭をかしげて困ってしまった。

「ん〜???メモ帳?」

与助も少し困ってきた。でも、こいつは俺たちを騙そうとしているにちがいないから、騙されるもんか!と思った。

「そうよ!どう見てもこれはメモ帳でしょうが。。。どこにそんな蛙なんとか計画なんて書いてあるのよ。」  
日出夫が本当に困ったように言った。

「じゃ、ここは暗いから外に出て話しを聞こうじゃないか!」

与助が提案するように見せかけて、逃げる機会を作ろうとしていた。

「そうね!じゃ、外に出ようじゃないの!!小太郎ちゃん大丈夫なの?銀次郎ちゃんもどうしちゃったのよ!!まあ、とりあえず、出ようじゃないの!!」

日出夫も少しムキになってきた。

「小太郎、大丈夫かい?銀次郎を持って外に出れるかい?」

そう言いながら、外に出たら逃げるぞとアイコンタクトを送った。

「ああ、大丈夫さ。少し足をくじいただけだからな。」

少し震える声で、強がった。

与助、銀次郎、小太郎、日出夫の順で穴の中を進み、外に出た。

ただ、小太郎がまだぎこちなくしか歩けずに少し時間がかかった。

この状態だと3人で逃げるのは難しいなと与助は思った。

もう少し日出夫の話しを聞いて、その間に時間を稼いで、逃げる機会を待とう。

「ほら、どこにそんな蛙なんか計画なんて書いてあるのよ!!」

日出夫が与助が持っている冊子を指差して少し怒っていた。

「どこって、ここの表紙にバッチリ書いてあるじゃないか!!」

与助が明るいところでその表紙を指差して言うと、暗いところでよくわからなかったが、このように書いてあった。

蛙が快適に越冬するために準備するもの。

第一にすることは、銀次郎たち

3人の部屋を作らないといけない。部屋の

形は色々ある考えられるけど、まずはちゃんと

態勢を整えないといけないから、穴の中を

計測しとかないといけない♡

画用紙に部屋の仮の設計図を書いところ♡

秘) ある程度態勢が整えられるまでは、部屋のことは皆に内緒にしておこう♡

「ほら、そんなことどこにも書いてないじゃないの!!」

「これは、あの穴の中で皆で一緒に冬を越すためには各部屋を作らないといけないと思ったから、あなたたちにサプライズで準備しようと思っていた時に書いたメモ帳よ!」

日出夫は怒っていた。

「あれ〜 あ〜最初の一文目以外はナメクジが這ったからか、少し薄くなっていて暗闇では見えなかったんだ!!」  
与助がとても恥ずかしくなっていた。

「でも、この中にアマガエルを食べやすい大きさに切ってとか書いてあったじゃないか!」

与助が、いや、騙されるもんかと思ひながら、返した。

「アマガエルを食べやすい大きさに切つて??そんなこと書いていた?」  
「ちよつと、見せてくれる?」

日出夫が与助が持つていた冊子を手に取つた。

「あれ??なんでこれ開かなくなつてゐるのかしら??」

「たぶんナメクジが歩いて開かなくなつたのね。」

そう言つて、少し破きながら、無理やりページを開いた。

「もしかして、ここの　アマガエルが食べやすい大きさに切つて　のどこを見間違えたのかしら?」

「アマガエル　を　じゃなくて、アマガエル　が　よ。　が。」

日出夫は指差しながら説明した。そして、少し面白くなつてきていた。

「ん??　を　じゃなくて、　が?」

「どういふことだい?」

「だからね、これは何度も言つてゐるけど、あなたたちと一緒に冬を越すために準備するものをメモしたメモ帳なのね。」

「あなたたちに栄養のあるものを食べてもらいたいと思つたから、簡単なレシピみたいなものをアマガエル用とヌマガエル用のを作つていたのよ♡」

日出夫が笑ひながら言つた。

「でも、銀次郎をこんな目に合せて、動けなくして本当は食べようとしてゐるんじゃないのか?」  
与助が騙されるもんかと思つた。

「だからね。。。銀次郎ちゃんのことだから、ちゃんと用法・用量を守らないかもしれないし、ナメクジの粘液を取る方法を教え

ていなかっただから、心配して探していたところだったのよ♡いつもの隙間にもいないし。」

「想像してた通り、ナメクジの粘液塗り過ぎてるし。。。」「  
日出夫が銀次郎を見下ろして、ため息交じりで言った。

「でも、肌の手入れなんて俺たちには必要ないだろ！なんかあるんだろ？」

「肌の手入れしなくらいでペラペラになんて、なる訳ないじゃないか！！」  
与助が未だに疑いを持って言った。

「あゝ。まあ、あれは大きさに言ったかもしれないけど。でも、肌の手入れは大事なものはほんとよ。」  
日出夫が目を逸らして、少し遠くを見た。

「ほら！なんかあるんだろ？」

「まあ、与助ちゃんならわかると思うんだけどね。」

日出夫が与助に少し近づいて、与助にだけ聞こえる声で言った。

「銀次郎ちゃんの反応が良すぎるから、、、、なんか嘘とか言っつて、反応みたくなるでしょ♡驚くところがとても可愛くて見たくなるのよ、、、、茶目っ気よ茶目っ気♡」

それを聞いた与助は

「うん、、、、まあ、、、、わからないでもない。アイツはとても反応がいいからな。。。」「  
小声で日出夫に言った。

「ん????何を話しているんだい？」

銀次郎がボソボソと話している2人を下から見ながら言った。

「どう？誤解は解けたの？」

日出夫が元の位置に戻って与助に聞いた。

「ん〜。。。。。わるかったよ。。。。誤解していた。。。。ごめんよ。」  
与助が納得して、謝った。

「じゃ、とりあえず、冬を越すための部屋を作るサプライズはバレてしまったから、これからみんなで相談しましょう♡」  
日出夫が嬉しそうに言った。

「そうしよう。」

与助が日出夫のメモ帳をパラパラ見ながら答えた。

「あの〜、その前にさあ、この体を動けるようにしてもらえない？」  
銀次郎が脚をぴ〜んと伸ばした状態で申し訳なさそうに言った。

「あ〜、そうね。そうしましょ♡」

「あの〜、俺もさあ、びつくりしすぎて、未だに脚がちゃんと動かないのだけど、これもどうにかしてくれないかい？」  
小太郎も申し訳なさそうに言った。

「ん〜。まあ、それはその内治るわよ♡」

「それまで私の頭の上に乗っていたらいいじゃないの♡」

そう言っつて、小太郎をヒョッと持ちあげて頭の上に置いた。

アマガエル2匹とヒキガエル1匹、そしてその頭の上にヌマガエル1匹。  
元通り。

妄想アマガエル日記(39) — 11月24日(金) 晴れ

「ところで、なんで部屋なんて作る必要があるんだい？」  
銀次郎が不思議そうに日出夫に聞いた。

「えっ！それはね、ほら、一応プライバシーってのがあってのがあるでしょ。だからよ。」

「銀次郎ちゃんの寝相が悪いとかは関係ないのよ！！ほんと！」  
日出夫がアワアワしながら答えた。

「ふん、そうなんだ。」

「せっかく、みんなでしゃべりながら冬を越せると思っていたのにな」  
銀次郎ががっかりしていた。

「いや、この穴の中は暖かいから、体が動けなくなるなんてことはないと思うわよ。だから、しゃべりなくなったら、各部屋からこの広いところに集まってしゃべったらいいじゃないの！」  
日出夫が慌てて与助と小太郎を見ながら言った。

「そうなんだ！なら、よかったよ」

銀次郎がほっとした。

「ところで、この穴の中をある程度測ってはみたけど、どうやって各部屋を作ろうかしらね？」

「そうだな。とりあえず、日出夫の部屋は大きくして、その横に銀次郎の部屋を作って、向いに俺と小太郎の部屋を作るってのでもいいんじゃないかい？」

与助が穴の凹みと日出夫のメモを見ながら提案した。



「えっ、どうして、小太郎ちゃんが向いなのよ！！私の横に小太郎ちゃんで、向いに与助と銀次郎の部屋でいいじゃない？同じアマガエルなんだし。」

「まあ、それでもいいけど、、、」  
与助が銀次郎の寝相の悪さを思い出しながら渋々納得した。

「いや、、、俺は銀次郎は日出夫の横がいいと思うなく。。仲いいしさ」  
小太郎がどうか日出夫から離れようと提案した。

「お前はどつちが、いいんだい？」  
与助が銀次郎を指差して聞いた。

「まあ、僕はどこでもいいんだけどね、、たぶん、ずっとこの広いところにいると思うからさ」  
銀次郎は皆としゃべりたくて仕方がない。

「いやいや、寝る時はちゃんと自分の部屋にいけよ。マジで」  
与助はこんな広いところで銀次郎を寝かすわけにはいかないと思って、強く言った。

「うん、、、わかったよ。。」  
銀次郎が渋々答えた。

「よし、じゃ、日出夫の横が俺で、向いに小太郎と銀次郎の部屋を作るので問題ないだろ？」  
「ん。。まあ、仕方がないわね。そうしましょ。」

日出夫が渋々納得して、皆も納得した。

「じゃ、日出夫が測ってくれたこの穴の中の図を使って、各部屋の形を作ろうじゃないか。」  
与助がそう言って、日出夫のメモ帳に各部屋の簡単な設計図を書き出した。それを皆で覗きこむように見て、あくでもない、こゝでもないといいながら、少しずつ完成していった。

その後、与助と銀次郎がその設計図を見ながら、地面に線を引いて部屋の形を作りはじめた。

「そうそう、もう少し左」

与助が線を引く銀次郎に指示を出した。

「これくらいかい？」

「そうそう、そのまままっすぐ」

徐々に各部屋の形が出来ていく様子を日出夫と日出夫の頭の上の小太郎は見ていた。穴の中はぽかぽかと暖かく、日出夫も小太郎も眠くなってきた。

「ちよつ、ちよつと、小太郎ちゃん、私の頭の上で寝ようとしているんじゃないの？」

日出夫が小太郎が寝ると毒が出ることを思い出して慌てて聞いた。

「ん？？なに？」

小太郎がウトウトしていた。

「毒よ！毒！小太郎ちゃんは寝ている時に腹から毒が出るの知っているのよ！！」

「毒？なんのことだい？」

小太郎は呆気にとられて返答した。

与助は銀次郎と線を引いていて、2人の会話は聞こえない。

「ん？与助ちゃんから聞いたのよ。あなたが寝ている時に腹から毒が出るってことを！」

その瞬間、小太郎の頭の中のスーパーコンピューターが物凄いスピードであらゆる状況を計算した。  
カタカタタタ……カタカタタタ……

与助

腹から毒

寝ている時

カタカタタタ……カタカタタタ……

チン！！

弾きだした答えは。

「そうなんだよ。俺は寝ている時に腹から毒が出るんだ！！だから、一緒に冬を越す時は一人で寝ないといけないんだ。」

「そうでしょ。だから、あたしの頭の上で寝ちゃダメよ！！」

「そっ、そうだね。」

そして、小太郎は与助に心から感謝した。

その後、このことを与助に小声で言うと、

「そうだったよ、小太郎にそのことを言おうと探していた時に、銀次郎が変なことしてるの見つけて、色々あったらどう？、言いそびれてしまったよ。ごめんよ。」

「いやいや、ほんとにありがたうな！お前は天才だ！」

小太郎が小声で与助を褒め、それを聞いた与助は嬉しそうにほほ笑んだ。

### 妄想アマガエル日記（40） — 12月3日（日）曇り時々雨

穴の中のくぼみを利用して、部屋を作るための線も引き終わって、少し休んでいた。

「まあ、とりあえず、線は引いたし、あとはこの線にどうにかして壁を作ったらいいけど、どうやって作るかな。。。」  
与助は独り言のように呟いた。

「そうだね、葉っぱを重ねて置いたらいいんじゃない？」

銀次郎がニコニコしながら言った。

「いや、それじゃ、風が吹いたら飛んで行ってしまっただろ？」  
与助が優しく否定した。

そして、次に腕を組みながら小太郎が考えて提案した。

「そうだな、じゃ、石を重ねて壁を作るってのはどうだい？」

「いや、それは、運ぶの大変だろう？」

「それ作っている間に冬が終わっちゃうさ！」

与助がまた優しく否定した。

そのやり取りを上から見下げていた日出夫が

「そうね、、、じゃ、外に朽ち木がいっぱい落ちていたから、あの朽ち木の樹皮を剥いでとってきて、くぼみの入り口を覆うつてのはどうかしら？」

「なるほどなく、確かに朽ち木の樹皮は簡単に剥がれるし、色々な大きさがあるし、簡単に加工できるし、軽いし、頑丈だし、、、ん、すんばらしい！さすが、日出夫だ！！」

与助は心底感心して、膝を手を叩いた。

それを見ていた銀次郎と小太郎が顔を見合わせて、少し悔しそうな表情をした。

そして、3人の様子を上から見ている日出夫が2人をフオーしようとして、

「でもね。銀次郎ちゃんが言っていた葉っぱも、小太郎ちゃんが言っていた石もどっちも併用したら、よりいいのができるんじゃないかしら？」と

気を遣って言った。

すると、与助が

「なるほどなく、確かに、朽ち木の壁の下に石をわずかに積んで、扉などを落ち葉で作ればいいってことか、、、ん、すんばらしい！さすが、日出夫だ！！！」

膝を2回叩いて、感心した。

それを見ていた銀次郎と小太郎が、顔を見合わせて、すねた。

そして、3人の様子を上から見ている日出夫が、心の中で少し思った。

この子たちは、ほんと、、、

めんどくさい子たちだわ♡

妄想アマガエル日記（41） — 12月10日（日）晴れ

「よし、じゃ、穴の外に出て朽ち木の樹皮を集めに行ってから、部屋を作ろうじゃないか！」  
与助が、元気よく皆に声をかけた。

でも、なかなか銀次郎と小太郎が動いてくれない。

「おいおい、どうしたんだよ〜」

与助が2人に声をかけた。

でも、2人とも口をとがらせて目を合わせようもしない。

「おいおい、俺がなんかしたっていうのかい？」

与助が困って、2人に聞いた。

「だって、なあ？」

小太郎が銀次郎に言った。

「そうだよ〜」

銀次郎も口をとがらせて小太郎に返事した。

「なんだよ、俺がなんかしたか？」

与助は困ってしまった。

「僕らが言ったことは何も聞いてくれないけど、いつもいつも日出夫が言ったことだけは物凄く賛同するじゃないか!!」  
銀次郎が口をとがらせて言った。

「ほんと、そう」

小太郎も口をとがらせて言った。

「そんなことないさ。ただ、日出夫が言うことがいちいち的確だからさあ」

「やっぱり、俺らより長く生きてるだけあるな」って感心して賛同してしまうだけさ。」  
与助が少し呆れて答えた。

「まあまあ、銀次郎ちゃんも小太郎ちゃんも言ったことはちゃんと与助ちゃんも賛同していたじゃないの♡」

「だから、ほら、銀次郎ちゃんが言った落ち葉にしても、小太郎ちゃんが言った石も、今から取りに行くって与助ちゃんと言っていたでしょ!」

日出夫が2人をなだめるように言った。

「いや、与助は朽ち木の樹皮を取りに行こうとは言ったけど、落ち葉と石は言っていないかったよ!」  
銀次郎が、さらに口をとがらせて、与助を指差しながら言った。

「そうだ! そうだ! 与助は樹皮のことしか言っていないかったぞ!!」  
小太郎も口をとがらせて、与助を指差しながら言った。

それを見ていた与助が2人のとがった口をつまみながら、

「まったく、お前らは、こんなに口とがらせながら言うことじゃないだろ?」

「俺が悪かったよ。樹皮と落ち葉と石を取りに行こう!」

そして、ようやく2匹のアマガエルと1匹のヒキガエル、そしてその頭の上にヌマガエル1匹が穴から外に出て樹皮と落ち葉と石を集めに行くことにした。

数時間後……

「よし！これだけあれば十分部屋を作ることにはできるだろう！」

与助が皆で集めたものを見ながら言った。

「そうね。取って来過ぎたかもしれないけど、まあ、銀次郎ちゃんはたぶん壊すだろうから、その補修用に予備で置いておかないといけないから、これくらいは必要ね。」

日出夫が悪気なく言った。

すると、また銀次郎が口をとがらせようとしたので、与助がその口をつまんで、

「まあ、まあ、日出夫も悪気はないんだ、落ち着いてくれ！」

それを聞いて、ゆっくりと銀次郎の口が元に戻ったので、皆で部屋の壁を作りはじめた。

まずは、各部屋のくぼみの前に引いた線の上を取ってきた石を積んでいった。腰の辺りまで石を積んで、その石垣で挟むように樹皮を立てた。ちょうど、穴の高さまである大きな朽ち木をとってきたので、それを穴の天井にはまるように加工して立てると、ちゃんとした壁を作ることができた。

「お〜！なんかちゃんとした壁になったね〜！」

銀次郎がそれを見て喜んだ。

「ほんとだなく。ちゃんとした部屋になったな〜！」

小太郎もそれを見て感心した。



「じゃ、次は落ち葉を壁と穴のくぼみの壁のところらぶらさげて、扉にしようじゃないか！それぞれ好きな落ち葉を選んでつけよう！」

与助が皆に提案した。

「そうね。私はこの大きなハウノキの葉にしようかしらね♡」

日出夫が選んでとりつけた。

「おれは、このギザギザしてかっこいいからクヌギの葉をつけよう」

小太郎が選んでとりつけた。

「じゃ、俺は、この葉が肉厚だし、艶があるからカキノキの葉をつけよう」

与助が選んでとりつけた。

「みんなどんどんつけていくね。じゃ、僕はこの色が綺麗だからイロハモミジの葉っぱにしようかな？」

銀次郎が選んで取り付けようとした。

すると、与助が、

「おいおい、そんな薄いペラペラの葉じゃ、寝相の悪いお前は部屋から出てきてしまうだろ？」

「この頑丈なモクレンの葉にしなよ！ほらっ。」

それを聞いた銀次郎は、

静かに、そして少しずつ、口がとがりはじめた。

妄想アマガエル日記(42) — 12月15日(金) 雨

「まったく、お前はいつまでたっても子供だな、」

「いちいち、口とがらせてすねるなよ。。。」

与助がそう言いながら、銀次郎の部屋の扉を付けるのを手伝っていた。

「与助が、いつも日出夫にばかりいい顔するし、僕が言うことをいつだって否定するからさ。」  
銀次郎が口をとがらせながら、モクレンの葉の下を持ちながら言った。

「いやいや、別にお前のことを否定したり、日出夫にいい顔しているってわけじゃないんだ。ほんと！信じてくれよ。」  
「なんか嫌な思いをさせたんなら、謝るからさ。」

与助は本当に誤解を払拭しようと丁寧に説明した。

「まあ、いいんだけどね。与助はいい奴だから、悪気がないのは知っているからさ。」

「なら、よかったよ。これからは、少し気を遣うようにするよ。」

「いや、気を遣われるのは嫌だな。」

扉をつけ終わって、片づけをしながらつぶやいた。

「わかったよ、、じゃ、気を遣わないでおくよ。」

「ん〜、それもまた嫌な思いするかもしれないよ。」

「じゃ、どうすればいいんだよ！！」

与助が困ってしまった。

「そうだね。。とりあえず、僕がいうことを1回受け入れてみるってのはどうだい？」

「ん？どういうこと？」

「だからね。僕が何かを提案してみるでしょ。やる前にそれを否定するんじゃないよ、1回やってみてから決めるってことだよ。」

「ん〜、まあ、よくわからないけど、とりあえず、今日だけはそうしてみようか。」  
与助がしぶしぶ銀次郎の提案を受け入れてみた。

「そうそう、そんな感じでさあ。1回受け入れてみて欲しいんだよ！！」  
銀次郎がとても嬉しそうに与助を見た。

それぞれ部屋もできたので、また広い空間の中央にみんなが集まった。

「じゃ、とりあえず、みんなの部屋も完成したし、これからどうしようか？」  
与助がみんなに相談した。

すると、小太郎が、

「じゃさ、まずは自分の部屋に冬を越すために落ち葉を敷いたりして、居心地のいい部屋にするってのはどうだい？」

「そうだな。じゃ、そこに落ち葉とか石とかはいっぱい取ってきてあるから、それを自由に使って、部屋を居心地いいように準備することにしよう。」

与助が小太郎の提案を受け入れて、皆に促した。

一時間後――

「だいたいいい感じの部屋になったよ！！」

小太郎が自分の部屋から出てきて、既に出て来ていた与助に言った。

「そうかい。俺もいい感じにできたよ。」

「俺の部屋は上の隙間から光も入るから、なかなかいい感じだし。」

「へへ。光が入るってことは、風も入って寒いんじゃないかい？」

小太郎が少し心配そうに聞いた。

「俺もそう思ってた。さつき、そこを落ち葉で光だけ透けて、風が入らないようにしたんだよ。」

与助が嬉しそうに言った。

小太郎と話していると、銀次郎と日出夫も部屋から出てきた。

「2人とも案外時間かけて準備していたんだね。」

与助が2人に話しかけた。

「そうねへ♡ 私の部屋は、ほらっ 広いから」

日出夫が自分の部屋を指差しながら答えた。

「確かにね。。。」

与助はその指差す方向を見ながら相槌をした。

「僕の部屋もなかなかいい感じになったよ。」

銀次郎が嬉しそうに言った。

「へへ。どんな風にしたんだい？」

与助がなんとなく聞いてみた。

「僕の部屋はね。。。与助がたまに遊びに来て、一緒に寝れるように寝床を2つにしたんだよ！」  
銀次郎が嬉しそうに部屋の間取りを地面に書きながら言った。

「ん?????どういうことだい？」

「なんで、俺がお前の部屋で寝るんだい？」

与助は理解できずに聞いた。

「だって、寝る時はこの広いところではダメで、自分の部屋で寝ろって言ったろ？」

「でも、一人で寝るのはつまらないでしょ。だから、与助の寝床も作って一緒に寝れるようにしたってわけさ!!」  
自信満々に銀次郎が言った。

「いやいや、、あんな狭い空間でお前と寝るなんて、、お前の寝相の悪さのせいで、俺が怪我してしまうだろ？」

「ぜったい、、嫌だ!!」

与助が必死に否定した。

「ふーん。。。さつきさ、、与助はさ、、、僕の提案をさ、、1回は受け入れるってさ、、言っていたじゃないか。。。」

「もう、約束を破るのかい？」

銀次郎が恨めしそうに言った。

「あっ」

全身青色の与助が、全身真っ白になった。

「わかった、わかった」

「約束通り、お前が言ったことを1回は受け入れることにするから、今夜は一緒に寝ようじゃないか。」  
与助はしぶしぶ受け入れた。でもまあ、銀次郎が寝たら自分の部屋に戻ればいいやと思った。

「おっ、そうなの。約束守ってくれるんだ！さすが、与助だ。約束を破ったりはしないと書いていたよ！」  
銀次郎が嬉しそうに言った。

「まあ、とりあえず、部屋もできたし、外も寒くなってきたから、入り口を塞いでここでの暮らしを始めようか？」  
与助が皆に提案した。

穴の入り口から外を見ると雪が降っていた。そして、はじめて見る雪を見ながら入り口を朽ち木の樹皮や石、土などで塞いで冷たい風が入ってこないようにした。ようやく穴の入り口を塞ぐことができた頃には夜になっていた。

そこで、各自部屋に戻って寝ることにした。

穴の中は真っ暗になったが、天井に開いた隙間から入ってくる月の明かりがところどころを照らして、完全には暗くはならない。  
「じゃさ、与助は僕の部屋で寝るんでしょ？」  
銀次郎が嬉しそうに聞いた。

「ああ、そうだな。」  
与助がしぶしぶ答えた。

銀次郎が嬉しそうに部屋に案内すると寝床が2ヶ所用意してあって、奥に銀次郎が寝て、手前に与助が寝ることにした。

「いや、今日は疲れたね。とりあえず、入り口は塞いだし、ここは寒く無いし、これで冬を越すことはできそうだね。」  
「そういえばさ、ペラペラ、ペラペラ。。。この前なんてさ、ペラペラ、ペラペラ。。。」

銀次郎がただひたすらにしゃべり続け、それをうんうん言いながら与助が相槌した。

コイツはいつになったら寝るんだろうな。。。

与助は思った。

もしかしたら、コイツが興味ないような嘘の話でもしたら眠くなるかもしれないな。。。

そう思った与助は、

「そういえば、地底蛙って知っているかい？」

と明らかになつまらない嘘の話しを試してみた。

「地底蛙？聞いたことないよ。」

銀次郎があまり関心ないような感じで返事した。

よしよし、関心なさそうだな、

「地底蛙ってのはな、俺たちのような地上にいる蛙と違って、とても危険な蛙でずっと地底で暮らしているらしいんだ。地底にはその蛙たちの世界があるらしくて、たまに地上に出て来て地上の蛙を食べるって噂だ。」

与助がちよっと嘘が多すぎたからバレてしまおうと思った。

しかし、銀次郎が

「ええええ、なんて危険な！！もしかしたら、この穴の中にいたら地底蛙が来るなんてことがあるんじゃないか！！！」  
与助の話しを信じてしまって、話しに食いついた。

あれ？明らかな嘘なんだけど、コイツ信じてしまったのではないか？

いやいや、まさかな。

「でさ、その地底蛙ってのは、目が6個あって、体には日出夫とか小太郎みたいなイボがあるらしいんだ。口も大きいらしい。」  
まあ、こんな嘘を言えば、そろそろ嘘と気づいて呆れて寝るかな？

「ええええええ、なんて姿をしているんだい???目が6個も?大変だ!!寝てる場合じゃないじゃないか!!!」  
銀次郎が飛びあがって、慌て出した。

そして、再び横になった銀次郎は怖くなって与助の手をぎゅっと握った。

それを横目で見た与助は思った。

そうだった、、、コイツはこういう奴だった。。。

これじゃ、逃げれない。。。

妄想アマガエル日記(44) — 1月7日(日)曇り

「まったく、、、なんでついて来るんだよ〜」

与助がずっとついて来る銀次郎を振り返りながら言った。

「だって、、、与助が地底蛙なんで怖い話をするから仕方ないじゃないか。。。」

「いやいや、、、だから、あれは嘘だって言ったろ?あんな生き物がいるわけじゃないじゃないか!変な嘘ついてほんとごめんって。。。  
昨晚も謝ったろ。。。」

与助が申し訳なさそうに言った。そして、昨晚、嘘をついたことを後悔していた。

結局、昨晚は銀次郎に掴まれて自分の部屋に戻ることができなくなってしまったが、銀次郎が寝た後に相変わらずの寝相の悪さで暴れている際に手が離れたので、その際に自分の部屋に戻ったのだった。ただ、朝起きると部屋の入口に銀次郎が待っていて、このザマだ。。。



ほんと、なんであんな嘘をコイツは信じてしまっただろうなく？  
与助は銀次郎の素直さにすこし呆れていた。

「じゃ、どこに行くんだい？」

銀次郎が前を歩く和助に聞いた。

「昨日、自分の部屋で寝ただけけど、もう少し落ち葉があった方がいいと思ったから、それを取りに穴の奥に行くだけさ。。。」  
与助が穴の奥を指差しながら言った。

「そうか！！じゃ、僕も手伝うよ」

「あゝ、なんか悪いけど、じゃお願いしようかな。」

与助がしぶしぶ受け入れた。

コイツのことを否定するんじゃないかと、1回は受け入れるって約束したしな、と考えていた。

「とここでさ。さすがに地底蛙なんてのは、この穴の奥から出てくるなんてないよね。あれは嘘だもんね。」  
銀次郎が与助に何度も確認した。

「そりゃ、そうさ！！そんな地底蛙なんているわけがないさ。だってあれは、俺が考えた完全な嘘なんだからさ！！」  
与助が自信たっぷりな返答をした。

「そうだよね！！ふふ。目が6個もある蛙なんているわけないもんね！」  
銀次郎が心底安心していた。

ようやく、穴の奥のトンネルのところにある窪みに着いた。ここには、多めに取ってきた落ち葉や石、朽ち木の皮などがだいたい  
置いてある。

「さて、じゃ、落ち葉を取って、戻ろうか。」  
与助が言いながら、落ち葉を選んでいた。

すると、穴の奥から何やら音が聞こえてきた。

ペタ、ペタ、ペタ………

「ん？なにか音がしないかい？」

与助が銀次郎に聞いた。

「確かにね。。。小太郎と日出夫はまだ寝ていたから、他にこの穴の中に蛙はいないはずだけど、なにか蛙が歩く音のようなのが穴の奥から聞こえたような、？」

銀次郎が少し怖がりながら言った。

ペタ、ペタ、ペタ………

「やっぱり、何かが近づいて来ているような音がするな。」

与助が落ち葉を一旦地面に置いて耳を澄ました。

ペタ、ペタ、ペタ………

「もしかして、本当に地底蛙が穴の奥から来ているんじゃないのかい??？」  
銀次郎が与助の手を掴んで身を隠した。

すると、穴の奥から、何かの姿が少しずつ見えてきた。

黒いシルエットに目が6個、それが少しずつゆらゆらと近づいてきた。

ペタ、ペタ、ペタ……

それを指差して銀次郎が与助に言った。

「目が6個あるよ!!! あれは、地底蛙だ〜」

妄想アマガエル日記(45) — 1月8日(月) 晴れ

「目が6個あるよ!!! あれは、地底蛙だ〜」  
銀次郎が叫んだ。

そして、与助もそう思った。

オカシイ、なんで俺が考えた嘘の地底蛙が本当にいるんだ??

ペタ、ペタ、ペタ……

その黒い影が少しずつ近づいて来た。

ちようど、穴の上にながれる隙間から日の光が差し込み、その黒い影を照らした。

その姿を見た銀次郎と与助が2人同時に声が出た。

「えっ!!!」

「寒くなってきたな。」

八助が言った。

「確かになく、もうみんな冬を越すために石やら木の根元の穴やらに身を隠してじっとしているから、俺たちもそろそろそうしないとな。さすがに。」

七助が答えた。

「ほんとだよなく。どっか、いいところないかね。。。？」

六助が周りをキョロキョロ探しながら言った。

「そういえばさ。この前、水路の上流側の木の根元にモグラの穴の入り口みたいなのがあったろ？六助はセミの幼虫が出た穴とか言っていたけど。。。」

八助がその場所を指差しながら言った。

「あ、あつた、あつた。でも、あれはセミの幼虫が出た穴だろ？」

六助が答えた。

「あんな大きな穴をセミの幼虫が開けるわけないだろう？」

「あの穴だったら、3人くらいは入れるんじゃない？」

八助が説明した。

「確かに、あれは案外大きな穴だったから、セミじゃなくて、モグラか」  
六助が納得した。

そして、3人でその穴のところに行ってみた。

そこは、大きな木の根が二又に分かれたところで、その間に拳大の穴が開いていた。

「確かに、これなら3人で入れそうだな！」

七助が穴に首を突っ込んで奥をみながら後ろの2人に言った。

「よし、じゃ、とりあえずこの中に入ってみるか！」

八助が提案した。

「でも、この穴の入り口が崩れたら、出れなくなるかもしれないだろ？」

「大丈夫なのか？」

六助が心配そうに言った。

「大丈夫だろ。だって、この穴を見つけたのは夏だったろ？あのころからずっと開いてて壊れてないんだし、木の根が穴を守っているようだからさ。」

八助が六助を安心させるように言った。

「そうだな。じゃ、行ってみるか。」

六助もようやく納得した。

「じゃ、俺が先頭で行くから。」

七助がそう言って先頭を歩いた。次に八助、最後に六助の順に穴に入った。

穴の中は思った通りモグラの穴のようで、トノサマガエル3人にはとても広い空間であった。ただ、ところどころ崩れていて、今ではモグラが使っていないようだった。そのため、ところどころ上からの日の光が差し込み、完全には暗くならずに済んでいた。

「へ〜。こんな穴が結構奥まで続いているんだな。」  
八助が感心するように言った。

「本当だなく。。。ちようど、この上辺りがいつも俺たちがいる水路の脇の石のところくらいじゃないか!!」  
七助が上を指差しながら言った。

「確かになく。。。あの下にこんなトンネルがあったなんて、知らなかったなく」  
六助が感心するように言った。

「おつ、なんか二又に分かれているけど、どうする？どっち行く？」

七助が先を指差しながら言った。

「どうしようかね〜。右のトンネルはなんか地面がジメジメしているけど、左の方はそうなっていないから、左に行こうか。」  
八助が提案した。

「そうだな。まあ、どっちが正解かはわからないけど、左に行ってみるか！」  
七助がそう言って左のトンネルに進んだ。

「おつ、正解だったかもしれないな。なんかまっすぐのトンネルになったし。」  
八助が嬉しそうに言った。

「でも、まあ、そんな奥まで行かなくても、この辺りでもいいのかもしれないな。ここならそんなに寒くないし、冬を越すには十分な広さもあるからなく。」

六助が歩くのがめんどくさくなったので、言った。

「まあ、もう少し見てみようじゃないか！」

「なんか、この奥にもつといいところがあるかもしれないし。」  
八助が六助をなだめた。

「でも、このまま進んで、へびとかいたらどうするんだよ！！」  
六助が心配そうに言った。

「大丈夫だろ。へびはこの寒さで動けないらしいし。」  
七助が振り返りながら六助に言った。

「この穴の中は寒くないから動けるかもしれないじゃないか！」  
六助が口をとがらせて言った。

「わかった、わかった。じゃ、あのトンネルの先の角を曲がって、その先を少し見たら歩くのやめてそこで冬を越すことにしようじゃないか。」

七助が仕方なく、提案した。

「なら、いいよ。」

六助が安心した。

ペタ、ペタ、ペタ……

穴の中には3人が歩く音だけが鳴り響いた。

角を曲がると、その先には少し光が差し込んでいるのが見えた。

ペタ、ペタ、ペタ……

ある程度進むと、日を遮っていた曇りが晴れて、日の光が強さを増し、差し込んでいた光が強くなった。そして、周囲を一気に明るく照らし出した。

ペタ、ペタ、ペタ……

そして、少し先からカエルの声がした。

「えっ!!」

妄想アマガエル日記(46) — 1月14日(日) 晴れ

「えっ!!」

銀次郎と与助が光が当たって暗闇から浮かび上がった3匹のトノサマガエルを見て同時に声がでた。

「地底蛙じゃなくて、ただのカエルだね？」

銀次郎が与助の後ろから出て来て言った。

「そうだな。まあ、地底蛙なんているわけないから、地底蛙なんて疑ってもいなかったけどな。。。」「与助が少し地底蛙と思ったことを誤魔化すように言った。

3匹のトノサマガエルが少しずつ近づいてきたので、与助と銀次郎も近づいた。

「君たちはいったいどこから来たんだい？」  
与助が聞いた。



「俺たちは水路の上流のところから使われなくなったモグラのトンネルを歩いていたら、ここに着いたんだよ！」  
七助が代表して答えた。

「へ〜。あんな遠くまでこのトンネルは続いていたのか。水路の上流って結構遠いもんね〜。」  
銀次郎が思い出すように言った。

「へ〜。君も水路に行ったことがあるのかい？」  
七助の後ろにいた八助が横に出て話しかけてきた。

「そうだね。。。前に、少し冒険したことがあってね。。。」

「その時にあの水路を渡るのに苦労してね。。。何度も溺れそうになりながら、苦労して渡ったらさあ〜、少し上流見たら泳がなくても渡れるところがあってさ〜（笑）心底自分の運の悪さにガツカリしたんだよね〜。」  
銀次郎が頭をかきながら情けなさそうに言った。

それを聞いた七助と八助と六助は顔を見合わせて、思い出していた。

あつ、あの時の運の悪いアマガエルだ！

「へ〜。そうなんだ〜。あそこ以外は流れ速くないからね〜。運が悪かったね。。。」「  
八助がフオローするように言った。

「ん？よく今の話して詳しい場所までわかったね？」  
与助が気になって指摘した。

「んん〜。そう？俺たちはずっとあの水路に住んでいるから、ちよつとの話して場所もわかるのさ。あははは・・・」  
八助が必死に誤魔化した。

その様子を見て与助は、銀次郎が苦勞して泳いでいたことをこの3人が見ていたのだろうと一瞬で感じとった。そして、そのぶざまな姿を見たのにそれを銀次郎のために隠しているのに気づいた。そして思った。彼らはいい奴らだ。

「ところで、君たちはどこに行こうとしていたんだい？」  
与助が質問した。

「あゝ。寒くなってきたから、冬を越す場所を探していたんだよ。」  
六助が後ろから前に出て来て言った。

「そうなんだ〜!!じゃ、ここで一緒に冬を越したらいいんじゃないかい？」  
与助が提案した。

「えっ。いいのかい?そんな広い空間があるようにも見えないけど。」  
七助が周りを見ながら言った。

「この奥にね、俺たちが冬を越すための広い空間があるから、そこで冬を越したらいいさ。ちょうど、窪みは3つ空いてるし、そこを部屋にする朽ち木の樹皮も落ち葉も石もまだいっぱいあるし。」  
与助が朽ち木の樹皮や落ち葉を指差して言った。

「窪みに朽ち木?よくわからないけど、その空間をまずは見せてくれないかい？」  
七助が与助に聞いた。

「おっ、そうだね。こっちだよ。」

与助、銀次郎、七助、八助、六助の順にトンネルを歩いて広い空間まで進んだ。

「おっ！！これはいい空間だね！！」  
七助が空間を見渡して喜んだ。

「本当だね！！これは素晴らしい！！」  
八助も同調した。

「そして、ここに窪みが3つあるでしょ。ここをほらっ他の窪みが部屋みたいになっているでしょ。あんな感じで部屋にして各自部屋で寝るってことさ！」  
与助が他の部屋を指差しながら言った。

「なるほどね。。。これはいい！！」  
六助が心底感心して言った。

「じゃ、とりあえず、君たちを日出夫と小太郎にも紹介しないとイケないから、まずは名を教えてください？」  
与助が3人に聞いた。

「あつ、そうだったね。」

「俺は八助で、こっちが七助、そしてこっちが六助」

「俺たちはトノサマガエルなんだ。君たちはアマガエルだね。じゃ、その日出夫と小太郎ってのもアマガエルなのかい？」

「いや、俺たちはアマガエルだけど、日出夫と小太郎はアマガエルではないんだ。」

「銀次郎、2人を呼んで来てくれよ。」

与助が銀次郎にお願いした。

「うん。わかったよ。」

その間、与助と3人が色々な話しをしていた。すると小太郎が部屋から出てきた。

「あつ、あれがね。ヌマガエルの小太郎なんだ。冒険家なんだ。」  
与助が小太郎を指差して紹介した。

そして、日出夫が部屋から出て3人の後ろに歩いて近づいてきていた。  
しかし、小太郎の紹介をしている与助の方を3人は見ていた。

「あつ、そして、君たちの後ろにいるのがね。日出夫なんだ。」  
与助が指差して言った。

3人のトノサマガエルがゆっくり振り返るとそこには壁があるだけだった。

「ん？どこにいるんだい？」  
六助が不思議そうに言った。

「いやいや、君たち見てるじゃないか。。。」  
「あつ、じゃ上を見上げてごらんよ。」

そう言われて、3人がゆっくり見上げると、天井から空いた小さな穴から一筋の光が大きな大きなカエルの顔だけを照らしだし、大きな大きなカエルが自分たちを見下げているのが見えた。  
壁と思っていたのが、大きなカエルの腹だったことにその時気づいた。

それを見て、3人が目を丸くして、心の中で叫んだ。

カッチョイーーーーー!!!

妄想アマガエル日記(47) — 1月18日(木) 雨

カッチョイイー！ー！！！！

八助と七助と六助が大きなカエルを下から見上げて心の中で思った。

オイオイ！！なんなんだこのカッコよさは、この大きさ！！顎のライン！！黒と赤のまだらな模様！！無駄のないイボの配置！！

どれをとつてもカッコよすぎだろ！！！！

八助が見上げながら感嘆していた。

そして、七助もまた、

オイオイ！！なんなんだよ！このライティングはくく。わざとか！！かつこよく見えるように日の光までも加勢するのか！！？  
と、思っていた。

さらに、六助もまた唾を飲み込んで、

オイオイ！！こんなカッコイイ蛙見たことないぞ！！水路から出て来てよかった！！！！  
と、思っていた。

3人が惚れ惚れしながら、見上げたカエルがこちらに視線を落とした。

「お！こっち見たぞ！！！！」

八助が小さな声で言った。

「うわー、すげーなあー。」  
六助もその声を聞いてつい声に出た。

「本当だなく。。。なんか言ってくれるのかね。。。？たぶん、カッコイイ声して、カッコイイこというんだろうなく！！」  
七助が2人に耳打ちして、2人もまたそれに頷いた。

「ゴクッ」

3人同時に唾を飲みこんだ。

「あつら〜〜♡♡ カワイイ！！トノサマガエルね〜♡♡」

日出夫が嬉しそうに甲高い声を出した。

「えっ！！！」

3人が目を大きく見開いて口をあんどりと開けて立ち尽くした。

それを見て、与助が声をかけた

「まあまあ、こちらがね、ヒキガエルの日出夫で、こちらがね、一緒にここで暮らすことになったトノサマガエルの八助と六助と七助なんだ！！」

すると日出夫が、

「そうなの〜♡ こんなカワイイ蛙が3人も増えるなんてね〜♡」

「私はね。日出夫。みんなひでおちゃん→って呼ぶから、そう呼んでね♡」  
自己紹介をした。

「ひでおちゃん」

3人が唾を飲みながら言った。

「いやいや、違うわよ。最後は上げるのよ！ひでおちゃん→って」  
日出夫が上から見下げて説明した。

「ひでおちゃん→」  
3人が立ちすくみながら、言われる通りに言った。

「そうそう。それでいいのよー！」  
日出夫が嬉しそうに3人を見下げた。

「とりあえず、自己紹介は済んだことだし、八助たちの部屋を作ろうか！」  
与助が提案した。

「あつ、つ、そうだね。。。なんか悪いね。。。」  
立ちすくんでいた八助がはっと我に返って与助の方を振り返って言った。

八助と与助がしゃべる様子をニコニコしながら日出夫が見ていた。

「じゃ、とりあえず部屋を決めようか。ちょうど窪みが3個余っているから好きなどころを選んでいいよ！」  
与助が3人に窪みを指差しながら言った。

「じゃ、俺はここの角がいいな！」  
七助が一番を選んで決めた。

「なら、俺はここがいいな！ちなみにこの隣は誰の部屋なんだい？」  
八助が隣の部屋を指差しながら言った。

「あつ、そこは俺の部屋なんだ。」  
与助が答えた。

「そっかあ。よろしくね。」  
八助が嬉しそうに言った。

「じゃ、余ったところはここしかないから俺はここにするよ。」  
六助が窪みの中に入って言った。

「隣は僕の部屋だからよろしくね。」  
銀次郎が嬉しそうに近づいてきた。

「君の部屋だったんだ。よろしくね。」  
六助が嬉しそうに言った。

そして、皆で3人の部屋を作ることにした。

一時間後  
-----

「ようやく3人の部屋が出来たな。これまで4部屋も作ったから3部屋作るのは案外簡単に早くできたね。」  
与助が皆に言った。

「ほんと、これで安心して冬を越せるよ!!」  
八助が嬉しそうに部屋を見ながら言った。



「ところでさ。さっきからずっと気になっていたんだけど、ヌマガエルの、小太郎君だけ？」  
「君、どっかで会ったことないかい？」  
七助が小太郎を指差して言った。

「えっつ、会ったことなんてないけど。。。」  
小太郎が目を泳がせて答えた。

小太郎のその様子を見て、「名探偵与助」が何かを察した。  
ん？？

そして、その助手の銀次郎もまた何を察した。  
ん？？

妄想アマガエル日記（48）ヌマガエル小太郎編— 1月27日（土） 晴れ

遡ること1時間と少し前……………

「小太郎。小太郎。ちょっと出て来てくれよ」

銀次郎が小太郎の部屋の前で声をかけた。

「いったい、どうしたんだよ。。わかった、わかったよ。。」

小太郎がもう少し寝たいのに、と思いつつ部屋から出た。

部屋から出ると、少し先に与助と3人のトノサマガエルがなんかしゃべっているのが見えた。

ん？なんなんだ？あのトノサマガエルは。。。  
そう思いながら銀次郎に言われるまま与助の方に近づいていった。

すると、そこにはどっかで見たことがあるような3人のトノサマガエルがいた。

与助が自分のことを紹介してくれたが、そのカエルたちは特に俺のことに気づいていないようだから、たぶん俺の勘違いだな。と思った。

この3人のトノサマガエルも一緒にここに住むことになって、部屋を作ることになった。その時、この3人の声や動きを見ながら気づいてしまっていた。

こいつらは、あのトノサマガエルたちだ！

そう、あれは夏頃の話だ。。。。

冒険の一環で水路に行った時のことだった。水路に行く手前に大きな石が落ちて来そうな崖があった。ただ、冒険家の俺からしたら、そんなもの何も怖くないと思って登っていたが、足を滑らせてしまって、その振動で大きな石が落ちてきた。転がる石から一生懸命逃げてへ口へ口になった時に、あのトノサマガエルたちがその石を抑えてくれて、無事に逃げる事ができた。あの時は口からよだれを流しまくって、ひどいあり様だったと思う。。。。

また、それから少し後に、暗い洞窟を進んでいた。冒険家の俺からしたら洞窟なんて、何も怖くないと思っていたが、何も見えない暗黒で途中で怖くなってしまった。天井から小さな光が漏れているところがあつたので、どうにかそこに口を差し入れて助けを呼んだ。その時に助けてくれたのもあのトノサマガエルたちだった。あの時は怖くて泣いていたので、無様な姿であつたと思う。。。。

そして、その少し後に、水路の近くで大きな岩を登っていた。冒険家の俺からしたら高いところなんて、何も怖くないと思っ

ていた。実際、登っている時は何も怖くなかったのであった。しかし、いざ頂上まで登ってその高さを見ると降りれなくなってしまう。大きな岩の頂上からひたすら助けを呼んだ。でも、周囲には誰もいなかった。日も照り付け、2日目の夕方、もう干からびて死んでしまいそうだと思った時、ちょうど岩の下を3人のカエルが歩くのが見えた。そこで最後の力を振り絞って、助けを呼んだ。その時に助けてくれたのもあのトノサマガエルたちだった。あの時は体の水が抜けて干からびて死にそうだったので、見るも無残な姿であつたと思う。

アイツらだ！！！何度も助けてくれたトノサマガエルたちだっ！！！！

そして、俺のもっとも情けない姿を何度も見ているあのカエルたちだ！！！！

小太郎は悩んでいた。

あの時の御礼は言いたい。。。でも、あのことを言うのと与助や銀次郎にあの時の情けないことを知られてしまう。。。どうしたらいいものか。

そんなことを色々と考えている時に、トノサマガエルの1人が気づいてしまった。

どうしたらいいんだろうか。。。？？？

ん。。。？？？

「えっっ、会ったことなんてないけど。。。」

と、つい言ってしまった。

ヤバっ、

「見た目は蛙、頭脳も蛙、で有名な「名探偵与助」と「助手の銀次郎」がなんか察しやがったな。さて、どう切り抜けるか。

俺の名は与助。全身青色をしたアマガエルだ。

これまで、多くの難事件を解決に導いてきた。あの有名な「スダジイの洞（うろ）密室事件」とか、「枝に串刺しアマガエル事件」なども私の推理によって解決された事件だ。詳しく話すには時間が足りないから、割愛させて頂く。

そのため、周りからは「名探偵」などと呼ばれることがあるような、ないようなである。

そして、俺には助手がいる。

まあ、助手といっても特に何もしないけど、ただいつも一緒にいるというだけだが、名を銀次郎と言う。

そして、また俺の前で難事件が発生した。

それは、あるトノサマガエルが言った一言から始まった。その一言で、とあるヌマガエルが目を泳がせて、「知らない」と言ったのだ。

その瞬間、俺の青色の脳細胞が一気に動きだし、ある一つの答えを導き出した。

これは、何かある！

そして、その俺の直観を見ていた助手の銀次郎もまた異変に気付いたようだった。

さて、まずはこの容疑者をどうやってその犯行を実証するべきか、、、

まずは、質問を試みることにした。

「おい、小太郎、どうしたんだい？なんでそんな目が泳いでいるんだい？」

すると、その容疑者はこう言った。

「ん？目なんて泳いでないけど。。。？」

ふん、想定内だ！

そういう回答が来ることなんて、簡単にわかっていたさ。なんといっても俺は名探偵なのだから。。。

「そうかい？なんか、さつきからトノサマガエルたちのことをチラチラ見ているし、なんか考えているように見えたから、本当は彼らのことを知っているんじゃないかと思ったんだけど、違うのかい？」

「え？　そう？知らないよ。知らないから、これから一緒に住む人たちがどんな人か気になるから見ていただけさ。」

ふん、そう来たか！

まあ、それも想定内の回答だ。じゃ、次は助手に少し調べさせておこう。

小声で銀次郎にいくつかのお願いをした。

すると、銀次郎が八助と七助と六助に近づいてそれぞれに耳元でいろいろと説明して話を聞いた。

それを横目で見ながら、与助が小太郎に聞いた。

「いいのかい？」

「俺の洞察力と推理力、そして銀次郎の調査力（ただの話し好き）を侮っていませんか？」

「下手人さんよ。。。」

それを聞いた小太郎が少しうろたえ始めてきた。

そして、助手の銀次郎が仕入れて来た情報を与助の耳元で説明して、それをうんうん頷きながら聞いた。

すべての情報を総合して「名探偵 与助」は一つの答えを導きだした。

「なるほどな。」

「お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。この難事件、この名探偵がすべて解決しました。」

「そう、小太郎はウソをついている!!!」

ピシッと小太郎に指差して言った。

「えっ!!」

「えっ!!」

「えっ!!」

「えっ!!」

「えっ!!」

一同が驚愕した。

「なんだってそんなことを言うんだい？」

「証拠も何もないだろ？」

小太郎が必死になって言った。

「いや、君はウソをついている。君は彼らのことを知っている。」

遠くを見ながら与助が言った。その脇には銀次郎が頷きながら聞いている。

「そんなことないさ。今日はじめて会ったんだ。」

小太郎が答えた。

「いや、銀次郎が彼らに聞いたところ、君は水路の崖で岩が落ちて来た時に助けられたり、洞窟から助けられたりしたはず

だ！！！」

「それを俺たちに気づかれたくないから、ウソをついたんだ！！！」

「証拠がないじゃないか！！！」

小太郎も食い下がらない。

「そうか。まだ白を切るんだな？」

「じゃ、これを聞いてもウソだというんだな。」

与助が銀次郎に日記を出させた。

「銀次郎、言ってみな。」

「うん、わかったよ。」

「以前、君から聞いた話しの中で、水路で石が落ちて来そうな崖を登った話しも、真つ暗な洞窟を冒険した話しも聞いているんだよ！！！！この日記にちゃんとそれが記されている！！（26話でも触れている）」

「そつ、それは。。。。」

小太郎が答えに詰まってしまった。

それを見て、与助が小太郎の肩を叩きながら言った。

「もう、楽になりなよ。小太郎さんよ。。。。」

「んゝゝゝ、ゝゝ、ゝゝ」

「はい、ゝゝ、ウソをついていました。彼らのことを知っています。」

小太郎ががくつと膝をついて言った。

「よし、それでいいんだ！」  
与助がニコツと微笑んで言った。

・  
・  
・  
「つて、君たちはいったい何してんだい？その茶番はなんなんだい？」  
七助が少し呆れて言った。

「まあ、ただの遊びさ！」  
与助が少し恥ずかしそうに言った。

「ありがとな与助。。。これですつきりしたよ。。。」  
小太郎も嬉しそうに言った。

「まったく、世話がやけるよ。。。」  
与助が小太郎の肩を叩いて言った。

「これで、一緒に住みやすくなったよ。」  
小太郎が言った。

そして、小太郎が七助と八助と六助に知らないフリをしたことを謝って、以前助けて貰った御礼を言った。そして、皆でその時の話して盛り上がった。

話しが一段落した頃に、小太郎がポツリポツリと話し始めた。



小太郎がポツリ、ポツリと話し始めた。

「大きな岩の上に登った時は雨が降っていたんだ。だから、調子よく濡れた岩の窪みを利用して登っていたんだ。頂上に登って周りを見渡してみたらすごく高くて、足がすくんでしまった。頂上は自分一人が座れるくらいしかなくて、そこでしばらく悩んでいた。まあ、誰か通って、助けてくれるかもしれないとその時は待っていたんだ。でも、誰も通らなくて、しばらくしたら日が暮れて夜になってしまった。その日はそこで夜を明かした。次の日は、昨日の雨が嘘のように朝からカンカン照りでね。。。日が皮膚を焼くように照り付けるんだ。影になるところなんてないし、下には降りれないし、誰も通らないし。。。」

「大変だったんだな」  
与助が相槌をした。

「そして、日が照り付けて来て、水分がどんどん抜けてしまっただけ。。。もう座ることもできなくて、腹を上にして仰向けで空を見ていたんだ。。。もうダメだと思ってな。。。」  
「もしたら、次第に意識がなくなってきた、走馬灯のようにこれまでのことを思い出したんだ。銀次郎に頭を踏まれたことかな。。。」

銀次郎が頭をボリボリかいて申し訳なさそうにしている。

「よくそれで生きていたね。。。」  
八助が思わず声に出した。

「ほんとだよ。。。もうダメだ、と、と思った瞬間。あの大きな建物が日を遮ってくれたんだよ。。。たぶんあと数分でも日を浴びて

いたら間違はなく死んでいたと思うんだ。そして、そのまま仰向けで日陰の中、空を見上げながら、決めたんだ。」

「もし、ここから生きて帰れたら、あの建物に御礼も兼ねて登ろう。」と

「そう考えていた時にちょうど、君たちが下を通りかかってくれて、精一杯声を出して助けてもらったんだ。」

「へえ〜、そんなことがあったのか〜。」

七助が声をかけた。

「ほんと、あの時に君たちがあそこを通らなかつたら間違はなく死んでいた。あの時は本当にありがとうな。」

小太郎が深々と感謝した。

「そして、君たちのお陰で生きて帰れたから、あの時の約束を果たすためにあの建物を登ろうと何度もチャレンジしたんだが、まったく登れなくてな。。。」

「でも、アマガエルがああ建物の壁の高いところに張り付いているのが下から何度か見えて、アマガエルに登り方を習おうと思っただんだが、アマガエルの知り合いなんていないから困っていたんだ。」

「そしたら、お前のことを思い出してな。」

「そういつて、銀次郎のことを指差した。」

「えっ、僕？」

銀次郎が戸惑った。

「そうさ。お前は知らないだろうけど、あの朽ち木にいたのを何度か通った時に見えて、住んでいるところを知っていたんだ。だから、あの日、お願いしに行ったらちようど留守にしていたら、外で待っていたんだ。」

「あっ、あの時はそういうことだったんだ！」

銀次郎が納得して答えた。

「確かに、待っていたな。。。」

与助も思い出しながら答えた。

「そして、お願いしてみたら、二人ともいい奴で協力してくれるって言うからとても嬉しくてね。。。あと、日出夫も手伝ってくれるって言ってくれたしな。。。」

小太郎が恥ずかしそうに言った。

「そうか、、あの建物に登りたい理由にそんな想いがあつたなんて、知らなかったよ。。。」

銀次郎が驚いて言った。

「まあ、岩の上で干からびて死にそうになって、建物に登ることを決めたなんて情けない話しをお前らに知られたくはないからな。。。」

小太郎が恥ずかしそうに言った。

「小太郎も色々なことがあつたんだな。。。春になったらまた練習してさく今度こそあの建物に登ろうよ。」  
銀次郎が小太郎の肩を叩いた。

「そうだな。とりあえず、塀は登れたから、暖かくなったらもう少し練習したら、あの建物も登れるさ。」  
与助も小太郎の肩を叩いた。

「そうだな。まあ、いろいろ迷惑をかけるけど、よろしく頼むよ。。。」

それから、話しがとまらなくなった小太郎が、練習の時の話しをポツリポツリとして、これまでの他の危険な目にあつた時の話しもポツリポツリと続けた。

「そしてな。あの時も本当に危なくて、与助も行ったみたらいいよ。」  
小太郎がそう言って、与助を見ると与助は地面に這いつくばって寝ていた。  
その横で銀次郎が口を開けて寝ていて、その横で日出夫が丸まって寝て、その奥に七助と八助と六助が重なるように寝ていた。

・  
・  
・  
「せっかく人がいい話しをしているのに、この蛙どもは〜」  
小太郎が小さな声でそう言って、皆を見てほほ笑んだ。

妄想アマガエル日記(51) — 2月2日(金) 晴れ

「まったく、、、こいつらは、、、気持ちよさそうに寝やがって。」

「いい話しを子守歌とでも思っているんだろうか。。。」

小太郎がブツブツいいながら、見まわしていた。

ただ、このままここで寝ると夜になると急激に寒くなるから風邪引いてしまうな、、、どうしようかな。。。と考えていた。  
すると、日出夫がもぞもぞ動きだして、むくつと起き上がった。

「おつ、日出夫起きたのかい！」

小太郎が少し嬉しそうに言った。

「あら、小太郎ちゃん、、、」

「私、どうしたのかしら、、何か催眠術のようなのかかけられて眠らせたのよね。。。」  
日出夫が思い出そうと右上を見上げながらボソボソと言った。

「あつ、、、そうそう、小太郎ちゃんのオチがないダラダラとした話しを聞いていたら、まず与助ちゃんが気を失って倒れてね。  
次に、銀次郎ちゃんが倒れて、、トノサマガエルちゃんが次々に倒れてね。」  
「私は必死で頑張つて聞いていたんだけど、いつのまにか気を失ったんだったわ♡」  
思い出して嬉しそうに日出夫が言った。

「あゝ、、、そうかい。。。悪かったな。。。」

小太郎が口をとがらせて言うのと、日出夫がはっと気づいて申し訳なさそうに頭をかいた。

「ところで、こいつらをこのままここに置いておくわけにはいかないからさ。。。部屋に運ぶの手伝ってくれないかい？」

「そうね♡」

「じゃ、どんどん運んでいきましょ♡」

まずは与助を部屋の入口まで日出夫が運び、そこから小太郎が部屋の中の寝床に運んだ。日出夫は体が大きすぎて他の蛙の部屋の中には入れない。

次に、トノサマガエルたちを同じように日出夫が入り口まで運んで、各部屋の中に小太郎が運んだ。

最後に、銀次郎を同じように部屋の前まで日出夫が運んで、小太郎が寝床に置いた。

「はあゝ、、、疲れた。。。銀次郎の奴め、寝言言いながら顎を蹴りやがって。。。」  
顎を抑えながら銀次郎の部屋から出て、広い空間の中心に戻ってきた。

「まあ、とりあえず、これで、みんな冬を越す準備もできたし、みんな寝たし、冬を越せそうね♡」  
日出夫が手をパンパン叩いて言った。

「あ、あ、あのさ。。。」

小太郎がもそもぞしながら、言いかけた。

「どうしたの？小太郎ちゃん♡」

「あの、いろいろとよくして貰って、ウソをついたまま冬を越すのはなんんだかモヤモヤするんで言っておきたいことがあるんだ。。。」

「あつ、腹から毒が出るって話しでしょ♡」

「えっ、知っていたの？」

「そりゃ、知っているわよ♡ あなたたちより何年長く生きているというのよ♡（笑）」

「そうだったんだ。。。最初っから？」

「いや、与助ちゃんに聞いた時は信じていたのよ！！」

「でもね、寝る前に少し考えていたら、確かに私たち蛙は皮膚にどの蛙も毒を持つんだけど、この辺りにいる蛙で一番強い毒を持つのは私たちヒキガエルなのよね。そして、毒が多く出るのがこの耳の後ろにある耳腺っていう膨らみなのよ。」  
そう言いながら耳の後ろの膨らみ部分を指差した。

「確かに、皮膚から強い毒が出る蛙は海外にはいるのは聞いたことがあるのだけど、この辺りにはいないと聞いていたし、耳腺のような毒が出る部分が小太郎ちゃんの腹にはないでしょ。だから、あれはウソだって気づいたのよ。」

日出夫が申し訳なさそうに言った。

「そうだったんだ。。。気づいていたんだね。」

「ウソついて、なんか申し訳なかったね。」

小太郎も申し訳なさそうに呟いた。

「全然いいわよ♡」

「気にしていないから♡」

「腹を触ろうとした私が悪いのだからね」

「じゃ、ウソついたのでのを許してもらおう代わりもあるからさ。寝る前に少しだけ腹を触ってもいいよ。」

小太郎が腹を見せながら言った。

「えっ♡ほんと♡」

そう言って嬉しそうに小太郎を持ちあげて腹をほっぺにスリスリした。

「ほんと、、、気持ちのいい美肌だわね♡」

「あゝそうかい。」

なされるがまま、遠い目をして小太郎が言った。

「はゝ、気持ちよかった。これでゆっくり寝れそうよ♡」

小太郎を地面に降ろして日出夫が言った。

「そりゃ、よかったよ。。。」

「じゃ、俺たちも寝ようか。。。」

「おやすみな、ひでおちゃん」

「あらっ、はじめてちゃんと呼んでくれたわね♡」

「おやすみなさい。また、暖かくなったら腹触らせてね。」

「それは、、、どうかな。」

2人も部屋に入って寝床に着いた。

ちようど日が暮れ、穴の中も暗くなった。

地面の上から次第に冷たくなり、穴の中もじわじわと寒くなり、土の中の水がパキパキと凍りはじめ、地面の上には霜が出始めた。

妄想アマガエル日記(52) — 3月27日(水) 晴れ

ここ数日は冷たい雨が降っていた。しかし、今日はここ数日がウソのように雲一つない晴天だ。

地面を春の日が照らし、サクラが蕾を膨らまし、せっかちな蕾がポツポツと花を開いている。モンシロチョウがどこからともなく舞飛び、セイヨウタンポポも黄色い花を目いっぱい広げている。

春の風景が顔を出し始めた。

そして、そんな春の匂いを嗅ぎつけて、地面の下では小さな虫たちがゴソゴソと動き始め、まさに、蠢き始めた。

カエル達が寝ている穴の中にも、小さな虫たちの忙しない足跡や春の匂いが漂い始めた。





「おっ！みんなもよく寝たみたいだな？」  
与助が2人に嬉しそうに声をかけた。

「ほんとによく寝たよ。初めての冬眠だったけど、あつという間だったね。ただ寝ていただけだったし。。。」  
小太郎が自信たつぷりに答えた。

「ほんとだね、よく寝た。寝違えたのか、少し肩が痛いけどね。」  
六助が少し肩を回しながら答えた。

「じゃ、あとは七助と銀次郎と日出夫だけか！！」  
与助が周囲を見渡しながら言うと、ちょうど七助が部屋から出て来た。

「おっ！！そろそろ暖かくなってきたし、少し腹も減ってきたから起きようと思っていたら君たちの声が聞こえてきたから出てみたら、みんなもう起きていたんだね！！」  
「いつから起きていたんだい？」

七助がみんなに聞いた。

「いや、僕たちもちょうど今、起きて部屋から出てきたばかりなんだよ。」  
六助が久しぶりに会えて嬉しそう答えた。

「あつ、そうなんだ！やつぱりみんな暖かくなってきたから起きるタイミングは同じなんだな！！」  
七助も嬉しそうに答えた。

「じゃ、あとは日出夫と銀次郎だね。」  
与助がもう一度確認するように言うと、ちょうど日出夫の部屋の扉が少し動いた。

「ん?? 日出夫も起きたのかな？」  
与助が日出夫の部屋に近づいて行った。

「おゝい、日出夫ゝ。起きているかゝい？」

すると、

「あつ、、起きているわよ♡」

「でも、今は肌のお手入れ中だから、部屋にはいつちやダメよゝゝ♡」

「越冬直後の肌の手入れは、ほんと大事だからゝ♡」

日出夫が部屋の奥から叫んできた。

「あつ、そうなんだねゝ」

与助が答えた。

そして、その場にいたカエルたちは想像した。

日出夫の肌の手入れって、、いったい何をしているのだろう???

そもそも、なんでそんなに肌の手入れをする必要があるのだろう???

ダメと言われると、、見てみたい。

「ゴクッ」

その場にいたカエル達が見てみたい好奇心と葛藤していた。

それに気づいた与助が声をかけた。

「あつ、あつ、そうだ。」

「銀次郎も起こさないといけないね!! そうだ、そうだ。」

そして、与助が皆の背中を押して、銀次郎の部屋に押し去った。

「お〜い!! 銀次郎〜。春が来たぞ〜」

「まだ寝ているのか〜?」

与助が銀次郎の部屋の入口から中に声をかけた。

しーしーん

「ん? 返事がないな?? まだ寝ているのかね?」

小太郎が不思議そうにつぶやいた。

「ほんとだよな。アイツのことだから、一番に起きていると思ったんだけど。」

与助が不思議そうに小太郎に相槌した。

「ん?? その扉、おかしくないかい?」

七助が扉を指差して言った。

「確かに、、、扉がボロボロになっている。」

六助が扉を確認しながら言った。

「ほんとだよ。まあ、アイツは寝相が悪いから、扉くらいこんな感じになっても不思議じゃないんだ。」

与助が七助と六助を安心させるように説明した。

「にしても、何の音もしないのは、おかしいな?」

小太郎が与助に言った。

「たしかにな、ちよつと失礼して中に入って様子を見て来よう。」  
与助がそう言つて部屋の中に入った。

「なんじゃこりゃー!!!」

部屋の中から、与助の叫び声が聞こえてきた。

「ん??どうしたんだい?」

小太郎がそう言つて、皆が同時に部屋にはいった。

すると、そこには、銀次郎の姿はなく、壁がボコボコに凹みだらけになり、寢床はボロボロになっていた。

「オイオイ!!これは、へびか何かに襲われたんじゃないのか???」

八助が怯えながら叫んだ。

「ほんとだ、これは、カエルの仕業ではないぞ!!」

七助も怯えながら叫んだ。

「銀次郎は跡形もなく食べられてしまったんじゃないか!!」

六助も怯えながら叫んだ。

「どうかなく???君たちは銀次郎の寝相の悪さを知らないから、これを見たらそう思うかもしれないけどね。。。」

「アイツならやりかねないのだよ。。。」

与助が腕を組みながら冷静にそう言った。

「ほんと、与助ちゃんの言う通りよ♡」

「銀次郎ちゃんだったらこんなの不思議じゃないのよ♡」

日出夫が顔だけ部屋の中にぬっと入ってきて、ツルツルの肌を揺らしながらそう言った。

「あつ、日出夫も出てきたんだね。肌ツヤツヤだね！」  
与助が少し驚いて、明るく声をかけた。

肌のことを褒められて、嬉しそうに日出夫が顔をひっこめた。

「でもね、じゃ、銀次郎はいつたどこに行つたというんだい？」  
六助が不思議そうにつぶやいた。

「そうだな。」

腕を組みながら部屋を出て周囲を見渡しながら与助が指差した。

「あつ、ほら、あそこの壁が凹んでいる！！」

「ほんとだ！！寝る前にはあんな凹みはなかったね。」

小太郎が自信たつぷりに言った。

みんなでその壁の凹みまで行つてみた。

「確かに、こんな凹みはなかったな。」

七助が凹みを触りながら言った。

その凹みのところで周囲を見渡すと、

「あつ、あそこにも同じような凹みがあるっ！」

六助が見つつけて、指差した。

そして、その凹みに皆で近づいて行くと、八助が、

「あつ、あの穴の奥にも凹みがある！！」

そう言つて、指差した。

「オイオイ！！もしかしたら、銀次郎の奴、寝ている間にあの穴の奥に転がつていったんじゃないか？」  
与助が腕を組みながら言った。

それを聞いた日出夫と小太郎は、与助と同じように腕を組みながら与助の後ろから穴の奥を見つめて同時に呟いた。  
「あり得る！！！」

妄想アマガエル日記（53） — 4月1日（月） 晴れ

「あり得る！！！」

日出夫と小太郎がつぶやいた。

「じゃ、アイツの跡を辿つて、探しに行くか！」

与助が後ろを振り返りもせず、穴の方に進んだ。

八助、七助、六助、日出夫、小太郎の順番で、与助のあとをついていった。

「あつ、あの壁のところ凹んでる！！！」

先頭を歩いていた与助が指差して近づいた。

皆でその凹みを見ながら、その周囲をぐるぐると見渡した。

その場所は部屋を作るための朽ち木の樹皮や落ち葉、石が置いてあった場所の近くであった。

「なんか、ここの倉庫さ。最後に来た時によりも物が少なくなっていないかい？」  
八助が首をかしげて言った。

「確かにね、君たちの部屋を作った時に最後に少しここを整理したけど、もう少し落ち葉とか朽ち木とかあったような気がするな。」

与助が近づいて行って、八助の言うことに頷きながら答えた。

「もしかしたら、銀次郎は寝相が悪くて転がって行ったんじゃないかって、何か考えがあって、樹皮とか落ち葉を何かに使って、何かしているんじゃないかい？」

「だから、この壁の凹みも何か意味があるんじゃないかい？」  
六助がひよいと七助の後ろから首を出して与助に言った。

「まあ、そんなこともあるかもしれないけどね。」

「銀次郎って奴はね、君たちが想像する以上の寝相の悪さだし、なにより寂しがり屋なんだ。」

「だから、一人で早く起きて、何かをするなんて、ちよつと考えられないんだよね。」  
与助が腕を組みながら、トノサマガエルたちに言った。

「でもなく。ほらっ、この前なんて、アイツは、一人でナメクジとか石とか隠してさ、俺たちには内緒の秘密の部屋にいたことがあったろ？」

「また、何か変なことしてんじゃないか？」

小太郎が与助に近づきながら言った。

「そういえば、そんなこともあったか。」

「じゃ、この壁の凹みも、落ち葉とかがないのも、アイツがまたなんか俺たちに内緒でなんかしてるんかね？」



与助が、小太郎に言われて、納得して、小太郎に聞いた。

「どうだろうな、？」

「アイツのことは未だによくわからないからな」

小太郎が腕を組みながら答えた。

「あつ、でもあそこにまた壁が凹んでるところがある！！」

六助が指差した。

皆でぞろぞろと歩きながら近づいた。そこは、穴の上に上がれる隙間の入り口だった。

「もしかして、この穴から外に出たんじゃないかい？」

七助が穴の上の先を指差して言った。

「まあ、確かに、皆の部屋がある穴の入り口は塞いだままだから、あそこからは外に出ていないと思うけど、ここは塞いでいないから出たかどうか、わからないな。」

与助が腕を組んで考えながら言った。

「でも、ほらつ、トンネルのあの先に落ち葉と朽ち木が落ちてるし、壁に凹みがあるよ！！外に出たんじゃなくて、あのトンネルの先に行ったんじゃないかい？」

六助が指差して言った。

また、皆でぞろぞろとその凹みと落ちていた落ち葉や朽ち木のところに行った。

「あつ、トンネルの奥のあの壁にもまた凹みがあるぞ！！」

「いったい、どういうことなんだ？この凹みは何なんだ？」

小太郎が少し困った感じでつぶやいた。

トンネルの奥の凹みまで進むと、そこはY字に分かれていた。

「あつ、俺たちはあっちから来たんだよ!!!」

六助が右側のトンネルを指差して言った。

そして、左側のトンネルは地面が少し湿っていた。

「どっちに行ったんだろうなく??」

与助が困ってどちらも少し進んで凹みを探した。

「あつ、凹みはないけど、こっちのトンネルの地面はね、なんか最近通ったような跡があるわよ♡」  
日出夫が言った。

「さすが日出夫だなく。俺たちの視点の高さじゃ、それはわからないよ。。。」  
与助が感心して言った。

「ちよつと、失礼するよ。」

そう言つて、小太郎が日出夫の頭の上に背中から登った。

「ほんとだ!!!何かが通ったような跡が結構遠くまでついてるよ!!!」  
小太郎が少し興奮して言った。

そして、

「久しぶりに、このまま頭に乗らせてもらつていいかい?」

小太郎が日出夫に聞いた。

「もちろんよ♡」

日出夫も嬉しそうに答えた。

「じゃ、こっちの湿った地面の方に行ってみよう!!」

与助が皆に提案して、先頭を進んだ。

湿っていた地面のトンネルは真つすぐで、時折、天井から光が漏れて完全には暗くならず、少し登り坂になっていた。

「さすがに、いくら寝相が悪いって言ってもこんなジメジメした地面の、しかも登り坂を登れるわけないか。。。」  
与助が少し恥ずかしそうに独り言を言った。

「あつ、あの坂の上の壁に凹みがあるぞ!!」

小太郎が日出夫の頭の上から見て、指差した。

皆でその凹みに近づくと、その先にトンネルの出口があるようで、強い日差しが差し込んでいた。

「いったい、ここはどこに出るんだ??」

与助がそう言っつて、その光の先に進んだ。

それに続いて皆も、逆光で黒い影しか見えない与助の後に続いて、真つ暗な穴の中から、明るい光に包まれた外に出た。

そして、皆が口を揃えて驚いた。

「えっ!!!!!!!!」

「えっ!!!!!!!!」

「えっ！！！！！！！」

「えっ！！！！！！！」

「えっ！！！！！！！」 「えっ！！！！！！！」

妄想アマガエル日記(54) — 4月20日(土) 雨／ツチガエル花子編／

遡ること、数日前 @水路近くの花壇—————

「いや————、今年も寒かったあ〜」

「でも、まあ、他のカエルほどは寝ずに、水の中で過ごしたり、落ち葉の下で過ごしたりと、今年も寒い冬をそれなりにエンジョイできたわ→♡ 今年で冬は2回目だけど、去年はまだオタマジャクシだったからね！！」  
いつもの水路近くの花壇から外を見ながら独り言を言った。

花壇の上から水路の方を見下ろしながら。

ようやく暖かくなってきてから、アマガエルやヌマガエルなんかが出て来たわね〜。

あつ、あそこにいるアマガエルは腹が大きいから、もう少しして田に水が入ったらすぐに産卵するのかしらね。？

あつ、あのヌマガエルは体にまだ土が付いているから、穴から出てきたばっかりかしらね、？

あつ、あのトノサマガエルは体が大きいから、3年目くらいかしらね。？

行き交うカエルたちを見ながら、いろいろと想像していた。

そういえば、あのお方は、今はどこにいるのかしら？？？

以前見た、まだ熱いレンガの大地を堂々と、力強く進んでいた1匹のアマガエルのことを考えていた。

あのお方も、そろそろ出て来ているのかしら、??  
そう思うと、じつとしていられなくなってしまった。

「なまった体をほぐすために、少し散歩でもしようかしらね→♡」  
花壇から降りて、水路の方に行こうとした。

すると、目の前に大きな石があつて、それと地面との隙間の窪みに何やら「きな粉餅」みたいなのが、挟まっているのが見えた。

「あれ? あんなところに何で「きな粉餅」が挟まっているのかしら???」  
首を傾げながら、少し距離を置いて眺めていた。

ただ、その「きな粉餅」を眺めていると、時折ゆっくりと上下に動いているように見えた。

「あれ?? 私の目の錯覚かしら、、なんかあの「きな粉餅」みたいのは動いているように見えるわね??」  
少し気になってしまった。

恐る恐る、近づいて行くと、それは長い棒が付いた、「きな粉餅」  
であった。

「あら〜? やつぱり、「きな粉餅」だわね???」  
そう言つて、足でつんつんと餅の部分に触つてみた。

すると、その餅が、  
ぶるん、ぶるんと左右に動き始めた。

「え!!! なんなのこれ?? 動くの???」  
今度は触るのは気持ち悪いので、落ちていた棒を拾つて、その物体をツンツンしてみた。

すると、その物体が、ぐるん、ぐるんと転がり始めた。

「え〜〜!!! なんなの??」

「でも、そっちは水路よ!!!」

そう言った直後、その物体が、「ポツチャ〜ン」と水路に落ちてしまった。

「大変!!! 大丈夫かしら。。。?」

少し心配になって、その物体が落ちたところに近づいていくと、それが水底からゆ〜くりと浮いてきた。

「あら? カエルだったのね!」

そこには、緑色をしたアマガエルの姿があった。

泥や砂が付いていて、カエルには見えなかったが、それは紛れもなくアマガエルであったのである。

「あら〜??? このカエル死んだのかしら??」

手に持っていた棒で岸から浮いているそのカエルの腹をツンツンしてみた。

すると、そのカエルから

すぴー→♡、すぴー→♡と寝息が聞こえてきた。

「え!!! このカエル、、、まだ寝ているの??」

長い脚を引っ張って、陸に上げた。

「まったく、、、なんなの??? このカエルは!!!」

そう言って、ほっぺたをピシ、ピシと叩いて起こすことにした。

「ほおら〜、もう春よ〜。。。起きなさいよ〜」

ようやく、そのカエルが大きなあくびと共に目を覚ました。

「は〜、よく寝た〜！〜！〜！〜！〜！〜！〜！」

「えっ、あなたは！！！！」

妄想アマガエル日記(55) — 4月25日(木) 晴れ〜アマガエル銀次郎編〜

遡ること数週間前 @穴の中から穴の外へ -----

すぴ〜→♡ すぴ〜→♡ すぴ〜→♡

んがっ！！

ドッゴン！！！！

すぴ〜→♡ すぴ〜→♡ すぴ〜→♡

ゴロゴロ〜ードン！！

すぴ〜→♡ すぴ〜→♡ すぴ〜→♡

ゴロゴロローードン!

すぴ〜→♡ すぴ〜→♡ すぴ〜→♡

ゴロゴロローードン!

すぴ〜→♡ すぴ〜→♡ すぴ〜→♡

んがつ!!

ビチャ、ビチャ!

ゴロゴロ、

ビチャ、ビツチャ!!

ゴロゴロローードンゴロゴロローードンゴロゴロローードン!

ドーーーーー!!!!!!

ヒュ〜ン、ン、スポつ。

すぴ〜→♡ すぴ〜→♡ すぴ〜→♡

すぴ〜→♡ すぴ〜→♡ すぴ〜→♡



すぴ〜→♡ すぴ〜→♡ すぴ〜→♡

ムニヤムニヤ♡

妄想アマガエル日記(56) — 5月2日(木) 晴れ

そして、皆が口を揃えて驚いた。

「えっ！！！！！！」

「えっ！！！！！！」

「えっ！！！！！！」

「えっ！！！！！！」

「えっ！！！！！！」 「えっ！！！！！！」

「これは、いったいどうなっているんだ??」

先頭にいた与助が穴の外の光景を見て、ポツリとつぶやいた。

そこには、見える範囲すべてを赤色や白色の大きなツツジの花が咲き乱れ、この世のものとは思えないとても美しい光景が広がっていた。

真っ暗な穴の中から出て来たカエルたちにとって、その赤色と白色の美しく派手な色の大きな花は、とてもとても美しく、そして初めて見る光景だった。

特に皆が驚いたのは、その咲き乱れるツツジの下で、銀次郎らしいアマガエルがその赤色の大きなツツジの花を帽子のように頭に被り、白色のツツジの花をスカートのように腰に履いて、楽しそうに踊り、それを1人のツチガエルが腹を抱えて、爆笑しな

がら見ている光景だった。

穴の中から出たカエルたちが、ゾロゾロとその綺麗なツツジの花を口を大きく開けながら、見渡しながら銀次郎のところ近づいて行った。

そして、どうやらここは水路の近くらしいことがわかってきた。

「しっかし、、なんて！！綺麗な花なんだ！！！！」

「はじめて見たなく、、こんな綺麗な光景は！！！！」  
与助が感動しっぱなしで皆に話しかけた。

「確かになく、、去年のこの時期はまだ生まれていなかったからなく。」  
小太郎が相槌をうった。

「ほんつと！！この水路には去年ずっといたけど、その時は花は咲き終わっていたんだなく。」  
八助が七助や六助を振り返りながら話しかけた。

「なんて！！綺麗なんだ！！　ここはただの緑色の葉っぱだけの花壇だったからね。」  
六助が頷きながら答えた。

「いや、、スゴイわね♡　綺麗だわね♡♡」

「私はずっと雑木林の奥にいたから、この辺り来たことなかったから、初めて見たわ♡」

「こんな美しい光景が見れるだなんてね♡♡」

日出夫が目を輝かせて、周りを見渡しながら喜んでいた。

「あっちの奥も地面を芝桜が地面を覆っていて、全体がピンク色や紫色をしているし、、ほんと、見渡す限りカラフルで、綺麗だなく！！」

与助が手を広げて、久しぶりの外の空気をいっぱい吸い込み、花の匂いを体全体で感じていた。

そうこうしていると、銀次郎のところまで歩きつき、ツツジを被って周りが見えない変な踊りをしている銀次郎の肩を、与助が後ろからツンツンして話しかけた。

「オイオイ！」

「銀次郎、お前も起きたばかりだろうに、いったいこんなところで、何してんだ??」

「……………」

顔を隠していた赤色のツツジを持ちあげながら振り返り銀次郎が声をだした。

「ん??」

「あれ??君たちいったいどうして、こんなところにいるんだい??」

「いや、それはこっちのセリフだろ??」

与助が頭を掻きながら答えた。

「ん?僕は、ほらっ、花子ちゃんとただ遊んでいただけだけど??」

「花子ちゃん???」

与助が訝しそうに聞き返した。

「あっ、私が花子。ツチガエルの花子っていいまーす！」

ツチガエルが銀次郎の近くに来て、2人の話しを聞いて間に割り込んできた。

「あっ、あなたが花子、さんね。」

与助がちよっと驚いて、聞き返した。

「んで？なんで、お前はこんなところにいて、そんな格好をして、そんな変な踊りをしているんだ？って聞いているんだよ！」  
小太郎が与助の後ろから銀次郎に聞いた。

銀次郎が思い出しながら答えた。

「あゝ、まあ、寝ていたからよく覚えてないんだけどね。」

「どうやら、寝ている時に寝相が少しだけ悪かったみたいだね。部屋から出たみたいなんだよね。穴の中をコロコロ転がって、目が覚めたらここにいたんだよ。」

「穴の中のどこかが、地面が濡れているところがあつたと思うんだけど、そこで濡れたり、転がったりしていたら体中土だらけになったみたいだね。花子ちゃんが見つけてくれた時は、きな粉餅と間違えたくらいだからね。」

そう言うと、きな粉餅だった姿を思い出した花子が

「プっ、きな粉餅ってwww」と思い出して吹き出して笑い始めて、それを見た銀次郎もまた同じように笑った。

「まあ、そんなことだろうとは思ってな。お前が蹴って壁に凹みが出来ていたから、それを辿って来たら、ここに着いたってわけさ。」

与助が爆笑している2人を見ながら、少し呆れて言った。

「なるほどね。しつかし、壁にそんな凹み作つた記憶はまったくないけど、少し踵（かかと）が痛いから、コロコロ回転しながら壁を、踵落とし、みたいに蹴っていたのかもしれないね。」  
銀次郎が踵を触りながら言った。

それを聞いた花子が

「プっ、踵落としってwww」とまた吹き出し、笑い始めて、それを見た銀次郎もまた同じように笑った。

「わかった、わかった。」

与助が、くだらないことで笑いあっている2人を見ながら、少し前まで銀次郎のことを心配したことを馬鹿らしく思えてきた。

「まあ、それはわかったけど、倉庫から落ち葉とか無くなっていたけど、あれもお前の仕業か？」  
与助が笑い疲れて静かになった銀次郎に聞いた。

「そうそう！！花子ちゃんに僕らの部屋の話しをしたら、自分も作って欲しいなんていわれちゃてさ」  
銀次郎が照れくさそうに答えた。

「ほんとー！銀ちゃんは、器用で、力持ちで、カッコよくて♡」  
花子が銀次郎を見ながら、嬉しそうに言った。

「そう??？」

銀次郎が照れながら喜んでいた。

「わかった、わかった。」  
与助が呆れ始めた。

「まあ、みんなせっかく来たんだしさ、、冬を無事に超えることもできたわけだからさ、、パッと花見でもやろうよ！！」  
銀次郎が嬉しそうに皆に提案した。

「まっ、そうだなー！」

与助も嬉しそうに頷いた。

ちょうど、日も暮れはじめ、夕焼けがツツジの花の赤色と白色、そして葉の緑色を際立たせ始めた。

銀次郎が、与助と小太郎に赤いツツジの花を被らせ、白いツツジの花をスカートみたいに履かせて、3人で銀次郎の変な踊りを一緒に踊らされ、最初は嫌がっていた与助も小太郎も次第に楽しくなり、踊りはじめた。

そして、その3人の変な格好の変な踊りを見ながら、他の皆は腹を抱えて笑い、日が暮れるまでカエル達の笑い声がツツジの花とともに、その一帯を覆った。

つづく。



続きは当館公式 note (<https://note.com/toyotahotarum/m/m8542c0036333>) で配信予定です。





妄想アマガエル日記

---

2024年5月6日 更新

著者 川野敬介

イラスト //

発行者 //

発行所 豊田ホテルの里ミュージアム  
山口県下関市豊田町中村 50-3 電話 083-767-0350

印刷 豊田ホテルの里ミュージアム事務所印刷機

---

©豊田ホテルの里ミュージアム 落丁・乱丁本もあるかもしれません。

